500-1
1200900373867

池鳴全集

第十二卷

池鳴全集

第十一卷

正
10.11.22
内交

目次

自傳と追憶

僕の十代の眼に映じた諸人物 …… 二
周圍の活人物。後藤伯と大隈伯。馬場辰猪と中江兆民。ハイカラ者流。文筆の人々。東北學院と押川氏。
初旅の思ひ出 …… 一五
僕が書生時代の事共 …… 一六
反抗的の答案 …… 一九
教場で梵語の研究。答案に讖譯論。
記憶十想 …… 二三
一小リプヴンキンクル。二里朝と女房。三父。四三面記事。五毒婦の夫。六長髪壯士。七神の子。八猛犬。九盆の踊り子。一〇お松。一一牧師の家。一二岡見先生。一三お里さんの記憶。一四床屋の繼

子。一五發明家の妻。一六天長節。
僕を詩人にした女……七八
我は如何にして詩人となりしか……八二
『白百合』時代……九一
解答……九六
雜誌は大抵電車で讀む……一〇五
宗教より文藝に……一〇九
初めて得た原稿料の話……一一三
僕の回想……一一五
私の生活……一二三
僕の見た僕……一二七

小品及隨筆

春子と云ふ藝者……一三八
比叡山下の日吉祭……一五四
僕の娯樂……一六〇
ロスケ小屋……一六三
北海道の天然……一六八
讀賣社の時計臺から……一七六
車窓四季百觀……一八〇
滑稽の趣味……一八一
文藝的素養の缺乏。國民の趣味はポンチ。悲劇と喜劇。滑稽の品位。
病遊病的犯罪者。
東京潛伏時代の黄興……一九四
啞の犬……一九七
大阪の夏の印象……二〇一
大江橋。妙見さん。九官鳥と『一靜』とかじか。天神祭。
蜜蜂の話……二一三
詩人の養蜂日記……二四〇

蜂と人……二六六
日記の一節……二七〇
修善寺雜記……二七五
月に小便……二八四
伊吹山上の記憶……二八八
信州行の印象……二九二
佐渡の思ひ出……二九四
幸福な不幸……二九七
ダイヤモンドと侵略の話……三〇二
夜の虹……三〇九
揖保川の月夜……三一一
海上のいのち拾ひ……三一三
湖畔の一年……三一六
春の思。琵琶湖。叡山に登る。日吉祭。宇治遊記。津田三藏。十年。

ぶりにてめぐり會ひし婦人に贈れる書。伊吹山上の記憶。藤樹先生の跡。奈良の家づと。隧道狂。八日市の市。俠と狂。月の虹。紅葉狩の記。永源寺遊記。坂本の紅葉を見る。戀の隙者。砂防工事を觀る。月夜石山に遊ぶ。竹生島詣。新平民部落。湖上の虹。江州無名の勝地。再び兒を失へる記。雪の一日。雪の三井寺。思の種。二出版。僧に贈る。(附錄)兒を失へる記。
記行と印象……四三〇
旅中日記……四三九
旅中雜記……四七一
日高十勝の記憶……
ポホナイの瀧。猿留の難道。山上の萩の露。中十方の農村。新冠の御料牧場。火山灰地の狀態。
旅中印象雜記……四八〇
アイノの話……五三五

アイノの歌謠……五五一
樺太通信……五五八
樺太の話……六四三
日露の國境。火事の越年。鰊の群來。海賊跋扈時代。
樺太の殘留露人……六五一
樺太の花植物……六五五
氷上の舞踏會……六五六
樺太の女……六六九
メノコにはなか〳〵いいのがゐる。選等の戀の理想。樺太占領以前の露西亞人。ギリヤークの女。本邦人の女。四ダースごけ。邦領樺太の藝者。
海豹島の婦人生活……六六八
樺太の思ひ出……六七二

自傳と追憶

僕の十代の眼に映じた諸人物

周圍の活人物

書物を讀むことをおぼえると、人は先づ歴史で讀む人物を自分の標準にするものだ。然し僕は今、一そんな古い歴史上の人物ではなく、僕が十代の頃に注意した同時代の人物のことを述べて見よう。

僕の生れた國は自由黨の盛んなところであつたから、板垣退助氏の名は僕の子供時代からよくおぼえてゐた。從つて、當時、抽象的に熱狂してゐた自由と民權とを具體的にする第一歩たる國會の開設をばかり、分らずながら、呼んでゐたのである。

僕は、誰れしも初めは望む軍人になりたかつたのだが、それが體格上なれないと分つてからは、政治家にならうとした。ところで、僕は十三四歳の頃から耶蘇教を聽かされてゐて、大阪へ出た時洗禮を受けた。その關係上、新島襄と云ふ人が僕のあたまに這入つた。德富蘇峰氏の國民之友が出た頃で、その『新島先生と福澤諭吉氏』と云ふ論文が、僕にも新島氏の實際精神的にえらいことを教へて

吳れた。然し一つの疑問があつた。

それは外でもない。僕が耶蘇教の洗禮を受けた時は、僕の學校と教會とで非常な評判になつた。あんな徒らな、無頓着な、高慢ちきな悪書生が急に改心して、涙ながらに告白したばかりでなく、以後は一身を投じて傳導師になると決心したのは、一種の奇跡だと云ふのだ。僕の學校と教會とは同志社に關係があつたから、僕の受洗の日、新島氏も來合はして、熱心な祈禱をした。して、氏は聲を擧げて泣いた。熱心は僕も劣らないと思つたが、大の男が聲を擧げて泣くのは餘り女々しいではないかと、氏の態度に不審を抱いたのだ。僕は既に經驗的に女と云ふものを厭な物だとしてゐたのである。

やがて、僕の家がもとの東京へ再び移つて來て、芝に住ゐをしたので、慶應義塾は近いし、そこの塾生に友人もあつたので、福澤諭吉なる人が僕の注意を惹いた。然し敬服したのは、その平民的な態度と行動とに對してであつて、思想の餘り物質的なのには却つて悪感と侮辱とを持つてゐた。その『世界國づくし』などにも、初めて新體詩的口調をおぼえた。氏は初めて入塾した學生に面會すると、必らず家の貧富を糺した。して、貧家の子であると、學問をしても、どうせ社會黨などになり出すに過ぎないから、歸國して、鍬なり、天秤棒なりを持つ方がいいと斷言した。それほどまでに人間の精神を安く見ないでもいいのにと、僕は思つた。

後藤伯と大隈伯

僕は東京に來ても、直ぐ耶蘇教の學校に這入つた。官憲と官立學校とを蟲が好かないからである。然し教會や僕の周圍が宗教に思つたほど熱心でないので、僕は耶蘇教が人心に案外勢力がないことを解する樣になつて、傳導師志願などもやる氣がなくなり、もとの政治家になるつもりになつた。僕は初めから外國人と外國崇拜とが大嫌ひであつた。從つて、歐化主義の井上伯などが、外國人に日本を文明國と見せるつもりで、鹿鳴館に於て、盛んに舞踏會などをやつてゐたのを殘念で、殘念で堪らなかつた。僕が政治をやれば、あんな馬鹿らしいことはしないのにと思つた。

專修學校に經濟を修めてゐる時、校長の田尻稻次郎氏に接することになつた。この人は、新島氏のことは餘り知らなかつたにも由るだらう、少しも口にしなかつたが、福澤氏のことはよく冷罵した。一時間に半分は駄洒落で持ち切る講義の間にも、度々後者に對する冷罵をやつた。然しこの人は呑氣過ぎた人だから、卒業生に對する親切な世話のほかには、青年に大して感化を與へることはなかつた。

木戸、西鄕、大久保は七年もしくは八九年前になくなつて、板垣伯の自由黨は解散し、大井、新井、小林の諸氏は朝鮮刺戟事件の爲めに大阪に於て縛につき、井上、伊藤二伯が朝に立つて改正條約を工夫し、片岡、星、尾崎、中江、竹内綱、林有造等の諸氏が保安條例のクーデターに會ひ、後藤氏が大同團結を起し、日本憲法の發布となり、森有禮氏が刺され、大隈伯が爆裂彈に一脚を失すると云ふ樣なことから、またつづいて、第一議會の召集になつた時代である。

政府嫌ひであつた僕は、當時、伊藤伯や井上伯などの名聲が盛んなのを大してえらいとも思はなかつた。政府がはに立つた人で僕の注意を惹いたのは、豪放巨大な鑛山師政治家後藤象次郎氏と改正條約斷行に手傷を負つた大隈伯とである。いづれも、僕――のみならず、當時の青年すべて――が興味を以つてゐた爆裂彈を受けた人であるからでもあらう。して、この二氏とも、それを受けた現場に、僕は出くわした實驗があるのだ。

後藤伯は下高輪の通りでやられかけたのだが、僕が下宿――たつた二三日下宿したところ――の窓から首を出すと、伯の馬車が鳥渡毀れてゐた。然し伯自身は無事であつた。投彈者は直ぐつかまつたが、それが僕と同じ下宿にゐた男で、その男の押し入れにはまだ二三箇の爆裂彈――ブリキ罐に彈藥と石やかな屑とをつめた物――が殘つてゐたので、一時、僕までが嫌疑を受けて困つた。大隈伯が震ケ關の外務省前でやられた時にも、僕は神田へ通學する途中であつたから、忘れられない印象を殘した。投彈者來島恒喜が捕縛せられ、伯が外務省へつれ込まれた後には、その現場は非常の人だかりになつた。僕は學校の歸りにも――夜十時過ぎであつた――そこを通り、そこを徘徊し、まだ血の跡が殘つてゐはしないかと探して見た。

馬場辰猪と中江兆民

海外在留者として死んだ馬場辰猪・在野黨の奇行家中江兆民、この二氏は僕の最も尊敬したもの

だ。滿腔の經綸と愛國心とを抱いて、海外に漂泊してゐなければならなくなつた悲憤慷慨家馬場辰猪氏は、青年の好奇心と熱血とを刺戟しないではゐなかつたのだ。而もその精神は熱烈、態度は謹嚴。眉目は秀麗。ただ不平の餘り、花柳の巷に狂奔したことはあるが、その愛する女から、さうおぼれてゐては、からだの爲めにならないとまで心配されたほどに、上品な不平家であつた。然し青年の崇拜物として遺憾な點があつたのは、政黨の關係上、板垣伯を出し拔かうとした樣なことがあつたのと、米國で――生活上の方便でもあつたらうが――演說をするのに、わが國の鎧を着してやつたと云ふ芝居氣を見せたことだ。渠は二十一年の十一月、フィラデルフヤで客死したのだ。

中江兆民氏は馬場氏とは反對な性格だ。馬場氏が英學者、英國風で、謹嚴、方正、有作法なのに反して、中江氏は佛蘭西學者、佛國風で、態度や行動が粗放、無頓着、不作法であつた。氏の『三醉人經綸問答』などを喜んで讀んだ物だ。して、自由民權の實現を希望して、平民の爲めにいつも大氣焰を吐いて吳れるのを嬉しく思つた。殊に、新平民と緣を結んで――これは議會に入る手段でもあつたらうが――恥ぢなかつた如きは、僕の大いに贊成してゐたところだ。僕は子供の時から、自分は士族だが、士族平民の區別などを愚にもつかない物だと思つてゐた。その極、世人に遠ざけられる新平民と癩病血統とに多大の同情を持つた。

癩病に同情したのは、その血統あるものに僕の親しい娘の子があつたことと、大阪の學校にコルベとか云ふ外國婦人の敎師があつて、或時、僕に、自分は癩病なので社會にその血統を一家族でもふやさない爲め、獨身で暮すと語つて、泣いたことがあるのをおぼえてゐるからである。このコルベ孃が、どうしたものか、僕には、中江氏と共に聯想されたのである。中江氏はまた、あの粗放なのにも拘らず、感情家であつたから――無論、感情家過ぎて、それを隱す爲めに奇行を見せてゐたのだらう――中島湘烟女史の前で、どうも、寂しくつて困ると、泣いたことがあるさうだ。

馬場氏が僕の注意を惹いたのは、表面では、演說家としてである。その『演說術』などをよく讀んだ。中江氏のは、政論家兼文章家としてだ。僕は演說にも熱心であつて、青山練兵場へ、寒中、夜の二時頃に出かけて行つて、獨りで寒稽古をやつた頃であつたから、馬場氏の客死を聽いて非常に惜しく思つた。然し中江氏がゐるから、まだしも心丈夫な氣がした。氏が馬場氏の死を弔するに、『余が君の一生の中、一二度は相談することあるべしと思ひたのみならず、君も亦自ら余に相談することあるべしと思ふならん』と思つたとあるは、もつともなことだと考へた、然し中江氏の無神、無靈魂說には、僕がまだ有神論的感化を脫し切れなかつた時だから、全く贊成は出來なかつた。

ハイカラ者流

その他に、大井憲太郎氏は大阪國事犯の發頭人、急進的自由主義者として、片岡健吉氏は耶蘇敎的

政治家として、中島信行氏は湘烟女史の所天、最初の衆議院議長として、土佐自由黨派の植木枝盛氏並に最初の全院委員長島田三郎氏は、寧ろ耶蘇教並に婦人矯風會的演說者として、僕は注意した。すべて耶蘇教に多少の關係があつたもので、大井氏のが舊教で、片岡氏以下のは皆新教であつた。

また、國民之友に出る無邊俠禪、渡邊國武氏の禪的政論、同雜誌その他に出る勝海舟氏の脫俗的談話並に消息に由り、僕はこの兩氏に餘ほど注意を拂つてゐた。また、保守主義の代表者と云つてもいい谷干城、鳥尾小彌太、三浦梧樓の三氏が政府の激烈な反對者になつたこともある時代で、この三氏の意見はいつも古臭いと思ひながらも、その人々自身の主義主張に熱中してゐた——鳥尾氏は殊にさうであつた——のに僕は敬服してゐた。鳥尾氏の儒、佛、神、三教一致說の如きは、まだ見解が狹いとは卑しみながらも、喜んで讀まされたものだ。僕が今日、國家論に及ぶと、非常に保守的、否、日本主義的なところがあるのは、一つにはこの時の感化があるのかも知れない。

その癖、僕は今の所謂ハイカラ趣味を喜んだ。新思想に觸れるものがすべてハイカラ的になるのは、一時的現象としては當然のことであらう。井上伯が急に芝居を奬勵し、舞踏會を盛んにするのも、伊藤伯が頻りにビスマルクを氣取り出したのも、中江氏がルーソウを、尾崎氏がピコンスフイルドを、島田氏がグラツドストーンを、田口卯吉氏が自由貿易論に於てマンチエスター派を以て任ずるのも、皆、ハイカラ流であつた。かういふ者流のうちで、僕が小氣味のいいほど純ハイカラと見てゐたのは、馬場辰猪氏の英國カラ、光妙寺三郎氏の佛蘭西カラである。

最初の國會議員選擧に、僕が當選を心配してゐて、先づよかつたと思つたのは、一人は農商務大臣兼和歌山縣某區選出議員の陸奥宗光氏だが、今一人は光妙寺（末松に改姓した）三郎氏である。この人は、佛蘭西仕込みの平民的侯爵西園寺公望氏と共に、純粹ハイカラの元祖で。光妙寺氏は佛蘭西から歸朝して『爭也君子決鬪條例』と云ふ書を著はした。その議員振りを中江氏の批評に據つて證明すると、『蒼白の面、清秀の眼、婉委の體』、『巴里仕立の洋服を着けて、絹の半巾を提げて、而して議會の權を擴張せし』立役者であつた。して、政治家連の酒宴に交はり、他に卑俗な情歌などばかりを歌ふ間にあつて、流暢な聲を以つて流暢な今樣——わが國固有の優美な節だ——を歌つて、多くの藝者を驚かすなどは、實に、素養ある純ハイカラなところだ。決して鼻眼鏡的な、齒の浮く樣な出來そこなひとは違つてゐた。

文筆の人々

政治がかつた文章家としては、中江氏のほかに、福地櫻痴、德富蘇峰、朝比奈知泉、陸羯南の諸氏を讀んだ。小野梓と云ふ人は死んでゐたが、その人の政治的論著は僕の注意を脫しなかつた。川崎紫山氏の事大的文章もあつた。また、德富氏の競爭者として（らしく）打つて出た——して、成功し

なかつた――中西牛郎と云ふ人もあつた。學者としては、戸山正一氏の粗大だが、鳥渡新らしい耶蘇教論や文明論と、非官學主義者高橋五郎氏の飽くまで私學的な態度とに敬服してゐた。

また翻譯もしくは翻譯まがひの政治小說隆盛の餘波があつたので、『鶯宿梅』その他に於ける末廣鐵腸、『佳人之奇遇』に於ける柴東海散士、『經國美談』に於ける矢野龍溪の諸氏は、僕等青年の注意をのがれなかつた。かう云ふ諸氏の小說の文體は、堅苦しい漢文句調でなければ、曲亭馬琴風の七五くづしなどをいいものとしてゐた。『書生氣質』に於ける坪內春の屋主人も、まだ馬琴風のところがあつたかと思ふ。然し時代は、旣に同氏の『小說神髓』によつて呼び覺まされてゐたので、戲作者的だが、政治鼓吹や勸善懲惡などの目的から離れて、純小說なるものが新らしい文體（そのうちに、言文一致體も出來た）を以つて歡迎される樣になつてゐた。

矢野氏が『經國美談』で當りを取り、洋行することまでが出來たと聽いてゐたので、僕も一つ歷史小說を書いて、その儲けを以つておやぢの壓迫から獨立して、好きな生活をして見ようといふ野心を起した。矢野氏のをお手本にして、テイロアの古代史などを參考にして、ペルシャ王サイラスの傳を小說にした。前篇二百五十枚ばかり出來たので、これが歡迎せれれば直ぐ後篇を書くといふ（これは、ビコンスフイールドがホメーロスやダンテやミルトンの向ふを張る氣で公けにしたといふ史詩第一篇の序文を眞似たのである）序文をつけて、某書店へ賣りに行つた。ところが、この頃はかう云ふ文體は流行しなくなつたから、またその時節が來たらといふ返事であつた。僕の小說全體が馬琴よりも一層嚴密な七五くづしで行つてゐたのである。然し、僕に取つては、これが新體詩をやり出す最初の、然し無意識の練習であつたのである。

長谷川二葉亭氏の『浮雲』が歡迎されてゐた。山田美妙齋主人の『胡蝶』に於て初めた言文一致體が問題になつてゐた。その他、當時の小說家で、舊派では蓼庭篁村、幸堂得知等があり、新派では尾崎紅葉、幸田露伴等があり。批評家で時々創作をしたのは、內田不知庵、森鷗外、石橋忍月、大西操山等があり。僕には、また、井上巽軒、外山〻山、矢田部尙今諸氏は『新體詩歌』に於て知られた。また井上氏の漢詩『孝女白菊』を和譯したので、落合直文といふ人があるのを知つた。譯詩集『面影』並に『しがらみ草紙』に於て、森氏を知ることが一層深くなつた。『歸省』に於ける宮崎湖處子が、青年文學を發刊することになつた時などは、僕は同じくまだ書生ツぽであつた國木田獨步、加藤咄堂、田村三治の諸氏と共に、青年文學に對抗する文壇（後ち、日本文壇）と云ふ雜誌を出した。詩人として最も注意されたのは、國民之友に於ける矢崎嵯峨の屋、中西梅花、日本評論並に女學雜誌に於ける戸川殘花、磯貝雲峯の諸氏であつた。

當時、國民之友と日本人との兩雜誌は、思想界に於ける相反した二潮流の代表者であつた。前者は世界主義に近い平民主義で、後者は絕對的にと云はれるほど國粹論的であつた。前者は同志社系統の

人々（そのうちに浮田和民、横井時雄の諸氏があつた）の議論を掲載すると同時に、渡邊國武氏の斷片的氣焔、中江氏の高弟酒井雄三郎氏（この人も面白かつた）の政治的研究などを紹介した。後者はまた陸、三宅雪嶺、志賀矧川諸氏の舞臺であつた。雜文家であつて、僕に文學を吹き込んで呉れたのは、蘇峰氏と矧川氏と、それに高田半峯氏とである。そのうち、矧川氏は身づから理想とするバイロン皷吹に於て最も文學的であつた。僕等は演說の熱心家であつたから、（何とか云つた所謂演說つかひや大岡育造氏のをもだが）島田三郎、植木枝盛諸氏の政治的、社會矯風的演說をよく聽きに行つたと同時に、また、宮川經輝、海老名彈正、横井時雄諸氏の說敎に集つたと同時に、志賀氏の豪傑的、詩人的人物を追ふて、その演說をもよく聞きに行つたものだ。

東北學院と押川氏

そのうち、僕は種々の事情から非常に悲觀し出した。つまり、自分一個の獨立的考へが浮んで來たのだ。して、世の中がすべて厭になつたので、政治家的野心も何だか徒らに外表的な希望である樣に思はれ、さツぱり張り合ひのないものになつた。自由や民權、平民主義などいふのが、どうも、內容のない、描象觀念にさわいでゐる樣に思はれて來た。さりとて、もとの耶蘇敎僧侶志願に歸つて、一身を救世事業にまかす氣を起すほどに、周圍の空氣が振つてもゐなかつた。それまで信じてゐた神なるものも空想に過ぎないと思はれ、傳道に從事するものらの不熱心な狀態も、自分が共に力を盡す價値がないと見えた。これは獨りでエマソンを讀み出してからの變化だ。して、いつそ、自分の思案を初めから好きであつた文學、寧ろ詩に向けようと決心した。文學界が出たのはそれから二三年後、帝國文學が出たのはそれから四五年後のことだ。

僕は國の小學並に私塾を出て以來、先輩として接近したものは全くないのだ。以上に名を擧げた人人も、僕躬づからが發展するにつれて、僕躬づから發見して行つたのであつて、向ふから導かれた樣な氣がしなかつた。ところが、横井時雄氏の話で、米國から歸朝し立ての仙臺の押川方義氏（春浪氏の父）につくことになつてから、同氏を僕の先輩とも、第二の父とも思ふ樣になつた。當時、押川氏はさう廣く名の知れてゐる人ではなかつた。越後に於て耶蘇敎退治事件のあつた時、その目的となつた同氏が竹槍を以つて取り圍まれた間を泰然自若として通つたことがあるのと、新島氏に發見され、同志社に招聘の交渉があつたのを、あんな物の下につくものかと憤慨したのと、ニューヨークの路傍で外國人（乞食同樣であつたらう）に靴をみがかしたのを帝國主義的に自慢してゐたのと、米國の耶蘇敎は腐敗してゐると報告したのと、熱誠な能辯家であるのと、ぐらゐが普通の傳導者と違つてゐたばかりだ。して、精神敎育家として同志社の新島氏に對抗して、僅かに小さい東北學院の院長をしてゐた人だ。

大して學問もあるではない。ソシアルサイエンスを規則書に『社交學』と譯さしてあつたので、僕が『社會學』と直させたほど無智な人だ。然し、東京へ出ると、絶對に反對者とも見える日本人派の三宅氏などと會つて、よく話が合ふところがあるらしいのを見て、第一に、僕の帝國主義的な保守的方面が隨分滿足したのだ。押川氏の生命は熱誠な國家救濟的野心であつた。そのすることや考へ方には、間違つてゐるところがあつた。然し中江兆民氏の樣な不眞面目な分子は這入つてゐなかつた。『われ』の覺醒と『大事業』、このモットウは眞面目に標榜されてゐたのだが、仕事をすると、成功しない僕はいろんな語學と文學とを研究しながら、氏の範圍内に於て氏に反對もし、無理も云つたが、不成功の事業家――かう云ふ人物として、氏の精神は熱誠に燃えてゐたのである。(氏はその後、海外教育會の會長としても、北清事件時代の大酒保船發送者としても、現今のコンミツションマーチヤントとしても、いつも不成功の事業家である。氏は不成功のうちに、もう、時代後れとなつてしまつたが、僕の學生時代に於ける氏の精神的熱誠は歴史以外の歴史的人物たるに決して不足はなかつた。)

かういふ風にして、僕は僕の十代を送つた。僕に感化を與へたものは、僕が眼界が廣かつただけ、その數も多いが、今日に至るまで、僕が『先生』と呼ぶのは、跡にも先きにも、この不成功の精神家、押川氏ばかりである。

初旅の思ひ出

――十四の時――だまされて出した俥賃――

初めて國を出て神戸へ行つた時――獨りで行つたのだが――淡路から明石へ渡り、人力車を傭つたのである。國では城下から田舍の方へ何度も俥で行つた事があるが、それは何時も出入りの俥夫であつて、子供乍ら少しも氣が置けなかつた。ところが初めて國を出て素性も知らぬ者の俥に乘つたのだから、恥しいやうな、又恐ろしいやうな氣が初めからして居た。何でも十四の時であつた。

今はないが、舞子の濱あたりに、瀧の茶屋といふのがあつた。それは海岸の道を隔てて、その前に山から瀧を落してあつて、その瀧の水が家の下にずつと溜まつてゐて、茶屋は水の上に建つてゐるやうな具合になつてゐた。一寸面白いやうなところであつた。其處へ俥屋は僕を引込んだ。俥夫には何時も親しみがあるのだらうが、僕には何の爲めに引込まれたのか分らなかつた。俥夫はそこに出て來た女中に抱きついたりして巫山戯てゐるのだが、僕はその女に茶を持つて來られて、飲んで可いのか、飲んではいけないのか分らなかつた。といふのは、茶を飲めば金を取られるのだらう、さうして、金を出すとすれば、幾ら出して可いのかそれが心配になつた。つまり茶代といふものを僕が出す事を知らなかつたのだ。只默つて俥夫が行かうと云ひ出すのを待つてたが。茶には到頭手をつけなか

つた。

それを馬鹿だと見たのだらう、俥夫はそこから少し進んだところで僕を降ろした。そして向ふから來たから俥に乘せた。丁度此處が半分道だから代りますと云つたつけ。僕は何も知らないで別なのに乘つてると、湊川土手まで來て、降りて呉れいと云はれた。此處は金玉寺の通りかと訊くと、いや、いや、あすこまではまだ〳〵ありますとの答だ。ぢやそこまで行く約束だから行けと命じた。ところがそんな約束は知りませんと答へた。そして、俥賃を呉れいといふ。僕は前の俥夫に何知らず俥賃は渡してしまつたのであつた。つまりだまされて又俥代を取られた。

僕は方角も分らないところへ置き去りにされて、一寸間誤ついたが、此處が神戸と兵庫とを區劃する湊川だらうとは分つた。其處から又別な俥夫を雇つて、指して來たところへ行つた。これが僕の初めての他國に於ける旅で、同時に初めての失敗である。

僕が書生時代の事共

○

僕等の書生時代には、いろんな事が流行ツた。蕎麥屋とか汁粉屋とかの喰逃げをやツたり、掏摸に物をとらせて見たり、よくそんな下らぬ事をして面白がツたものだ。喰逃げなどは、ずツと其れよりも早い漢學書生など、殊によくやツたものだ。今では耶蘇教で立派に行ひすましてゐる植村正久の如きも、蕎麥屋の喰逃げをやツて威張ツてゐた時代もあツたんだ。

僕は一度、自分からしやうと云ふ積りではなかツたが、自然に喰逃げの結果になツた事もあツた。其れは八丁堀邊の汁粉屋に入ツて居た時、近所に火事が起ツた。それで店の者等は大騒ぎをやり出して、勘定の事などはそこのけになツて了ツたからだ。

○

其れから僕は、京都に居た時、夜、緣日などへ出て行ツて、若い女を見ると誰れそれさんと呼びかけて、恰も知ツてゐるものであるかのやうに其の女の手を握り、而してアア間違ツてゐましたと云ツて、引返す事が、書生の間に流行した。さう云ふ事をやツて成功した奴も隨分あツた。その仲間の中には、今では立派な官吏になツて濟ましてゐるものも僕は知ツてゐる。

六七年前にも、僕等の仲間で婦人を引つかけやうと云ふ意味ばかりでもないのだが、隨分ヒヤカシ半分に電車の上だとか、歩いてゐる途中だとかで、話しかけたりなどして小當りに、當ツて見た事がある。○○君だとか○○君だとかも隨分そんな材料を供給した仲間であツた。或る人なぞは、それで立派な或る女學校の女教師と親しくなツて了ツた。

僕などは、いつも失敗してゐた方であツたが、或時、芝橋を通ツてゐた時、雪の降る日であツた

が、一人の婦人がセッセと急いで僕を通り過ぎかかッたので、ヒヤカシ半分に、晝飯を一緒に食べやうぢやないかと言ッて見た。ところが其の婦人は、之れも矢張りヒヤカシ半分に、どうしてそんな暢氣なひまはありません。今直ぐに帝國議會へ行かねばならないんです。と云ッて立停りもせずに行ッて了ッた。

其れは五六年前の事だが、此間家の遠藤（新夫人清子女史）と話してゐる話の中に分ッた事だが、其の婦人と云ふのは、遠藤であッたんだ。そんな事もあッた。

○

僕が十七八の時、小說を書いて其れを賣ッた金で、親父から獨立して親父の許さない文學を自由に研究しやうと云ふ野心を起した事がある。其の時小說が賣れたら返すと云ふ約束で或る友人から金を三四圓ばかり借りた。處が、其の小說は無論賣れなかッた。親父には學校の事もやらないで、そんなものを書いてゐると云ふので叱りつけられた。で、とう〳〵其の友人にも借りた金を返す事は出來なかッた。友人からは度々催促が來た。けれども如何する事も出來ない。唯だことわりを云ふばかりであッた。

其の後、其の友人を訪ねて見たら、人の二階を借りて鍍金屋をやッてゐた。然し其の職業は一向にはやらないで、間代や辨當代が二三ケ月分も滯ッて、それを拂ふ事が出來ないのでプル〳〵顫へてゐた。僕も氣の毒になッたが、其の際如何ともしやうのない位置に居たので手の出しやうがなかッた。

其の時の印象は今でも忘れない、其の友人には以來一度も逢はないのだが、今でもモう一度逢ひ度ひと思ッてゐる。で、若し此れを讀んだ諸君の中、思ひ當る人があらば僕に住所を知らせて貰ひ度いものである。

反抗的の答案

教場で梵語の研究

僕が仙臺東北學院に居た頃など、試驗は私立學校ではあり、あまり重きをなさなかつた。

全體僕が同校に行つたのは、自分では教師になる心算で行つたのだが、行つて見ると入學試驗をすると云ふ。馬鹿げて居て、碌に返辭もしなかつた。無論西洋人に試驗を受けた。而して一年級に拋り込まれた。教師に行つて、一年級に拋り込まれた人間は、僕より他には有るまい。

當時は押川と云ふ、春浪君の父が、校長をして居た其人を僕は第二の父とも思つて居た。今でも思つて居る。其人の言葉通りになつて居たんだ。而して自分の勉強さへ出來ればいいと思つた。

さう云ふ狀態であるから、學校の課業等は碌に勉強せず、自分の好きな外國の詩だとか、評論だとが、色んな語學とかを獨學して居た。無論、其拋り込まれた級の學科なぞは馬鹿にして居たからであ

る。

教場にゐて西洋人が、英語で動物學を教ふる前で僕は梵語の文典を讀んだりなどして居た。そして試驗頃になると、面倒臭いから旅行に出てしまつた。そして試驗のすむまで歸つて來ない。すると。岩野は又今回も試驗に出なかつた、と云ツて、西洋人から小言が出て、幹事から僕に、試驗をなぜ受けない、と云ふ樣な小言が來る。其麼時にな僕は、其れがいけなければ退校さすがいい、と云ふ樣な事を云つて、平氣で居たものだ。無論或事情が有つたのだから、其麼氣儘を云つて通つて居たのだ。僕一個にとツては、其年々々の學科等はすぐに、大體は會得して居たからである。

答案に飜譯論

まあ其麼事が有たんだが、試驗で思出すのは、僕をずつと昔し、海軍省の或部分の編修書記に、推薦する者が有て、試驗を受けに行た時の事だが、其部長たる人――當時の海軍大佐――が出て來て、餘り横柄に言葉を使ふのが癪にさはり、試驗を受けないで、其儘歸つて來やうと思つたが、其人間の世話になつて居る人が、僕を推薦した手前もある事だからと思つて、試驗を受け出した。

第一に英文の飜譯であつた。其が學校でやる試驗の樣に、短い句を一つ位引き出して一題にして有る。其麼試驗のやり方では、自分を試驗する途でないと思つた。だから、其次の科目の議論文に飜譯論と云ふのが出たのを幸ひ、飜譯と云ふものは、文章全體の意味を解するなら、其文中の一節一句が充分明然解るもので、僅に一句二句を引出して、其れを譯さして飜譯の力を見ると云ふ樣なやり方は、試驗官の不注意である。之を以て飜譯論の一節とする、と云ふ事を書き加へた。其れから又次に記事文の問題が出た。履歷書に仙臺に居たと云ふ事が有るので、『松島に遊ぶの記』を書けと云はれた。それで僕は松島の幽邃の景を叙したあとに、這う云ふいい景色を見た事は見たが、之を以て今日の試驗問題にならうとは、夢にだも知らなかつた、と書き加へた。さうして、知らぬ風をして僕は歸つて來た。

十日經つても廿日經つても返辭がない。採用されたかされぬのか分からない。僕はどうせ駄目だと思つて居た。ところが推薦した友人が却て心配して、其大佐の處へ訊きに行くと、大佐は僕の試驗答案をとり出して、友人に見せ、這う云ふ反抗的な答案を書く人間なら、とても官吏には向かない、と云つた相だ。

ところで、さう云ふ事をしたのは僕ばかりではなかつた。其候補者として僕より以前に試驗を受けた者も、やつぱり其麼失敗をしたのであつた。其人は、答案のしまひへ以て行て、帝國萬歳萬々歳と書き加へた。それがいけなかつたのだ。

記憶十想

一　小リプワンキンクル

野依と家は士族であつたが、淡路の城代稲田氏の家來で德島藩主から云へばまた家來だ。僕等の家は同じ淡路にゐても、藩主蜂須賀氏の直參であつた。稲田騷動といふのがあつて、――これは淡路の城代が獨立の逆心があると見爲され德島藩がはの家來どもが奮起して、稲田氏の屋敷に攻め寄せた騷動だが、――以來、直參派とまた家來派とはにらみ合ひの姿になつて、その間では、子供同志の交際をも親達は心よしとしなかつた。また家來の士族は、僕等から見れば、一段下つた人間の樣であつたのだ。

然し野依家の主人も擊劍の上手であつたから、その理由を以つて警察の擊劍教師兼探偵を拜命した。僕の父は、その時、大分上の巡査であつたから、野依氏はその下に附くことになつたのだ。それからといふものは、僕は野依家へも遊びに行き、そこの細君を『叔母さん、叔母さん』と呼び、その總領息子の勇さんを弟の樣に親しんだ。然し、僕はやがて勇さんにも遠ざかるし、叔母さんをも好かなくなる樣になつた。これは決して士族の種類の如何から來た反感ではなかつた。

野依の叔母さんといふのは、家附きの娘であるを鼻にかけて、その所天に强く當るのだ。僕等は、

苟も巡査をしたり、探偵をしたりするものなら、泥棒を捕へたり、博奕打ちを取りひしいだりするので、充分强い男であると思つてゐた。ところが、野依氏はその細君である女風情の前へ出ると、鼠が猫の前へ出たと同じ樣にちいさくなつてしまう。好きな酒を飲むのさへ細君のさしづに從つてゐなければならない、して細君は氏の思ふ樣には飲まさないのだ。その上、ぽん〳〵云つて所天を叱りつけるのが、近處のおほ評判になつてゐた。僕は、それが野依の叔父さんに對して、一番氣の毒だと思ふにつれて、叔母さんの心が憎くなり、叔母さんその物が憎くなり、勇さんが憎くなり、つひに野依家全體を厭になつたのだ。

それに、今一つ野依家を厭になつた原因がある。野依の叔父さんが、警察の春期秋期の擊劍大會がある時は、必らず僕の父と共に東西の兩大關に坐わるので、その仕合ひを見に行つてゐる勇さんと僕とは、いつも、そのたんびに心で各々自分のおやぢが勝つて呉れればいいと思つた。僕はそれを外面にはあらはさず、いよ〳〵兩者の仕合ひになると、手に汗を握るばかりだが、勇さんは僕よりも年しただけに、あたりをかまはず、『さア、大關同志の立ち合ひだぞ』と、一生懸命な聲を擧げる。して、勝負は大抵決せずに濟むことが多い。今から思へば、審判者の命令に從つて、八百長をやつてゐたのだらう。然し割合ひに勝敗には淡白な僕の父が無頓着に負けてしまうことがあると、野依家ではそれを一年中の誇にするのだ。その仕合ひが濟むと、最後に東西源平に別れた瓦器割りが初まるのが常で

あるが、或時、僕の父が野依氏を捕へて組み打ちとなり、柔術の手で氏を壁のあなたへ投げ飛ばすと、氏はまだ瓦器が無事であつたので、父を追ツかけて來て、再び組みひしぎ、今度は父が投げ飛ばされた。

この野依氏が細君にはあたまがあがらず、好きな酒も思ふ樣には飲めなかつたのだ。それが不平であつたのでもあらう、やがて警察の方を辭職して、獨り播摩の國へ渡り　そこの某牧場の馬飼ひになつた。馬術にも長けてゐたからである。すると、その妻子も亦國を引き拂つて、そこへ移住して行つた。もつとも、その宅地だけは親類のものにあづけてあつたのだ。

すると、また、半歲も立たないうちに、野依氏の妻子だけが歸つて來て、もとの家に住むことになつた。渠等の樣子が前とは丸で違つてしまつた。して、野依氏はどこへ行つたか分らないのだ。その行き方が知れなくなる以前から、野依氏は馬を馴らしながらも變な樣子が見えたさうだし、家にゐても氣が觸れた樣であつたさうだ。神隱しに遇つたのか、天狗にさらはれたのだといふもののもあれば、餘り細君が冷刻な取り扱ひをするので、どこかへ身を隱したのだといふものもある。兎に角、細君が金を渡してなかつたから、無手で出たツ切り、どちらとも分らないで、二年ばかりを經過した。

すると、或日、同家へ山行きの男が來て、

『ここの御主人らしい人が、ぼろ〳〵の見すぼらしい風をして立つてゐた』から、案内しようと云ふので、總領子息の勇さんがつれ立つて行つた。お城山の奥だ。

この城山とは、その絶頂に秀吉時代の脇坂氏の城跡がある山で、稻田氏の屋敷跡から登つて行くと、大蛇が海岸のさざえなどを喰ひに下りる通り路だといふ、茅がやで圍まれた間道を通つて、絶頂の城跡に達しられるが、そこにはちはばみの住みかだといふほら穴がある。その穴のかたはらの岩に、果して勇さんの父が腰かけて、ぼんやりと晴れた空をながめてゐた。衣物は、雨風に打たれたせいか、ど黑くあか染みて而もその袖や裾はぼろ〳〵に裂けてゐる。

『お父さん！』かう云つて、勇さんがかけ寄ると、氣がついてびツくりし、きよろ〳〵こちらを見てゐたが、思ひ出した樣に、

『お前のお母さんは薄情だ』と云つた切り、そこを動かうともしない。勇さんと山人とが無理にそれを促して、つれて歸つた。

いろ〳〵嫌す樣にして、どんな生活をしてゐたのかを聽かうとしても、氣拔けがしてゐて、何事も分らない。或人の話しに據ると、その樣な風をしてゐた人なら、時々八幡のお社うちで見かけたが、お宮の末社の石段にあがつたこゐ飯を取つて、喰つてゐたこともあるとのことだ。泥棒する氣力もなかつたらうし、乞食をしてゐたのなら直ぐ見付けられたらうし、先づ察するところ、夜中に出て來て、八幡宮の末社、末社にあがるお供物などを取つて生活してゐたのが本統らしい。それにしても、

播州の牧場を出てから、明石に來たり、明石から和船に乘せて貰つて、岩屋の浦に渡り、それから徒歩して洲本に來て、城山に籠つたに相違ない。

兎に角、靜養さすのがいいといふので、逃げ出さない樣に注意して、家で思ふままにさして置いたら、多少正氣に返つたが、やつぱりゐなかつた間の消息は語らないので、誰れしもその不思議な二年間のことは分らずに濟んだ。

八幡宮のお供物から思ひ付いて、世話人がそこの神主の下役に周旋し、暫くはそれを勸めてゐたさうだが、その頃、僕は、もう、國を出てゐた。その野依氏は間もなく無意義に死んでしまつたさうだ。例の二年間の山住まひの歷史が分らなかつた樣に、その病源も亦分らずに濟んでしまつたのだ。

して、その細君は相變らず冷淡で、決して涙もこぼさなかつたさうだ。

かの女並にその子息の勇さんに、僕はその後過う機會がない。

二　里朝と女房

僕のうぶすな神に當る明神の社は、境內が狹いが、楠の木の大きな古いのが澤山立つてゐて、そのあちらこちらにふくろふの巢があつた。僕の家からもその鳴き聲がよく聽えた。

ふるつく、ふう〳〵。ふるつく、ふう〳〵。かう云つて、よくその聲を眞似たものだが、夜中に眞似ると、この鳥は、魔物であるだけ、人の死ぬまで鳴きやまないと敎へられてから、僕はおそろしくなつた。して、夜、母や姉につれられて湯に行く時、どうしても明神の森のそばを通らなければならないのを、つらくて〳〵たまらなかつた。きツと、そのふるつくふう〳〵があたまの上で聽えるので、僕は今にも自分の身に魔物が迫つて來る樣な氣がして、いつもそこを逃げる樣にして通つたのだ。

ところが、或日、明神の神主のいたづらツ子が楠の木の一つによぢ登つて、ふくろふの巢を見付け、子を二羽捕へたので、僕はそれを見に行くと、二羽とも足を絲で結へられて、とまり木につくねんと止まつてゐる。この鳥に限り、晝間は視力が利かないと聽いてゐたが、目だけはぱツちりと圓くあいて、神主の子の目つきによく似てゐた。

それで思ひ出すのは、この子の姉のお定だ。やツぱりふくろふの樣な圓い目をして、僕を可愛がツて呉れた。里朝といふ太鼓持ちの女房で、亭主が亭主だけに、かの女も亦人にはなか〳〵愛相がよかつた。ただ困るのは、夫婦間のいさかひが絕えないことだ。お定と僕の父とが關係してゐるといふ評判もあつたが、僕は、子供の時だから、それが實際であつたか、なかつたか知らないが、かの女が幾たびも僕の家へ飛び込んで來たのはおぼえてゐる。丸髷ががツくり仰向いて、衣物の袖口や袖つけをほころばされ、泥まみれになつて——時に依ると、顏や手になま疵を受けて、血だらけになつてゐた

こともある。お定はいつも悟氣深い亭主に追はれてそとへ逃げ出してまでも夫婦喧嘩をするので、誰れしもそれを知らないものはなかつたのだ。亭主は怒つて双物三昧を演じることもあつた。して、さんざんな目に會はされると、お定は必らず僕の父に訴たへて來た。父は

『またか？』と、うるさがつてゐたが、目がほに愛嬌がたツぷりで、色が白く、肉つきのいい女のことであるから、――僕でさへ好きであつたから、――むげに突ツ返すことはなかつた。その度毎に、父は必らず亭主の里朝を呼び寄せて、懇々と說諭してやつた。里朝も僕の父には一言もなかつた。といふのは、本職が太鼓持ちだから、成るべく祝儀を貰ふお客の多いのを望むと同時に、賭博好きといふ癖を持つてゐるからである。

『里朝、貴樣の夫婦喧嘩はいつも一家の私事だけではないぞ、みんな貴樣の博奕をするから起ることだ。いい加減にやめないと、あげてしまう』と、父はいつもおどしつけるのだ。すると、里朝はあたまに手をのせて、疊にぺた〳〵お辭儀をする。その樣子がやツぱりお客の席へ出て、太鼓を持つ時の樣だと云つて、そばにわめいてゐるお定が吹き出してしまう。それでその場は無事に濟んでしまう。すると、やがてまた同じことが繰り返される。人は里朝ばかりが惡いのではない、お定の燒き餅もひどいのだと云つてゐた。

實際、里朝もいい男であつた。して、新地一般に第一の贈入りであつたから、藝者を初め、藝者屋、料理屋のおかみや仲居までが、

『里朝さん、里朝さん』と云つて持て囃した。して、決して人をそらさないから、渠にかかつては、お客はどんなものでも財布のありツたけを捲きあげられてしまう。また、聲がよく、歌が上手で、踊りをさせても驅け出し藝者などは足もとへも及ぶところではなかつた。或時、新地の賑はひに、急仕立ての屋臺を露天に造り、藝者の手踊りを公衆に見せたことがあるが、その時、最後の裸踊りがあるに先立つて、里朝が黑い絹股引に尻からげて出て來て、すぼめたから傘を持つて、

『今頃は半七さん』を踊つた。僕も見に行つてゐたが、それを見て、太鼓持ちの生涯は面白いものだらうと思つた。して、いよ〳〵藝者の裸踊りとなつたが、その中ばにして、僕の父の下役が屋臺の上にあらはれ、中止を命じてしまつた。

その頃のことだ――僕が小學校の歸り途で、明神の鳥居前を通りかかると、お定は髮を亂だして徒足で走つて來ると、里朝はまたその跡から家を飛び出し、血相を變へ、出刃庖丁をひツさげて追ひかけて來る渠も徒足だ。して、渠等が社の境內に這入ると、そのまた跡から追ひかけて行つた人が里朝の出刃を奪ひ取つた。すると、さきの二人は鬼ごツこをしてゐる樣に一方の高麗犬のまわりを二三度驅けまわつた。追ふ者が踏みとまると、逃げる者も亦踏みとまり、それからまた逆に一二度まわつた。驅けたり、とまつたりして、とう〳〵里朝はお定を捕へ『この野郎』と蹴倒して、思ふ存分にぶ

ちのめす。お定は倒れて『助けて吳れい』と悲鳴をあげる。そこをやうやく引き分けられるといふ芝居であつた。

僕は、それを目擊しながら、渠等の眞面目な樣で滑稽なのを不思議がらずにはゐられなかつた。渠等の悠氣喧嘩はよくこの神社內で晝夜にかかはらず行はれるので、そこで埒のあかない時は乃ちお定が僕の家へ逃げて來る時だ、僕の家へ來るのは、僕の父が警察官たるの故を以つて、お定がお上の威光で自分の亭主を征服してしまはうといふのだから、よくそのつもりは分つてゐる。が、然し、おまゐりの人もある明神の社へ、わざ〳〵逃げ出して行くのはどういふ譯であつたらう？

かの女の目つきに似てゐるふくろふの住みかだからといふわけでもあるまいし、人に見られて見ツともないぐらゐのことは知つてゐたらう。僕はその時考へたに據ると、苦しまぎれに家を飛び出す以上は、明神の森は不斷がらんとしてゐて逃げまわるのに都合がよかつたのも一つの理由であらうが、今一つおもな理由がある。僕等は、春日大明神の前に立つと子供並みにうやまひ畏み、楠の木の繁つてゐるだけでも何となくおごそかな感じに打たれる上に、例のふくろふの住みかであるといふ聯想から、夢にうなされる時の樣なおそろしみをおぼえるのが常であつたが、お定に取ツては、その靈地が神主なるその父の領內であるから、自分のうちも同樣であつたのだらう。如何に晤夜でも、子供の時から慣れてゐるところは凄くも、おそろしくもないのだ。その上、かの女が結婚してからも、長年そのそばに住んでゐるのだもの——お定が里朝に苦しめられる家は、却つて、かの女には、僕等の森であつて、——こわいところにも、またその味はひがあるといふことは別として、實際の森は寧ろかの女に僕等が僕等の家に對すると同樣な親しみがあつたのだらう。僕はかう考へて、子供ながら、かの女の外界は、僕の內心で、僕等の內心はかの女の外界である轉倒を、何となく、意味ありげに受け取つた。

して、それまで僕がこわがつてゐたふくろふも、神主の庭で神主の子にもて遊ばれてゐるのを見ると、案外可愛らしいものになつたと同樣、なま疵の絕えないお定の色白な圓がほが僕には忘れられなくなつた。

『坊さん』と云つて、お定に聲をかけられる毎に、僕はその亭主の里朝がいよ〳〵憎くなり、これと正反對に、かの女をます〳〵ゆかしみ、なつかしみ、戀しむ樣になり、僕のうぶずな明神の森を思ひ出すたんびに、自分の母とも見れば見られる者に對して、ひそかに顏を赤めることが多かつた。

三　父

僕の父は堅忍不拔、至極實直なのを以つて人に信用されてゐた。僕の家へ養子に來て、養父の大酒を飲み散らした莫大の借金を養父の死後、一身に引き受け、所有の宅地や公債には少しも手をつけ

ず、還卒や巡査から警部を勤め、毎月貰ふ僅かの俸給をやりくりして、拾年餘りの間に全く爲しくづしてしまつた。先祖代々の地東京へ出たいといふ望みを押へて、その間の辛抱ツたら、今でも思ひやられる。不平もあつたに相違ない。癇癪も起したに相違ない。屢々憂けなくもなつたに相違ない。然し父は若い血しほと涙との道を絶ち、死んだも同前のつもりで辛抱したらしい。僕の記憶に殘つてゐるその時の父は丸で木石同樣であつた。

然しやツぱし人間であつた。人間の弱みはまぬがれなかつた。借金の全部が、もう、一二年で返へせるといふ時機になつてから、急に心がゆるんだのであらう、意外にも女狂ひをし出した。僕の母や姉の非常に心配してゐるにも頓着せず、うその病氣缺勤をやつて、二三日も家に歸らないこともあつた。非番の夜などは、家に寢るのは稀れで、大抵女のもとに泊つた。それが爲めに出勤時間が後れ、進退伺ひを出すことが度重なる樣になつた。

父の女は幾人も變つたらしいが、最も深く父が溺れ、また最も深く女の方から入れあげたのは、妙樂庵といふ汁粉屋兼料理屋の娘だ。娘と云つても、その時二十五六の年增で、もとは誰れか別に旦那があつたのだが、それをふり棄てて、慾得なしに父を思ひ込んだらしい。そのまた姉も一緒にゐて、女ふたりが主人で店を開いたのだ。その姉は父の下に探偵をしてゐるものの思ひ物であつた。母はいつも、僕等に、あの探偵が父をつれ出すのだと、云つて恨んでゐた。

探偵もなか〳〵腕利きであつたし、父も長年眞面目に勤めた効績があつたから、上官は父等の不行跡を知らないでもないが、時々注意するくらゐだけで、免職などの心配はなかつたらしい。僕は一度、父の遲く夜遊びから歸つて來た時、憤慨の餘り、寢床から飛び出して行つて、

『免職になつてしまうぞ！』と、ただ一言云つた切り、わツと泣き出した。

『何オぬかす！』と、父は僕をしかりつけて、床に這入つた。僕も別室にある自分の床に返つたが、涙がとまらないので、枕が冷たくなるほどになつた。その夜、父は母のあたまをなぐつた。母も恨みを云ふ度になぐられるのは殆ど承知の上らしいが、うちどころが惡かつたかして、櫛が折れて、その齒のさきが皮膚にささつた。父はびツくりして、あぶら藥を出し、母の傷ぐちへ塗つてやつたらしかつた。

僕等はこわくつてそばへ行くことも出來ず、またまんぢりとも眠られなかつたが、夜明けがたに、母は兄――僕等の伯父――に相談しに行くと獨り言の如く云つて、家を出た。すると、父が間もなくまた出た。僕は、どうなることかと、その跡を追つた。

屋敷のおほ門のそとで、母は地べたに泣き伏してゐる。行く、やらぬといふ爭ひの末、父は力づくで母を引ツ張つて來た。まだ人通りもなかつたから見られもしなかつたが、若し見られたらどうだ

らうと、僕は心配しながら、きよと〳〵跡について家に這入つた。

父はその後間もなく、上官の注意で、假屋浦といふ在所へ轉任を命ぜられたので、女との直接關係は絶えた。女はお峰と云つた。あの年をして、えらいと云へばえらいのだらうが、僕等の英語研究會へ通つてゐた。ぐる〳〵卷きの束髪で、眼鏡をかけ、氣取つた調子で、ペンとかペンシルとか語り、毎日スペルリングを二三章づつおぼえて行くのだ。僕はその聲を聽くさへ厭であつたから、寄りつきはしなかつた。

父は假屋では再び實直に勤務して、たび〳〵賞狀を貰つた。えこひいきのない、公平な取り扱ひは、父の勤務に於ける生命であつた。或時など、山林に關して甲乙兩者の間に所有權爭ひが起つた。裁判に出すまでもなく、父がそれを公平にまとめてやつた。利益を得た方が、そのと禮して、ひそかに金錢を贈つて來たが、父はそれをはね付けた。すると、その翌日代はりに、大根やら蕪やら、山の如く荷車に積んで贈つて來た。それをも斷はるのに、無理に置いて行かうとしたので、父は怒つてその人の横ツつらをぶちのめしたさうだ。

『お父さんは堅い人だよ』と、僕が假屋へ遊びに行つた時、母が僕に聽かして呉れた。その癖、お峰が一度母に隱れて父に會ひに來たさうだ。

僕は父があんなに女にのろいのに、一方ではまた實に心の堅固なのを不思議に思ふと同時に感服してゐたのだ。

四三　面記事

僕が何歳であつたか忘れたが、子供の時から、淡路新聞社といふ社があつて、社長は漢學者として有名な老人で、そこから淡路新聞といふのが發行されてゐた。僕の姉と同社のおもな一編輯員との間の結婚談が持ちあがつて、もつともそれはまとまらなかつたが、それが爲めにそんな社もあることが僕に分つたばかりで、其の新聞なる物がどんな物であるかと云ふことは全く知らなかつた。ところが、或時、僕の家へ飛び込んで來た事件があつて、それが掲載された爲め、なるほどあんなことを毎日書きあげるものだと合點した。

僕の家は、先ケ峰といふ相模取りが開業してゐる宿屋と、練り壁を隔てにして、呑中合はせになつてゐた。壁に添つて、三間幅ぐらゐの裏庭があつて、その左右の隅に、一方には枇杷の木、一方には柿の木が植はつてゐた。枇杷の木には毎年花が咲いて、黄金色の實が鈴なりになつたが、柿の木は花も咲かず、實もならず、ただすら〳〵と上にばかり延びるのであつた。僕等はそれが殘念で殘念でたまらなかつた。人の庭や山の柿はいつも赤く甘さうになるのに、自分のうちの木ばかりは、なぜあんなに馬鹿だらうと思つた。餘り上にばかり延ばしてはいけないといふことを小耳にはさんで來て、僕

は父にその枝を平たく廣げる樣に頼んだが、父は別に氣にもとめず、どうせ日當りが惡いのだからと、うツちやり離しにしてあつた。

いつそ、柿の木の方は切つてしまはうでないかと云ふ動議が子供連中から起つたこともある。といふのは、その木も枇杷の木も、練り壁に接近してゐるので、若し泥棒が來て、壁を渡る樣なことがあつた時、傳つて庭へ下りる手つだひをするばかりであるからだ。では、柿に限らず、枇杷の方も切らなければならない、それは惜しいといふ異議もあつて、そのままになつた。實際、泥棒が這入りかけたこともあつたのだ。

父が當直の夜、母が夢のうちから目を覺ますと、緣がはにあがつてゐるものがあるらしく、板戸のこツちの方をごとりと輕く叩いて見るかと思へば、またあツちの方を輕く叩く。戸締りの工合を調べてゐるのだ。氣味が惡くなつたので、母はおほきな聲で僕等を呼び起した。それッ切り音はしなくなつたが、翌朝戸を明けて見ると、泥の足で長い緣がはを度々行き來した跡がついてゐた。父が歸つてからよく調べると、僕等の心配してゐる裏の方から來たのではなく、表の露路ぐちをのり越え、露路のなかへ這入つてから、その木戸の締りをはづして置き、その路につゞいて裏へまはつたのだ。僕等は、それからといふもの、一しほ夜がこわくなつて、鼠が戸を餘りがたがたさす時など、まだ來たのではないかと、わざわざ母を呼び起しに行つたこともある。そんな時には、母は、僕等に、こそ〳〵泥棒はあんなおほげさな音を立てるものではないと云つて聽かせた。

ところが、或夜、まだ遲くないのに、また、壁の瓦が折て庭へどたりと何か大きな物が落ちた樣な音がした。父がゐたので、直ぐ出て見ると、おほきな男が石を踏んで緣がはにあがらうとするところであつた。父は電光石火の勢でその男を捕へ、座敷へつれて來て、火鉢のそばにさし向ひになつた。見れば、往來で出會ふと僕に『坊さん』と聲をかける、して時々僕の家へも『お願ひが御座ります』とやつて來る、平吉といふ遊び人だ。

『白狀しろ』と、父に嚴格に迫られ、申しあげますが、實は云々と陳述するのを聽くと、先ケ峯の奥座敷で賭博をしてゐたところが、巡査が二名店へやつて來たのを、店のものは、調べに來たと思つて、奥へ合圖したので、窓から逃げ出し、裏の塀をつたひそこねて落ちたのだ。

『それがあなた樣のお宅の庭であつたとは、絶體絶命、もう、覺悟致しました』と、平吉は父に向つて抵抗しないことを誓つた。今一人相棒がゐたのがだ、それは庭をおもて木戸の方へ逃げ終せた。平吉はまごついただけそれに後れたのだ。

『何しろ、警察署に來い』と、父は渠をつれて出て行つた。

平吉はその途中で小便をしたいと云つて、その透きに乘じて逃げ出し、漁師町の或一角を逃げながら三度までまはつた。從つて、父も三度までまはつたわけだ。渠も大の男だが、父も亦それに負けないほ

どの力はあつた。その力も盡き、息が苦しくなつて來たので、平吉も倒れるなら、父も亦つまづくなど、互ひに二三度は倒れたり、起きたりして、追ツつきかけては逃げられ、追ツつかれかけては逃げたあげく漸く父は再び平吉を捕縛して、署へつき出した。相棒の方は、それから拾年間どこかへ逃亡してゐれば罪を着ずに濟むのであつた。

その翌々朝の新聞に、その事件が載つてゐるのを姉が發見した。父の働きを賞めてあると同時に、入らないお負けが澤山書いてあつた。そのうちには、母を政岡の樣にしつかりした女に說明してあつたし、また姉のことを『窈窕たる美人』と形容して、あの博奕うちを初めて捕へた時、その美人が燭を執つて、父の跡に從つたとあつた。姉は顏を赤くして喜んだが、

『新聞屋といふものは勝手なことを拵らへるのだねえ』と云つた。

僕は、その時、初めて、新聞紙の所謂三面記事なるものに興味をおぼえたのである。

五　毒婦の夫

神戸、大阪通ひの蒸汽船が洲本から出る樣になつてから、僕等は狹い世界が廣くなつた樣に感じた。二隻の往復で、毎日、朝出帆するのがあつて、夕方歸帆するのがあつた。その汽船の一つに乘り組んでゐる長さんといふ男は、僕の何となく好きな人であつた。その癖、そこの家へ遊びに行つても、長さんのゐない時は安心だが、もう、歸つて來るだらうと思はれると、心配で心配でならなかつた。がみ〳〵とおかみさんをしかりつける聲がこわかつたのだ。渠は世間に向つて一般に評判が惡かつた。おほ酒飲みで、喧嘩好きで、言葉づかひが荒くつて、佛頂づらであつた。鳥渡見ると、惡魔の生れ代りの樣に見へるが、僕等に向つて、稀れに愛相笑ひをすることがあつた。僕はただ何となくその笑ひに出合ひたかつたのだ。

亭主が荒々しい言葉づかひや取り扱ひをしたからかみさんもそれに向つて荒々しい態度であつた。兩方から畜生、馬鹿、氣狂ひ、死にそくないめなどいふいさかひは不斷のことで、かみさんの顏や手にはなま疵が絶えなかつた。それでゐて、子がないから僕等が遊びに行くと、珍らしさうによろこんで菓子を呉れたり、衣物の泥をはたいて呉れたりして、お愛相をした。

『何しに夫婦になつてゐるのだらう?』とは、隣り近處の疑問であつたのだ。長さん自身に取つては、ただ女郎を買つたり、買女に入れあげたりするつもりで、そのかみさんを養つて置くのかも知れなかつた。一日置きの夜でなければ、渠は家にゐなかつた。して、一日置きには、大阪にとまるので、大阪にも獨りのをんなに家を持たしてあるとのうわさであつた。

長さんは大した給料を貰つてゐるのでもなかつたから、かみさんは、毎日、借家つきの小い畑を耕やし、大根や瓜をあげるかたはら、人の洗濯などを賴まれるのであつた。僕が可愛がられたのも、ひ

とつは時々、僕の家の洗濯物を頼みに持つて行くからのことであつたらう。

そのかみさんは、亭主の留守には、いろんな男を引き入れるといふ評判が、隣り近處から廣まつてゐた。密通などをするのはあんな女かと、僕はかみさんをさういふ種類の女の標準に見てゐたのだ。何人の男があつたか、そこまでは僕も知らなかつたが、一人だけは確かにそれであつたに相違ないのが僕の記憶に殘つてゐる。着荷問屋の集まつてゐるそばの内港を深くする爲め、その水底の泥を浚ふ目的でかり集められた土方の一人、常公と云ふのがあつた。長さんがこの常公のもとへ出て行つて、非常な喧嘩をしたことがあるし、常公のかみさんが長さんのかみさんのところへ來て、つかみ合ひの騒ぎをしたこともある。して、男同士の喧嘩には、巡査が仲に這入り女同士の騒ぎには長さんの家主が仲裁して、いづれも現場の證據を見ないのであるから、見ない方の負けとなつた。

常公の倅貞といふのは、途中から僕の小學校に這入り、直ぐまた退校したが、住んでゐる漁師町の子供の餓鬼大將であつた。僕の屋敷はその隣り町にあるし、また僕の家の使ひをさせたこともあるので、まづ僕の味方の方であつた。それが、問屋の内港に四五本づつ筏に組んで浮べてある材木の上に、兩足をふん張り、土方の歌を歌ひながら、その足を以つて材木の筏を左右に搖り動かし、『東西南北靜まり給へ　エエササ　エサツサ』と獨りで囃す勢と云つたら、ない——思ひ出しても、いたづら小僧の骨頂だ。僕はこの小僧とよく長さんのかみさんのところへ遊びに行つた。

その長さんのおかみさんがだが、或晩、長さんの首を手拭で締めた。無論、殺すつもりであつたのだ。長さんが苦しまぎれに目を覺ますと、自分の喉首に手拭が堅く喰ひ入らうとしてゐたのではね起きて、それを解きほどくと、そのかたはらにかみさんが出刃を持つて坐はつてゐた。渠はその刃物をもぎ取り嚴しい折檻をした。兩者の喧嘩にはいつも仲裁に這入る隣りの家主が、その時も聽きつけてやつて來たので、その人の口からこの事件が廣く世間に知られる樣になつた。

して、世人はひどく之を評判してゐたが、肝心の本人の長さんは却つて平氣で、殆ど意に介してゐないかの樣であつた。その翌々日からも、大阪下りの汽船がつくと直ぐその家に歸つて、かみさんを相手にいつもの通り醉つ拂ひ、いつもの通り爭論を爲し、いつもの通り熟睡した。

長さんのかみさんは實に毒婦であつたらう。亭主を殺さうとしたのは、貞のおやぢの常公とどこまでも自由に交際をしたい爲めであつたかも知れない。然しこの事件を聽き知つてからと云ふもの、僕は長さんに對して好き以上に敬服の念が出來た。自分を殺さうとした毒婦を抱えて、平氣で熟睡するその大膽に感服したのだ。

六　長髪壯士

僕の國へ耶蘇の説教師が來るまでは、僕は演説といふものは自由黨の政談演説に限つてゐるものと

思つてゐた。それとも、子供だから、その場に行つて聽くことが出來なかつたので、人のうわさや評判によつて、どんな物だといふことぐらゐを知つてゐたばかりだ。然し、何となく、演說なるものは勇ましい男らしい樣な氣がして、他日は必らず演說家の一人にならうと思つた。

自由黨の演說會があると、必らずその場へ警察官がのぞんで、辯士に注意を與へたり、ひどいのになると、中止を命ずることがあつた。官尊民卑の時代にあつては、辯士等のやることが却つて僕には大變えらいことの樣に思はれた。その辯士等の隊長は立川雲平氏であつた。少し後れて森肇氏も渠等の一人であつた。その間に、青木茂七といふ壯士があつて、僕よりも五つ六つも年上の娘がある身だのに拘らず、家事などのことは全く無頓着で、所謂主義の爲め、黨派の爲めに、一身を犧牲にしてゐると云はれた。

渠が牢へぶち込まれたことは幾回もあるが、出て來ると、もう自由と亂暴とを敢へてし、言論や行動に於て少しも他の拘束を受けなかつた。政治は乃ち革命、革命は乃ち亂暴と心得てゐたも同前だ。それがまた目つかちなので、獨眼龍と稱せられ、ガンベツタを以つて人も許し、身づからも亦得意がつてゐた。かしらに長髪を貯はへてゐて、それを風になびかせ、巖疊な肩をそびやかし、圖太いステツキに蟲緒の太い下駄を穿いて、勢ひよく大道を濶步するのを見るたんびに、僕の小い心はおそろしいといふ感じに打たれて立ちすくまないばかりであつた。

僕の見てこわかつた自由黨員は、その青木だけで立川氏を初め、他の人々はおそろしくもなかつただけ、また對して印象を僕の心に殘さなかつた。立川氏の家へは時々遊びに行つて、氏の妹などに世話になつたことがある。森氏は他國から來て、僕の屋敷の近處に借家してゐたが、年が割合に若かつたので、僕の兄ぐらゐの心持ちで、僕はよく邪魔に行つて、徒然慰めがてら、互ひに習ひ立ての碁を打つた。兩氏はその當時の代言人であつた。立川氏のゐた間は、氏が最も羽振りよく、それに越すものはなかつたが、氏が國を出てから、森氏が幅を利かす樣になつた時もある。渠等が法廷へ出ても、その辯論は丸で政談演說の樣で、まかり間違ふと直ぐ腕力に訴へたのだ。牢に這入るのを名譽に思つてゐたらしい、立川氏は宴會の席で、何かの爭論の結果、老郡長の髢髪をむしり取つたことがある。

渠等はみな正式の代言人であつたか、或はまたもぐり代言であつたか、そこいらのことは覺えてゐない。が、然し青木茂七は立派なもぐり代言であつたが、それが向ふ見ずの壯士と云ふので、多少の働きをした。渠の亂暴は多くは酒の爲めであつたから、立川氏は渠に禁酒を勸告したこともある。また、同氏が渠に金を貸して、どうせ取れないと知つたので、かたなを拔いて渠のふさ〳〵した長髪をぶつつり切つてしまつたことがある。然しまたもとの通りに生やしたが、兎に角、青木は立川氏に一步を讓つてゐたのだ。

青木は多少財産があつたさうだが、政治上の奔走の爲めに全く蕩盡してしまつたので、もぐり仕事

の收入と諸事件の肝入りとで一家をささへてゐた。立川氏が東京へ出てから、自分もその跡を追ひたくなつたのか、出京入費を同志の士から寄附的募集した。然し國は出たかつた。そんなことが度々あつたので、渠は段々同志間の信用を失つてしまつた。

その後、僕も國を出てしまつたから、青木のことなぞは忘れてゐた。して、憲法は發布せられ、國會は召集される時代になつた。立川氏は信州から代議士として打つて出たし、國からはまた歴史ある舊家として某氏が當選した。僕には、先づ、あの青木は今どうして居るだらうといふことを思ひ浮ばずにはゐられなかつた。ところが、第二議會の時であつたかに、目つかちの老壯士然たる者が、傍聽席から議員席へ馬の糞を投げて、取り調べられることになつた。それが青木であつた。僕はその記事を新聞紙で見ると、直ぐ、かの處世術につたなく、徒らに自由黨時代の虚勢的政治熱の犠牲になつた老壯士の一生が思ひやられた。自分の同輩や後進とも見るべきものらが、天下晴れての議場にあつて得意然たるに對する、渠の不平と鬱憤とはなか〳〵馬の糞ぐらゐを以つて發散するものでないことが思ひやられた。之と同時に、また僕の一生も帝國議會と無關係ではないことを初めて感じたのだ。青木の投じた馬の糞は僕には無限の意味を感じさせたのだ。

然し、東京では、渠の議會に於ける行爲は無意義のいたづらと見られたから、渠はただ狂人として取り扱はれた。

その後、渠は再び國へ歸り、志築といふ町の町長をしてゐたが、明治三十八九年頃に亡くなつたさうだ。

森肇氏の特色なる長髪は青木茂七からの思ひつきだらう。僕が氏を國で知つてゐた頃には、氏の頭髪は、氏の人物と同樣、まだ長じてゐなかつた。

僕は、明治四十二年の議會に、森氏が次點候補者としてさきの當選者に代り得たのを見て、死んだ青木がやうやく多年の志を成就したかの樣に思ふのである。

七　神の子

明石の海峽に面する岩屋浦に、父が出張してゐたことがあるので、僕も夏休みをそこで暮した經驗がある。岩屋は、淡路島が最も細くつき出たそのとツ鼻で、そこを少し播磨灘に面する方へ行つたら、鰮の多く捕れるところがあるが、僕がゐた頃は、岩屋浦一體に鰯船の澤山出る季節であつた。その捕れた鰯はみなゆでて、干鰯にするので、干鰯製造元とも云ふべき家はすべて土地の財産家になつてゐた。

父が借りてゐたのは、その一干鰯屋の離れであつた。海の方に開けた二階建ての家で、父の借りる爲めに新築されたのであるから、疊建具はすべて氣持ちがよかつたが、かツかと照る夏の日光が熱い

風に干鰯の厭なにほひを運ばすのには、實に恐れ入つた。晝寢をしようとする時にでも、その鼻持ちのならないにほひで眠られないこともあつた。然し段々ゐ馴れて來ると、それも大して苦にならなくなつた上、僕は、毎日、ゆふがたになると、どし〳〵買ひ込まれる生鰯のなかから、大きいのをより出して骨を拔き、それを牛肉鍋ですき燒きにして喰ふのが何よりの大好物になつた。朝からつづけて捕れる時などは、飯の代りにそればかり喰つてゐたこともある。

鰯といふ物は、女と同樣ひよわいもので、海からあがると、直ぐ腐つて行く心配があるから、捕れるかたツぱしからゆでてしまはなければならない。干鰯屋は終日それが爲めに働くばかりでなく、屢屢徹夜することがある。おほきなゆで釜に浮きあがつてゐる油をすくひ取り、それを火皿に盛り、木綿の丸めたのを燈心に代へて火をともすと、ぱち〳〵云つてよく燃える。もつとも、油煙の立つことは非常なものだ、僕等の家主の家族は、夜業になると、入れ代り立ち代り、その火のもとで、鰯をゆでるのであつた。かみさんでも、娘でも、みんながくすぶツて、見られたものではなかつた。

そこへ時々手つだひに來ては飯を喰はして貰ふ親なし兒があつた。親がどこかにゐるのか、ゐないのか分らなかつた。また、どこでその兒が生れたのか――それも分らなかつた。他人がさういふことを知らなかつたばかりでなく、その兒自身も亦全く知らなかつたのだ。ひよつこり浦人の間にあらはれて來て、言葉さへその初めには通じかねたくらゐだ。漁師の一人がそれをあはれがり、自分の物置き場を寢床の代りに貸してやつたら、そこへ段々藁くづだの、繩や網の端くれだのを拾ひ集めて、その中で犬ころの樣に寢起きをした。初めはほかに相手にして呉れるものがなかつたので、獨りで濱邊へ出て、生魚の落ちてゐるのを拾つて喰つたり、墓場や山道へ行つて、蛇や蜥蜴を捕へてかぢつたりしてゐた。

『あいつは、けふ、蛇を喰つた。今晩にも死んでしまうぞ。』

『蜥蜴をかぢつてたから、あすは藁の上でくたばつとるだらう。』

かういふ評判が何度もあつたが、不思議に生命に別條はなく、毎日ひよこ〳〵と方々へ出歩いてゐた。浦人どもは之を見て人間外の生き物ではないかと畏敬の念をいだく樣になり、天から降つた神樣の子だらうと云ひ合つた。

『神の子、神の子』と云ひ廣められたのが、自然とその兒の名の樣になつてしまつた。またその名が相應したかの樣に、人間を束縛する禮儀作法は知らず、遠慮會釋もなく、慾得の觀念も起つてゐないらしかつた。もつとも、年はまだ十四五でもあつただらうが、年相應に出て來る利害の念が見えなかつたのだ。浦人どもは、期せずして順ぐりに、地藏樣に供物でも献ずる樣なつもりで、殘飯やらぼろ衣物を運んで行くと、殘飯は喜んで喰つてしまうが、衣物の方は、浦の惡がしこい子供にそそのかされて、直ぐ駄菓子の代りにしてしまうのだ。して、はだかと云ふことを當り前の樣に思つてゐたらし

い。人々も亦それを少しも怪しまなかつた。

ところが、父の下役の新任巡査がそれを見て、如何に子供とは云へ、もう十四五になるものが裸體で往來を歩くのは風俗に害があると認めたので、その子を警察署の前で呼びとめ、

『おい、神』と、滑稽だがしかりつけた、『貴樣は衣物がないのか？』

『ないんだ。』

『ないなら、うちで拵らへて貰へ。』

『さうか？』と、にこ〳〵して行つてしまつたが、今度はどこで貰つたのか、大きな風呂敷の眞ん中に穴をあけ、それを首に通してだらりとからだの周圍に垂らして歩いてゐた。それには、もう、誰れも反對するものがなかつた。

僕はその自然の無頓着を面白く思ひ、渠が僕の家主の干鰯屋へ來た時、渠を僕の家に呼び寄せ、例の骨拔き鰯のすき燒きを喰はしてやつた。渠が舌うちをして、旨さうに喰つてゐるのを見て、僕は世に旨いといふその最も旨い味は、そんな時にあるだらうと感じた。

八　猛　犬

人の戀しがる故郷といふ物が、僕には、些かの戀しみもなつかしみもない。そこで生れたとは云ふものの先祖代々の墓は東京にあるし、小學校へ這入つてゐる間にも、餘り土地のなまりに染まない東京語を使つてゐたし、家族の籍もすべて早くから再び東京へ移つてしまつし、親類緣者とてもさう近しくはないし、僕の身に泌む樣な思ひでは殆ど全く僕の故郷から得られないのだ。のみならず、却つて惡憎と復讐との念が僕の故郷と云ふに伴つて來る。と云ふのは、淡路――僕の故郷――では、ねえねえと云ふ東京語の語尾に似た發音が穢多の言葉にあるので、僕が小學校で『ねえ』を使ふと、『ねつからねの穢多小僧』と輕蔑され、多くの子供から相手にされず、道を行く時など、後ろから水をあびせかけられたこともある。

僕の生れて育つたのは洲本と云ふ町の濱邊に近い士族屋敷なので、濱屋敷と稱せられてゐた。そこのおほ門を一歩そとへ出ると、もう敵國の樣な氣がした。十丁餘りもあるところを毎日小學校に通ふのは、敵の目を掠めて行くのであつた。敵は町人の子や漁師の子などがあつて、若し僕がその行きにでも、歸りにでも見つかると、きつと何かひどい目に會ひかけるのであつた。僕が足早やに逃げるのが唯一の武器であつた。たまには、向ふから裏切りして來たかの樣に、向ふ同類に對する惡口などを僕に聽かせ、僕に同情を表して以後は親しく交はらうなど云ひ寄り、なれ〳〵しさうに途中までついて來て、僕が氣をゆるめてゐるを見込んで、知らぬ間に僕の襟元から砂を投げ入れて逃げたものもあつた。かう云ふことが重なるに從つて、僕はます〳〵町人、漁師の子等を卑しみ恐れることが增

して行つたのだ。僕の子供心にも、悪憎の念は僕の孤獨と傲慢心とを養ひ、復讐の念は僕をして人間の友を避けて多くの猛犬をかり集めさした。この猛犬らを使嗾して、僕は屋敷以外の子供の飼ひ犬を征伐したのだ。

屋敷内の子供はすべて僕のしたであつたが、屋敷内に僕等の漢學先生が一人住んでゐて、そこへ在所からあづけられた子――市ちやん――がある。そればかりは僕等の爲めに厄介物であつた。屋敷外のものにおだてられて、いつも裏切り的な行動をしたのだ。屋敷から一二丁隔だつたところに、春日神社がある、その明神さまのお祭りの日であつた。社内の大きな石の高麗犬のそばへ集まつた僕等同窓の間に誰れがえらい、彼れがえらいといふ樣な爭論が起つた。その末、市ちやんと僕との比較論になつて來て、僕の敵どもは市ちやんをおだて出した。僕もなか〳〵心中では負ける氣はなかつた。

ところが、市ちやんはまたがつてゐた高麗犬の背から下りて來て、しやがんでゐた僕を、うしろからむずと抱きすくめた。渠は兩手を僕の向ふ脛にかけ、その膀を僕の右の肩に當て、全力を込めて僕を抱きすくめたのであるから、僕は一時動きが取れなかつた。僕の手したどもは恐れ退いて、遠く見てゐるばかりだし、敵どもは一切に大喝采をする、眞ツかになつてゐた僕は全身の力を込めてうんと立ちあがつた。市ちやんは手を離した。僕は無言でそこを去つた。市ちやんも跡からついて來たのだが、屋敷外では僕は何の手も出しかねたのだ。然し、濱屋敷の門を這入ると、もう、自分の勢力範圍だといふ安心があるので、――して、市ちやんは屋敷内では先生がこわいばかりにおとなしくなる上、丁度先生の母親が通りかかつたのを幸ひ――僕は市ちやんを捕へるが早いか、滿腔の不平を足さきの下駄に込めて、渠の向ふ脛を蹴つた。

『ああ、これ〳〵』と、先生の母親がとめようとする間もなく、市ちやんは泣き出した。

『ざまア見ろ』と云つた切り、僕は心に勝ち誇つて家に歸つた。

僕はかう云ふ有樣で日を送つたが、要するに外敵から見れば、内辨慶としか見られなかつた。渠等の僕に對する侮蔑といたづらとはます〳〵甚しくなつた。して、僕が外敵に備へる爲めに飼つてゐる猛犬も次第にその主人の氣風に感化されて行くのかして、家にゐてはなか〳〵強いが、外へ出ると、鳥渡した同類を見ても尾を卷いて逃げて來る樣になつた。

九　盆の踊り子

思ひ出すと若々しくなる樣な氣がするのは、僕の故郷の盆踊りだ。ひとりが眞ン中にゐて、太鼓を打つて音頭を取ると、多くの男女が、年寄りも若いのも、その周圍をめぐりながら、手をつないだり離したりして歌を歌つて踊る。そんなことはどこの地方にでもあることらしいが、他の地方では見たことのないことが一つ二つある。

淡路の國は阿波藩の領内であつたから、阿波に盛んな淨瑠璃が僕の故郷にも盛んであつた。少しでも道樂氣のある主人があらば、その家には必らず一さをは立派な太棹が備へられてゐた。不斷はそれを彈いて『今頃は半七さん』などどなつてゐるのだが、盆になると、三ケ日の間、朝からきこしめす酒のほろ醉ひ機嫌に乘じ、その太棹を腰に結びつけ、左右に腰を振りながら、大道を彈いて歩くのだ。その調子が如何にも面白いチコテン、チコテン、チコチコチコテン、チコテン、チコチコテンと云ふ風なメロデイを、こまかく刻みながら繰り返して行く。ただそれだけのことだが、こまかくメロデイを刻んで行く工合に、腕の力と上手下手とが聽き分けられる。して自分の得意や知人の店さきへ來ると立ちどまつてその調子に歌を合はす、『太郎兵衛（たろべや）チコテン、夜ふーけてチコテン、夜ふーけて太郎兵衛（たろべや）』などとつづける。それが不斷僕等の家へ出入りする芋屋までも眞面目くさつてやつてゐるのだから、なほ更ら面白い。

それからまた、一方には、子供の踊りがあつた。踊りと云つても、手を振つたり足を擧げたりするのではない。ちやんちやらと云ふ、ちいさい鐃鈸の樣な形の響銅を、兩手を延ばしただけの長さの紐の兩端に結びつけ、紐の眞ン中を首に懸け、響銅の根元を兩手の指の間にはさんで、ちやんちやらと鳴らしながら、揃ひの赤い襦袢で、男女の子供が隊を組んで『何をくよくよ川ばた柳、水の流れを見てくらす』など歌つて歩くのだ。その歌つて歩く歌は、チコテンの大郎兵衛一天張りとは違つて、いろんな意味のもぢられてゐるのがある。普通の俗謠から轉じて、町内の老爺や娘の悪口を歌つたものもある。たとへば『洲本何町の何屋の娘足をなげ出して髪結よつた』といふが如きは、もう、一種の低い標準の童謠である。無邪氣な子供は、自分等の道を通り過ぎるものらに向つて、さういふ童謠を再びそのものらの當てこすりになる樣にもぢり直して歌ふのだ。僕の家と背中合せになつてゐる某問屋の娘、けイちやんと云ふのは、隨分お轉婆の悪口屋で、そんな場合には、なか〳〵面白い皮肉を歌つたものだ。

僕も赤襦袢を持つてゐた。たてに白い筋の這入つた赤襦袢であつた。或盆のこと、それを着て、ちやんちやらを首にかけて、屋敷のおほ門に立つてゐた。そこは例のチコテン芋屋の荷車がとまるところで、僕の母はいつもそこまで出て來て、芋や大根や葱を價踏むのがお定りであつた。その盆の日、僕の立つてゐる前をけイちやんの一隊が歌つて通つた。けイちやんは僕を指さして、『大きいなりをして、あのざまを御覽』と云つて皆して笑ひ逃げた。僕はその日から定りの悪いといふことを知り出したのだ。けイちやんは皮肉屋だが可愛いと僕は心で思つてゐたからであつた。

その後、けイちやんが裁縫の師匠に通ふ程の年になつた頃、その師匠の子と僕との間でけイちやんを取り合ひしたこともある。同時にまた、けイちやんに酒を買つて來て貰つて、師匠の子と僕とがなま酒を五合ぐひ飲み、非常に苦しんだこともある。して、今や、そのけイちやんは、出生して、某省

の某高等官の夫人である。

一〇　お　松

父が國で勤めをしてゐた時、僕の家へ出入りするお松といふ藝者があつた。藝名は別に何とか云つたが、かの女は藝者屋のおかみ兼藝者であつた。そこへ新らしくかかへられた舞ひ子を玉子と云ふ。僕の父が世話してやつたのだ。

玉子は實に無邪氣であつた。自分の身が、踏み込めば踏み込むほど、ます〳〵足を抜きさすことが出來ない、ぬかるみへ落ちたのであるを知らなかつた。いい衣物を着せて貰つた上に、みんなから可愛がられると云ふ言葉を本統にして、兩親の爲めにその身を賣られたのである。兩親はさうするのを、目的で、自分等が在所ものであるに拘はらず、早くからその娘に舞ひと三味線とを敎へ込んだのだ。

かかへられたその日から、お座敷へ出て立派に舞ふことが出來る重寶者だから、多少田舍くさい素振りがあることなどはおほ目に見られ、うちの姉さん達からは『玉ちやん、玉ちやん』と云つて大事にされたし、お客などからも非常にひいきにされた。その藝者屋は、また、玉子が來てから、特別に繁盛する樣になつた。

そのうち、玉子の田舍くさい素振りもなくなり、言葉つきも全く狹斜向きの圓滑と甘ツたるさとを帶びて來て、その一廓中に於て、無類飛び切りの舞ひ子が出來あがつた。色白の圓がほには愛嬌があつて、痩せぎすの脊がすらりと高くお蠶ぐるみのからだの優しい輪廓は、畫面に浮き出てゐるかの樣であつた。錢湯へ這入りに出て來る途中で、犬ころの遊んでゐるのをながめながら、道ばたにじつと立つた姿と來ては、何とも云はれない好い樣子があつた。

『玉ちやん、お風呂？』と、知り合ひの女などに聽かれると、からだを輕くひねつて、

『ええ』と答へる。その一聲があたりに響くと、あちらの窓、こちらの格子戸から、必らず女や子供の顔が出るに定つてゐた。

たま〳〵、漁師や町人の子等に、

『姉はん』などとからかはれると、かの女はむきになつて怒るのだ。

『あかんべい！畜生！貧乏の子！』かう云つて、腮をしやくるのが癖であつた。して、追つかけられなどすると、僕の家へ逃げ込んで來るのであつた。

『坊さん．坊さん』と僕を呼んで、いつも僕を遊び友達にしてゐた。墮落者の寄り合ひなる曲輪以外に出て、かの女が穢多同樣に卑しまれないところは、殆ど僕の家ばかりだと云ふことを、かの女は知らなかつた。

僕も玉子を姉同樣になつかしく思ひ、けふは來るかあすは來るかと、毎日の樣に待つてゐた。或日

のことかの女がやつて來た時、僕はその木履を穿いてそとへ出た。ちやらん〳〵と鈴が鳴つてゐた。『坊さん、遊びましよう』と云つて、玄關へ出て來た玉子は、それを穿いては困ると追ツかけて來たが、僕の下駄を穿いてゐるので、僕はお互ひではないかと取り合はず、逃げる。

かの女は追ふ。かの女が物につまづいて倒れたので僕は走るのをやめて、抱き起してやつた。その時、最もなつかしい樣な、また可哀さうな氣がした。

その後、暫くして玉子は僕の家へ來なくなつた。忘れたが、何んでも、神戸か、どこかの、もツといい場所へ轉じたのだ。かの女のゐた藝者屋も、やがて廢業して、そこのおかみ兼藝者のお松は、人のかこひ者となつた。世間の評判によれば、僕の父がこの女に關係してゐたさうだ。それを知つてゐるせいか、僕はかの女を厭で、厭でたまらなかつた。人にかこはれてからも、たび〳〵土產を以つて僕の家へやつて來たが、僕は言葉をかけられるのは勿論その顏を見るのも避けてゐた。

然し、かの女の住まひが僕の通ふ小學校の道にあるので、かの女が、朝、そのかど口に立つて、そとをながめてゐるのに出くわしたことが度々だ。その靑い顏が一しほ氣に喰はなかつた。

『坊さん、學校?』から云つて、向ふはお辭儀をしても、僕はいつも知らん顏をして通り過ぎたのだ。

お松は、その後、男と手を切つたが、大阪の松島で再び藝者に出たことを聽いた。

之を聽く以前、僕は既に大阪へ來て、或英學校の生徒になつてゐた。或日、朝、數多の學友とボートを艤ぎ、松島遊廓の間を通り過ぎる時、廓の一隅から、

『岩野の坊さん』と呼ぶ聲が聽えた。然し、遊廓などに僕が知つてゐる女があらうとも思はないし、若しあつたら、疑ひを被るばかりだと思ふから、わざとふり向きもしなかつた。

後、それがお松であつたと分つてからは、例の男もゐない、僕の父もゐない、してまた僕でも隱れて會ひに行けば行ける境遇にゐる、かの女に對する同情の念が急に湧いて來て、僕は大人じみた考へをいだく樣になつた。して、それからと云ふもの、お松は時々僕の心に浮んで來るが、國でそれと同じ樣に僕の家へ出入りした、玉子の方は、僕には殆ど全く之を思ひ出すをりがなかつた。

一一　教師の家

僕が英語を習ひ初めたのは、十二か三の時である。

小學校を出ると、直ぐ——當時、中學校が廢校になつてゐたから——專ら漢學と數學とを教はりに行つてゐたが、僕より二つ、三つ、または四つ、五つ上のものらが、神戸や大阪へ遊學に出て、英語をかじつて來るのをうらやましく思つた。

そこへ、丁度、神戸から、警察署の傭ひ教師を兼ねて、英語の塾を開くものが來たので、僕は喰ひ扶持を出してそこへあづけられることになつた。その人は餘り平凡で、學力もなく、語學もただ英

語、獨逸語、佛蘭西語、羅甸語などの初歩を學んでゐたのに過ぎなかつたが、至極無邪氣な性質であつた。僕は書生の名義で置いて貰つてはゐるものの、喰ひ扶持は出すし、また向ふが先生らしく振まはないので、なか〳〵その云ふことを聽かなかつた。

その時から僕は碁を知つてゐたので、先生が酒の興に乘じて打たうと云へば、遠慮なくお相手をした。向ふがあぐらをかけば、僕もあぐらをかく。向ふが罵詈をすれば僕も冷笑する。して、僕の方が强かつたので、一度、さん〴〵に打ち負かすと、先生はむきになつて來て、今一度試みる。それがまた無闇みに穢い手だから、僕は乘り氣がしない。それでも全局は四五十目僕の勝ちと見えたのを、先生は默つて僕の地面を少し崩し取つた上、なに、對した遑ひはなからう、つくつて見ようと云ふ。然し、僕はその崩された場所を指摘して、またと一言も云はさなかつた。

家族は、先生と細君と細君の老母とだ。世間のうわさによれば、細君は神戸で旦那取りをしてゐたらしい。僕にもさういふ點が見えないでもなかつた。生活の仕方も隨分しまりがなかつた。老母を除いてはすべて寢坊好きだが、毎朝先生の出勤時間まへに英語を習ひに來るものがあるので、よく叩き起される。老母は耳が遠いので臺どころにゐても聽えない。僕はまた知つてゐてもわざと寢床を出ない時があると、細君が止むを得ず二階から下りて來て、戸を明けるのだ。寢卷き姿ではあるが、派出な絹物のはした切れをつぎ合はせて着て居るのだから、脊の高いからだにそれがぴつたりなづんでゐて、見る人は誰れしもその優しみに見惚れ、寢ぼけ顏の方に氣がつかないでしまうのだ。もつとも、その顏もなか〳〵上品であつたから、僕の土地での美人といふ評判であつた。

先生は醫者の素養もないではなかつたので、種々な藥品を備へて置く室があつた。して、同僚や知友の求めに應じて、調劑をもやつた。或夜、細君は喉がかわいてたまらなくなつたさうで、その藥劑のうちから、蒸溜水と思つて飲んだのがモルヒネであつたから、たまらない。おほ騷ぎの末、夜よやうやく安心した。

先生と細君とは人の前でも平氣でふざけ散らすのだ。先生がまた細君の老母を捉へて尻まくりをやらさうとするのを、細君が怒つてとめるといふ騷ぎもあつた。さうかと思ふと、冬の夜寒むに、火鉢を圍んで話しをする時など、先生が炭をくべながら、細君に、

『どうだ、おぼえてゐるか』といふ前提で、自分がかの女の家へしげ〳〵通つた頃、夜が更けて、歸らうとすると、まア、この炭が立つまでと止める。それがなくなりかけると、また新らしいのを加へて、今暫く、これがなくなるまでと云ふ。さういふ風にして、かの女もお母さんも自分を引きとめてゐたのだと、にや〳〵笑つたこともある。

夏の或日のこと、僕が下の客坐敷で晝寢から醒めると、足に白い糸が結へつけてあつて、その末が

臺どころの方まで行つてゐる。して、時々それが輕く引つ張られる。またいたづらをしてゐやがると思つて、ふと氣がつくと、僕の三尺がゆるんでゐて、腹の上からどこまでも、黑々した墨で塗りこくつてある。僕はくわつと怒つて、飛び起きた。臺どころからは、そりや、起きたと云はないばかしに、みんながにこ〳〵して驅けて來た。豪腹になつた僕は直ぐ素ツぱだかになり、緣さきのおほきな石の洗水鉢の上に肱がり、ばしや〳〵水をつかつた。それでも、腹いせには足らないので、黑い水が滴れてゐるままに坐敷を通つて臺どころに行き、手桶一杯の水を坐敷の眞ン中に持つて來て、そこの疊みの上で行水をした。

僕はさういふ亂暴を働いたが、先生の細君には服してゐたらしい。お湯と云へば、いつも僕がお伴を命ぜられるのだ。時刻は大抵正午前後だ。細君はやはらか物を着て、なか〳〵氣取つて進むと、僕はその跡から手拭ひを持つて附いて行く。餘り穢いなりをするなと云はれてゐるので、僕の帶も縮緬の三尺で、それを後ろでだらりと結んでゐるのが、女の持て遊ぶ特別な美少年らしく思はれたさうだ。そんなことに思はれると知つたら、僕は斷然お伴はことわる筈であつたが、實に無邪氣だつたのだ。して、かの女は少しびツこであつた。それを隱す爲め、道を歩く時は、ぐずり〳〵と歩を運ぶので、湯まで五丁ばかりのところを、僕ひとりなら、二十丁も行ける時間がかかつた。

ところが、一度、僕は家に引ツ籠り、二階の下り小口の室——僕の勉强室になつてゐた——に英語のさらへをしてゐると、先生の細君が湯から歸つて來て、次ぎの室——二階には、もう、その室があるだけだつた——に這入り、薄物單重になつて、三味線を引き出した。やがてそれが止んだ。すると、いつの間にか細君が僕の後ろに立つてゐて、

『まア、こちらへお出やす』と、聲を顫はせながら、僕の肩へ手をかけた。その顏を烏渡見あげると、上氣したのか、眞ツ赤になつて、その眞面目さ加減と云つたら、かの女自身をもまた僕をも忘れたかの樣で、僕の肩に當つてゐるかの女の手には、おほきな石をも動すかと思はれる力があつた。下坐敷に畳寢をしてゐるお婆さんが若し起きて來たらどうしようと、僕は恐ろしくなつて、無言のまま、兩手で、机の足を握つた。そのとたん、机の一方が持ちあがつて、筆立てやインキ壺が引ツくり返つたが、そのひツくり返つた物が僕の身代りであつたのだらう、それツ切り僕は無事で濟んだ。

やがて僕は英語の教師を變へ、また間もなく國を出てしまつたが、その後この教師は虎列刺病に罹つて世を去り、その細君は神戸で再び別な旦那を持つてゐるさうだ。

一二　岡見先生

私の少年の時、町に評判な、今日で云へばハイカラな、二人の未亡人があつた。

一方は合田のお清さんと云つて、十年の戰役に死んだ軍人の未亡人だ。軍人の家だけあつて家風に

どこか凛々しいところがあつた。お清さんも、實際の年齢よりはずツと若く見えるにも拘はらずふさぶさした黑髪を切り下げにして、いつも極地味な衣物をまとひ、赤い物などは一つもその身につけてゐなかつた。讓といふ獨り子息は、僕と同年で、また僕の友人だが、少しも勉强する氣などはない腕白小僧であつたから、僕が度々、渠の勉强心を起す樣に忠告してくれろと頼まれたことがある。そのお母さんではあるが、どことなく若々しいところがあつて、地味な風が却つて一しほ奥床しいので、僕は友人と共に『おかあさん』と呼びたくなく、姉さんぐらゐにして置きたかつた。

また一方のは郡長の未亡人で、姓を渡邊と云つた。この家は、同じ士族ではあるが、町家の間に住つてゐるので、何となく町人じみた家風があると感じられた。東京へ學問しに出した總領子息に初めて學費を送る時かわせ料を惜しんで、現金を封じ込み、封書のおもてに『金子在中』と書いた爲め、間を喰つた樣なへまなことをした家族で、僕とは餘り親しみはなかつたが、行けば惡くも持て爲さなかつた。合田家が有名であつたのは、後家さんその者によつてだが、渡邊家の評判は寧ろ二人の透き通るほど美しい娘の爲めで、而も癲病すぢだと云ふことであつた。

合田の讓さんはよく渡邊へ遊びに行つた。同家の妹娘と仲よしであるのは僕も知つてゐたが、癲病筋では困るではないかと、僕はかげながら注意してやつたこともある。

讓さんも、渡邊の妹娘も、僕と共に英語研究會へ通つてゐた。教師は岡見先生と云つて、渠より以前に來てゐた英語教師を蹴落して、町中のハイカラ青年を自分一人に吸集した人だ。それも先づ町の有力家等を御馳走政略で取り入れたのが當つたのである。交際が上手な上に、鳥渡男ツ振りのいい獨身者だ。渠はいつの間にか渡邊の妹娘を通してその母やその姉と行き來する樣になつた。目的は多分姉の身にかけてゐたのだらう。然し渡邊家で合田のお清さんに紹介されてから、その方にばかり熱中する樣になつた。世間には、渠が毎晩遲くなつてからお清さんのところへ通つて行くといふ評判が立つた。僕のお清さんに對する奥床しさは少しねたましさに變じた。

僕も、それを聽いた夕がた、一層合田家が戀しくなつて、讓さんに會ひに行くと、ゐない。お清さんばかりが寂しさうにしてゐて、多分渡邊へ行つてるのだらう、もう間もなく歸るから待つてゐて御覽と云ふ。僕は姉さんとさし向ひになつた氣持ちで、釣りランプのもとに坐わる。かの女の寂しさうな樣子が何だか目に立つ樣で、而もどことなく急に人なつかしい風が出來た樣だ。寫眞箱を出して、死んだ夫の軍服姿や、その親のや、親類のや、知り合ひの娘のや、いろ〳〵見せて吳れた。僕の知つてゐる人のもあるし、知らない人のもある。意外なのは、お清さん自身の寫眞が多いことで、身なりにかまはない女と思つてゐたのに、いろんな衣物を着て、いろんな風をしたのがある。もつとも二年置き三年置き、五年置きになつてゐるが、その年に取つたのは遂つたのが三つある。その一つは二三日前に出來たのだ。中頃のに比べると、若返つた樣に綺麗だ。而も切り髪を延ばしたので、丸まげに

結つてゐる。それを僕に下さいと頼むと、一つよりないからと云つて呉れない。して、
『これを御存じでせう？』と云つて、岡見先生のを出して見せた。僕は世間のうわさが間違ひないと判断した。
かうしてゐるうちにも先生が若し來たら面目ない様な氣がして、時計を見ると、もう九時半だ。
『渡邊へ行つて御覽、讓がゐますよ』と云はれたので、僕はそこを出た。
渡邊へ行くと、讓さんが大きな聲でしやべつてゐるのが外から聽えた。格子戸を這入つて、僕もそこへあがり、長く待つてゐたことを語ると、讓さんは案外平氣で、
『僕アあんな家へ歸らない——今晩はここへとまるのだ』と答へた。そのそばから、渡邊の後家さんが言葉をかけ、僕がいつか讓さんにこの家が癇病筋だと云つたさうだが、あんなことを云つて貰つては、嫁入り盛りの娘もゐるから困る。決して癇病筋などいふいまはしいことはないから、以後人に云つて呉れるなと頼んだ。僕はそれが實際ではないかとも云へず、ただ世間の評判を話しただけで、それが事實であるかないかは知らないのだと答へたが、氣の毒になつて、事實であると思へば思ふほど、もう二度と再びこの家へは顔出しが出來ないと赤面して、いとまを告げた。
十時を過ぎてゐたらう、然し今一度——近處だから——合田へ立ち寄らうとして、行つて見ると、しまつてゐる門のくぐりが開いてゐて、そのそとの暗がりにお清さんがしよんぼり立つてゐた。
『伯母さんですか、讓さんはとまると云つてゐましたよ。』
僕が訴へる様に云ふと。
『またとまるのでせう。』
お清さんの聲は聽えたが、どうでもいいと云ふかの様に冷淡だ。
僕は暫く無言で立つてゐた。遲いから、こちらであなたもとまつて行け、と云ふかと思つてゐたのだ。然し向ふも無言だ。先生が來てゐたので、僕を門拂ひにするつもりだらう。
僕は今讓さん等に相手にされなかつた様な氣がしてゐる上に、また、お清さんにも見棄てられた様な氣がして、そこを立ち去つた。
岡見先生はあの時、來てゐたのか、それともまだ來なかつたのか、それが僕の長い間の疑問であつた。

一三　お里さんの記憶

僕のいとこ同士が、三軒に分れて、六人あつた。僕と僕の姉とで二人。その他は、僕の母の兄なる人の家二軒に、おの〳〵、姉と弟とがあつたので、四人。そのうち、生れ出た順序を云へば、橋本家のがかしらで、次ぎは三好家、そのまた次ぎが僕の家であつた。橋本家は最も多くの金もあり、最も

多くの出入り人もあるので氣ぐらゐが高いから、三好家とはいつも仲が悪く、かげ口の云ひ合ひであつた。然し、僕の家は、他の二家の主人の里であるだけにいづれへも同じつき合ひをしてゐた。

然し三家ともに、年中、或競爭心を以つて發展してゐたのは、いづれの家も、その姉娘の結婚問題に就いてである。この點に於て、橋本家は最も難局にあつた。と云ふのは、同家の男の子は生れつき盲目であつたから、琴を習はして別家にする筈で、姉娘のお菜さんに婿養子をしなければならなかつたのだ。次ぎに、三好家のお里さんはそのまた親類へ養女になつてゐるので、それも亦そこへ婿を貰はなければならなかつた。家の事情が最も單純で、而も最も年したの、僕の姉が一番早く婚約がとととのつて、嫁に行つた。すると、他の二家ではあせり出した。してよく遊びに來たお里さんも、殆ど全く來なくなつた。それまでは、家が近處であつたからでもあらう、カルタ取りだと云つては來たり、三月の節句だと云つては來たりしたのだ。

ところが、或日、ふと、めづらしく、お里さんが姉のところへやつて來たのは、その所天たるべき人が定まつた嬉しさに、それを報告したかつたのである。その人は僕の小學校で評判のいい敎師であつた。僕もさういふ先生を親類にするのが嬉しかつた。ふたりは嬉しさの餘り、玄關前の廣ツぱで鬼ごツこをした。僕の姉も、進まぬながら、仲間に這入つた。おほきな聲をすると、外聞が悪るいからといふお里さんの注意ではあつたが、かの女が鬼になつた時、僕はその注意にそむいて、廣ツぱの眞ン中にある、土を盛りあげた山の上から、

『お里さん、お里さん』と呼びかけた。かの女はぷんとおこつて、無言で歸つてしまつた。僕等も亦無言でそれを見送つてゐたが、姉は僕を返り見て、憤慨した樣に云つた。

『あの人も變な人になつたのねえ。』

いよ〳〵お里さんの結婚式も濟み、しばらく立つてから、その所天の里（田舍にあつた）へ、親類のものらをつれて遊びに行くことがあつた。橋本家の人は意氣張り上誰れも出て來なかつたが、僕の家からは、姉が既に身持ちになつてゐたから、僕が代表者となつて行つた。同行者八九名の一隊が、二里半の田舍道を歩いて行つたのだが、道々、歌を歌ふやら駄洒落を云ふやら、色目を使ひ合つたり、ふざけ合つたりするやら、するものがあつた。一里以上も來たかと思はれる頃、道ばたに、おほきな柿の木が一つ立つてゐて高い枝には赤い實が澤山すず生りをして、午後の日光を反射してゐた。僕は、喉がかわいてゐたので、その實の一つを取つて喰ひたい樣な氣がした。

お里さんは、僕が勞れて、而も獨りぼツちになつて、重い足を引きずツてゐるのを見て、僕をなぐさめるつもりであつたらう――その柿の木をゆびさし『御覽なさい』と、僕の方へあと戻りして、『これが柿本の人麿が住んでゐたところよ』と云つた。柿の木のもとといふ思ひ付きから、『百人一首』の中の聖歌をもつて來た洒落であつたのだ。然し僕は、僕よりもずツと姉分に當る人の言葉を洒落とは

取れなかつた。『百人一首』中には『由良の戸を渡る船人』云々の樣な、僕の生國に關した歌もあり、またそこに近い『須磨の關守』などもあつて、僕の百人一首的記憶が何となく僕の生國を中心として動いてゐる樣に思つてゐた際であるから、人麿は實際ここにゐたのかも知れないといふ疑念が起つた。僕が『本統でせうか』と聽いたら、お里さんはただから〳〵と笑つたばかりである。

その後、僕が住んでゐた町のはづれを流れてゐる洲本川の河口へ海魚を釣りに行つたことがある。河口には、砂よけの爲め、川の兩岸が低い石垣の堤防となつて、遠く海の中につき出てゐるのだが、その一方のはづれに出て、僕は一心に釣りを垂れ、ぼらや、ほうぼうや、小鯛を釣つてゐた。すると、その前を一隻の漁船が通つた。して、その乘り手の一人が僕に惡口を吐いた。僕も渠に向つて言葉を返した。別に事件は起らなかつたが、相撲取りの樣に肥えてゐた渠は、その時、

『おれは梅ケ谷ぢやぞ』と力んだのだ。それがまた僕のやわらかい頭腦に殘つて、かの天下の大力士は僕の生れた町の隣村にゐるのだらうかと疑つた。

かれもこれも半信半疑には相違なかつたらうが、子供の僕には深い印象を與へ、人麿も梅ケ谷も共に僕と生國を同じくしたかの樣な賴母しさで、僕はこの世に於ける子供としての存在を確めてゐたのだ。して、今でも、お里さんを思ひ出すたんびに、おほきな柿の木のもとと石垣の堤防の鼻とに僕は立つてゐるのだ。

一四　床屋の繼子

小學校の組織は、その最初、下等科、上等科に分れてゐた。それがまた初等科、中等科と改名された。僕等がその中等科に進んだ頃であつた、教科書の一つに、『十八史略』を假名まじり文に直した樣な『漢史一斑』といふのを讀ませられた。今から見れば、小學程度にはなか〳〵六ケし過ぎる教科書だが、僕等はその頃既に漢學を學校以外で習つてゐたから、學校でをそはることがさう苦しくはなかつた。

して、僕等の間に、芝居好きが數名ゐたので、おぼえた漢史を種に、一つ芝居をやつて見ようといふことになつた。僕も其仲間に引き出されたが、元來役者の眞似などをするのは好まないので、作者がはに立つた。して、僕の選んだのは趙の藺相如の事跡だ。『惠文王曾て楚の和氏が璧を得たり。秦の照王、請ふて、十五城を以て之を易んとす。與へざるを欲す。秦の强を畏る。與ふるを欲す、欺かるるを恐る』といふデレムマに處する相如が主人公だ。

學校が終へてから、僕等は近いおほ濱へ出た。高いところがいいといふので、松原に添つた浪よけ土手の上を舞臺にした。平穩な茅渟の海が對岸の大阪までも晴れて見えるかと思はれるほどの日であつた。實際の太い松の樹々を書き割と見做し、それ〳〵定つた役割を以つて幕が明いた。が、相如に

扮した役者は初めから肩を怒らして出で來り、趙王に向ひ『相如願はくは璧を奉じて往かん。城入らざれば、則ち臣請ふ、璧を完うして歸らん』と云ふまではまだしもよかつたが、『秦王、城を償ふに意なき』を見るや、相如はいきなり璧を秦王から奪ひ、左手を以つてそれを胸にいだき、右手を空につき出して、おほきく目をむいたかと思ふと、『怒髮冠りを指す』といふ地の文句を叫んだ。

人々は皆笑ひ崩れた。して、芝居はそれで中止となつた。然し相如その人は間が抜けたままに眞面目くさつてゐた。渠は福太郎と云つて床屋の息子で、馬鹿だと云はれてゐた。然し、馬鹿にしては、餘り賢過ぎるほど悪智慧にたけてゐて、同窓に對しても思ひ切つたいたづらをするし、本統の父や繼母の目をかすめては、理髮代を盜み出し、それを以つて買ひ喰ひをする。何かうまい物を喰つてゐる時、友人がそのそばへ行くと、

『一つやらうか』と云つて、分けてやる眞似をするが、手を出すと、直ぐ自分の口へ入れてしまひ、『貴様はいやしい奴ぢや、なア』と、丸で闇風か、何かの様な顏つきになる。或る時などは、道に艮を置いて友人をそこにおびき寄せ、非常な怪我をさしたことがある。

近處では、繼子いじめの家だと云つて、非常に評判の悪い床屋であつたから、福太郎にいろんな入れ智慧をしてやるものが多いので、渠もなか〳〵繼母やおやぢの云ふことを聽かない。いたづらは、ますます〳〵のるばかりだ。從つて、父母から受ける生疵がその顏や手足に絶えたことがない。學校も不勉强なので、退校を命じられたが、親どもはそれを少しも苦にはしなかつた。渠その人も餘り同情さるべき性質を持つてゐなかつたが、渠の親どもがまた非常な悪人等としか見えなかつた。

渠の父、乃ち、床屋の主人は、理髮をして貰ひに來た客と喧嘩をして、持つてゐた髮削りで客の頰ツぺたを切り落したことがある。額の眞ン中が低い鼻筋から眞ツ堅にしやくんだ、三角顏の、厭なおやぢであつた。その妻、乃ち、福太郎の繼母は、また、ひどいあばたツ面の、而もおほきな顏の、憎々しい物云ひをする女だ。その女が或日福太郎の眉間を下駄でなぐりつけた。して、そこが下駄の齒形に膿を持つ様になつたが、渠の父は醫者にも見せてやらなかつたうち、福太郎の顏は段々青ざめて行き、つひにこの世を去つてしまつた。

それが警察の取り調べ問題となつたが、その結果はどうであつたか僕はおぼえてゐない。また、福太郎の親どものすがたも段々僕には印象が薄らいで行つた。然し、福太郎が舊相如に扮して、僕の脚本を失敗に終はらせた時、おだやかな海の光に映ずる松原の土堤の上で、渠がきよとんとして、僕等の笑ひ崩れたのを見てゐた様子は、今でも僕の目の前に見えてゐるのである。

一五　發明家の妻

或夏の二ケ月を、子供の時だ、父の出張先なる岩屋浦に送つた。

水泳は自慢の方であつたから、浦へ行くが早いか、潮筋の速やかな明石海峡の一方へ飛び込んだ。この海峡には、二つの不思議（と云へば云へる）がある。一つは、海峡を横切つて、明石から岩屋へケーブルがかかつてゐる。その周圍では漁を許さないので、魚はそれを自然に知つてゐるのだらう、澤山寄つてたかつて來て、自由自在に遊んでゐることだ。今一つは、滿干の時刻を交換して、明石がはと岩屋がはとは、潮流の方向が相反することだ。前者で西に向ふ時は、後者で東へ流れ、前者で東へ流れる時は、後者で西に向ふのだ。この工合を知らない船頭があつて、相反する潮流の間にはさまつてまごつきでもしてゐるうち、若し暴風でもあらば、その船は容易に轉覆してしまふ。

僕はさう云ふ危險な場所へ、知らずして、飛び込んだのだ。流れは鹽けが非常に強かつた。さいはひ、別に生命には關係なかつたが、晝飯を喰つた直ぐであつたからでもあらう、くら〳〵目まひがして來て、氣が遠くなりかけた。二十分ばかりで海岸へあがると、僕のからだ中がゆで蛸の樣に赤くなつて、皮膚一面にぶつ〳〵したものが出來てゐるのを發見した。して、僕は水を離れた海馬の如く、身が重くつて、僅か二三丁の僕の家まで、身づから運んで行く氣力がなかつた。そこへ、みさをさんと云ふ婦人が來て、僕を助けてその家へつれて行つた。

みさをさんと僕が云へば、まだ若い十代の人らしく聽えるだらうが、その時、もう、三十を一つか二つは越してゐたのだ。然しそんな田舍には珍らしいほど、脊がすらりとしたおも長の美人で、性質がのん氣なだけ、二三歳の子が獨りあつても、丸で娘の樣であつた。叔母さんなど呼ぶよりも、浦人の呼び習はしたみさをさんを以つてする方が、寧ろ適してゐた。僕等のおぼ屋の姉娘であつて、別に一戸をかまへてゐた。その亭主といふのは殆ど年中大阪に行つてゐて、たまに歸ることがあつたとしても、何一つみやげを持つて來るでもなく、歸れば必らず家の時計を子供がする通りおもちやにして、直ぐ毀してしまふに定つてゐたのだ。

渠は何年來となく自動機の發明を思ひ付いてゐたのだ。妻子のことなどは殆ど全く念頭に浮べなかつた。多少見込みがつくと、直ぐ大阪へ飛び出して資本家を見付けに奔走した。みさをさんはまた似たもの夫婦と云はれるほどあつて、それを苦にもせず、また別な時計を用意して置くと、亭主は歸つて來て、それをおきまり通り毀してしまうのであつた。里からはあんな男と一緒になつてゐるには及ばないから別れてしまへと度々云はれても、かの女はいつも馬耳東風に聽き流してゐた。なか〳〵愛嬌もので、僕もみさをさんの優しい口から「坊さん、坊さん」と呼ばれるのが嬉しかつた。

その人の家、その人の手で、僕は僕の海水に浸つたからだを介抱されてから、急に親しみをおぼえる樣になつたので、それまではたま〳〵遊びに行つたのが、日に一度は行く樣になり、次ぎにまた二度も三度も行く樣になつた。とう〳〵、會ひたくなるたんびに出かけて行つた。かの女が厭な顏をしないのをいいしほにして、夜も、もう、お歸りと云ふまでは遊んだ。さうしてゐるうちに、僕のおさ

ない心にも鳥渡怪しい、な、と思はれたのは、定さんといふ遊び人同樣な、浦の口きき先生が來ることだ。僕と殆ど同じ位しげ〳〵やつて來た。僕はそれが少しねたましくなつた。僕が、或晩幻燈の眞似をすると云つて、多くの子供を集め、その家の廣間の唐紙をはづし、そこへ幕を張り、うしろにランプを置いて、いろんな形を寫して見せてゐると、定さんが樂屋へ割り込んで來て、

『さア、これは何ぢや』と、尻をまくつて、ぶらんと垂れた物を寫した。見物の子供等が一齊に笑ふ間に、

『馬鹿をおしでない』といふみさをさんの聲が聽えた。

その翌晩のことであつた。晩飯をすましてから、僕はみさをさんのもとへ遊びに行き、大分おそくまで話し込んでゐると、次ぎの間に寢かした子が泣き出したので、かの女はその方へ行つてしまつた。その跡に僕は狸寢入りをきめ込んでゐた。然しかの女は起しもしなかつた。やがてそこへ人が這入つて來た。目を明いて見ることは出來ないので、聲を聽いて初めて定さんと分つた。渠が、

『この坊主はどうしたんぢや』と云ふと、みさをさんが、

『先刻から眠つてをられるので、そうツとしてあります』と答へた。

『起して歸してやればいいぢやないか？』

『それは可愛さうぢや、わ。』

僕はこの對話を聽いて、この家が厭になつた。やうやく目がさめた樣な風をして起きあがり、ふたりに挨拶してそこを出た。

その後、みさをさんはどうしたか、發明家は成功したか、そんなことは風のたよりにも聽かなかつた。が、明石と岩屋との兩岸には、矢張り、方向の相反した潮流が往來してゐるのは事實だ。

一六　天長節

天長節號に何か書くことを賴まれたが、さて、特別にそれに關する物と云はれては、急に浮んで來ない。然し、ふと、思ひ出したのは、僕の小學校時代の一事實だ。これは大抵、いつも、毎年の天長節といふときまつて思ひ出すことで、僕が國にゐた頃の兒童的頭腦によくよく沁み込んでゐるものと見える。

その事實と云ふものは、かうだ。小學校では、朝、嚴格な祝賀式があつて、——その當時はまた教育勅語がなかつたから、さう云ふ物を捧讀しなかつたが、——陛下の御影を拜することは、現今と決して變りはなかつた。僕等を郡役所につれて行つて呉れる教師連は、その拜影式が濟むと、必らず料理屋へ繰り込んで祝賀の酒宴を開くのだが、酒興半ばを過ぎて、漢詩や短歌の巧拙を爭ふ餘地もなくなると、渠等身づからの音樂隊を組識して、市中を練り行くのだ。それが毎年のことであつた。横笛

を上手なものは横笛を吹き、鼓を得意なものは鼓を打ち、胡弓に巧みなものは胡弓を彈き、大つづみ、小つづみ、太鼓、胡弓、横笛、尺八などの合奏隊だ。蛇味線は這入つてゐたが、三味線はさすがなかつたと思ふ。樂隊としては、實に簡結明了な團隊だ。

それが臆面もなく、大膽に、紋付きの羽織り袴で、市中を練り行くのだが、醉つてゐるので、途中で出會ふ生徒にお辭儀をされても、却つて教師等の方から常談を云つたり、ちよツかいを出したりするのだから、堪らない。不斷は鹿爪らしいので、僕等が畏敬してゐるものらが、その日に限つて、御機嫌がよく、若くて助平ツたらしいのはます〳〵助平ツたらしく、中年で分別盛りのも顔の造作をくづし、最も年上の嚴格な老人も亦にこにこ面。子供から見たとて、何とも手のつけようがなかつたのだ。

僕等はそれに對しても、先生だから、お辭儀をしなければならない、して、そのお辭儀が何だかつまらないことの樣に思はれた。然し、不斷おそろしいと思つてゐる先生が、その日に限り、愛嬌があるのだから、まだしも多少の愉快はあつた。

ところが、御影にお辭儀をしても、まだ國體的思想がよく分らなかつた僕の心には、何の變化もなかつたばかりではない、却つて僕は教師等が僕等に一種の遊戯を敎へてゐる樣な氣がしてならなかつた。(ことわつて置くが、僕がかう云ふのは、曾て第一高等學校で起つた不敬事件の意識的原因を贊成してゐるのでも、辯解してゐるのでもない。)かういふ考への起つたのは、教師連のやり方が悪いのであつたといふわけは、僕等にそんなことをさせて解散を命じた跡で、また例の樂隊が始まるのだと思ふと、渠等の鹿爪らしい擧動が如何にも滑稽に見えたからである。

僕は、その後、十四歳で耶蘇教を信じ、二十歳頃までは熱心な信者であつたから、御影に對するこの不敬な考へが隨分意識的に發展してゐたが、それから耶蘇教の信仰を廢して、自己獨得の思索に耽る樣になつたので、僕の意識からこの不敬的實行も亦全く消え失せてしまつた。之と同時に、また、かのもとの小學教師連中のやつた無邪氣な、愛嬌ある行爲が、思ひ出される毎に、非常になつかしくなつた。

僞善と虚飾とに滿ちた現今の社會では、渠等教師連のやつた宴會的餘興の樣なことを以つて、僕の子供の時のひねこびた考へと同樣、拜影式にまでも關聯さして、不敬とか無分別とか攻擊するものもあるだらう。然し、あれだけ大膽に、また眞卒に、人間の性情を發揮さすところが、またとあらうか？あの大膽と眞卒とは、現今、どこの社會にあらう？先生だつても人間だ、男子だ。知り合ひの婦人もあれば、好きな女もあらう、その樂隊の進路は必らず好きな家、知り合ひの家の前を點づけられてゐた。

して、その家の前に來ると、野心のあるものは『君』とか、『おい、どうした』とか叫んで、聽えよが

しに仲間同志でからかふのだ。すると、その聲を聽きつけて、そこの娘か、後家さんかが格子窓の上から首を出し、『あれどこそこの叔父さんだ』、『誰れそれ先生だ』と面白がる。先生連も亦それが面白いのであつたのだ。

あんな懷かしい思ひ出は、僕には、澤山無い。して、その敎師仲間には、僕が人と爲つてから、一度會つたのもあるし、僅かに臨終の床で會ふことを得たのもあるし、また、再び會はずにしまつたのもあるうち、一人はその後出世して、內務省に入り、局長になり、ついに一たび大臣の椅子に坐わつたことがある。

僕を詩人にした女

僕は九歲で人を戀した。

そこで對手の女は幾歲かと言ふと、僕より八つも年上の十七だつた。姉の友人で、姉の處へ好く遊びに來る。何んでも僕を切りに可愛がつて呉れた。僕は九歲の時旣に戀することが出來たのだから餘程ませて居たのさ。然しその時はこれが戀であらうなどと自分を批判する頭はない。唯無暗に懷しかつた。每日その女が來るのを小兒心に待つてゐる。一日でも來ないと內心甚だ寂寥を感ずる。來さへすれば他愛も無くうれしかつた。(この女のことは去年の太陽の一月號に載せた追想詩『うらうづ貝』中に歌つてある。)そのうちに僕の忘れることの出來ぬ追想がひとつある、それは斯うだ。僕の家の庭に一本の桃の木がある。その桃の花が散る春の夕のことだ。例によつてその女がやつて來た。僕はその時どうした機みか急に堪へられなくなつた、突如その女の暖かい腰に縋り付いたものだ。女は烏渡驚いた眼色をして僕の顏をみたが、小突くやうにして振放つて逃出した。すると僕はやるものかといふ調子でその女の後を追駈ける。女は面白半分にその桃の木の下を逃げ廻る。僕が夢中になつてぐるぐる桃の木を中心にして强拗く追ひ廻す。何だかその時の心地が今でも忘れることが出來ない。そのうちにその女は神戶の女學校へ行くことになつて、僕の家へ暇乞に來たことがあつた。僕は小兒ながらに大人の感ずるやうな失望をもしたのさ。それから、夏休みになつてその女が神戶から歸省した。その時は、最う僕に對する態度が憎い程冷淡になつて居る。もう以前のやうな感情を以て自分を取扱つてくれぬのだと思ふと如何にもさびしい。快く暑中休暇も過ぎて神戶へ歸るといふ時、又僕の家へ暇乞に來る。姉と一緒に僕は屋敷の外まで送り出した。旣うその女は、一種『女』の權威を備へて居て近寄り難い處があつた。僕はその後姿をつくづくと見送つて、ああもう些し女が弱年であつたらと小さい胸の中で思ひ煩つたこともあつた。いやこれは實際の話だ。處でひとつ斯ういふ挿話がある。その頃僕は或る親類の家の結婚の席にお酌として賴まれたことがあつた。餘り人が多いので醉つて了つて心地が惡くなつた。空室に入つて橫になつて居ると、以前から僕の家に出入して居る藝者が來て種々

と深切に看護してくれる。すると妙なもので、女に對する感情がその藝者に移る。その時藝者は何處か悪いところがあつたと見えて沃度ホルムの匂をさせて居た。僕は何だかその沃度の匂が懐かしくなつて藝者が行つてしまつた後も、薄く漂つて居るその名殘を嗅いたものだ。(これも『うらうづ貝』に歌つておく)

次に僕の十一歳の時に戀した女がある。初戀人が二人有るといふのは一寸妙に聞えるけれど、僕は猶且初戀人と思つて居るのだから詮方が無い。僕が十一歳の時、親類の者と遊びに行つた或る家に、僕と同年の女の子があつた。僕は直ちにその子を戀して了つたやうだつた。小學校では同級であつたが話も出來ない。いや話をする程の勇氣が無かつたのだ。道で行逢つてほつと顏を赤くするといふ工合、そんな狀態が三年續いた。遂に二人が接近する機が來た。ふとしたことから二人は同じ人の處へ英語を學びに行くやうになつた。それから僕は女の家へ遊びに行く、女も遊びに來る。既う二人の戀は充分成熟しつつあつたのだ。僕が國を出て東京に行かうとした時、後日必然その女を呼寄せるといふことに約束して置いた。なに……年か、さう、その時は十四だつた。

東京がかはつて、大阪へ行つてからの僕は既うその女のことなどは忘れて了つた——といふよりは厭になつたのだ。僕は基督教信者になつたので、酒も殺す煙草も禁める。況して女に關係することなどは全然厭になつて音信不通さ。

それからずつと話が飛ぶ。

僕は遂に煩悶期に入つた。人生の情味といふものが自然に分つて來るに隨つて、その女のことを思ひ出す。畢竟情の復活だと思出すと居ても立つても居られなくなる。無性に戀しい懐しい夢を見る。毎晩夢に語るといふ風になつて、懊惱煩悶のどん底にまで沈んで、散々に悔恨もし追憶もした。それ等の感情の表白が詩になつて來る。斯うなると戀人も一種の恩人さね。初戀の感化は此女に負ふ處が多い。

或時大阪へ行つた折(此時は既う東京へ來て居た)或る仕事をやつて居るといふので、その方面を探したが分らない。後でこれは聞いたことだが、其頃その女の父は、まだ生きて居て、箸の上げおろしに僕のことを話しては娘を慰めて居たさうだ。昔の僕の一言を信ずることの篤き、僕は實に痛恨の思に堪へんかつた。

それから又數年經つ。

大阪へ行つて又同方面を探すと、今度は果して探當てた。が、其時既う僕は結婚して居たので、女も嘸失望したことだらうと思ふ。無論女はまだ獨身で居た。別れて以來永い永い間のこと親父の死んだことなどを話す。腸の千斷れるやうなことばかりさ。僕はもう妻があるので詮方が無いから、僕の知人に周旋して結婚させやうとしたがその女は頑として肯ぜなかつた。その女の顏の印象を話せつて……

……然う、その女は無論美人だつた、なかなか表情などは美しかつたが、邂逅したその時は見違へる程

變つて居た。何でも瘍を病んで手術した爲めに、顴骨のあたりが刳つたやうに凹んで見える。僕はそれでもその女を忘れることが出來ない。イヤ益々その女の境遇が移れば移る程僕の懷舊の情は濃くなるばかりだ。現今はどうして居るといふのか。此頃は大阪で看護婦をして居る。今でもどうかしたい心持が有るかつて？ハツハツまアこの位にして置かう。

我は如何にして詩人となりしか

どうして詩人になつたかといふ理由はなからうと思ふ、自分の精神が自然にさう向いて行つたのだ。

僕の家は五六代は江戸ッ子で通つて來たが、維新の際、國引けになつて蜂須賀の藩であるから、父は淡路へやられた。また間もなく東京へ轉藉したが、その間に僕は生れて、小學校時代はそこで教育を受けた。江戸ッ子を話すのは、一級中で僕ばかりであつたので、遊び仲間が出來ない上に、穢多（同國の穢多がネツカラネといふので）同樣にあしらはれて居たから、自分の屋敷を出ると、水や砂をあびせ懸けられたり、まるで四面楚歌の聲で、僕の孤獨な、陰鬱な反動性はその時から出來たのであらう。『十八史略』や『漢史一斑』で讀んだ項羽の最後が、沛公の帝業よりも一しほ僕の同情を引いた。この小項羽の親友は五六疋の犬で、ポス、ペーヤ、アカなど云つて、それを連れて海へ行つたり、山へ登つたり、若し孤獨でなかつたと云へれば、それが爲めであつた。故郷といふ人の懷かしむものが、僕には、戀の追想以外には、却つて恨みの種である。

僕の九歳の時、姉の友達で、僕にずッと上の女があつた。それが屋敷以外から來て僕によく親しんで呉れるので、想像上の天女であるかの樣にあり難かつた。僕はそれに抱きつかうとして、桃の木の根をぐる〳〵追つかけたことがある。それが神戸の或女學校へ行つて、翌年鳥渡歸つて來た時、僕の嬉しさは堪へられない位であつたが、向ふは今いふハイカラ女學生になつて居つたので、その澄ました風情が憎くもあつたし、また悲しくもなつた。僕の稚い初戀はかういふ風に出來て、かういふ風に破れてしまつたのだ。今年一月の太陽に出した詩篇『うらうづ貝』は、その時の追憶である。

それから、また、小學校で見初めて、三年間程僕の胸でばかり戀ひ慕つて居た女があつた。途中で出逢つては、われ知らず顏を赤め、その人の門前を横切つては、おのづから胸がときめいたり、それが非常な悲しみでもあり、また樂みでもあつた。三年後、同じ研究會で英語を學ぶ樣になつてから、人にかれこれ云はれる程親しくなつた。僕の一家が東京に歸りさうになつたので、行つたら必らず跡から呼ぶとまで約束したのだが、事情の爲め當分僕ばかりが大阪に出た。そこで耶蘇教に改宗し、急に一時は眞面目くさつてしまつたので、女といふ女をふり向いて見るのも厭な程の變人となり、その女の家とも消息は絶えてしまつた。尤もその父なる人が、右の目が見えないところから、或時蜂須賀

侯歡迎會の宴席で、右隣りの椅子に腰かけて居た人のパンを盜んだといふ風說が耳へ這入つたから、それが一種の惡感を懷かしめたにも由るのだ。然し、更らに東京へ來てから、心狀の發達すると共に、その女に對して薄情なことをしたと後悔する念が盛んになり、或時、その女を知つて居る人が、汽車中でそれを見たが、看護婦の風で大阪に下車したと聽いて、わざ〳〵大阪へ行つて、各病院を尋ねたが、その時は分らないでしまつた。その後、また向ふへ行つた時、ふとしたことから居どころが分つて、めぐり會つた。聽いて見ると、その父は僕の事を云ひ詰めにして死んだのだ。その女も或病氣の爲めに顏面に手術の跡が出來て、僕の腦裡に殘つて居た美は全くなくなつて居た。然し、この人の追憶は、僕の詩情にどれだけ影響を及ぼしたか知れない。ずツと古い女學雜誌に、僕が匿名で『拾三年振りにめぐり會ひし婦人に送れる書』といふ上下二篇を書いたのが載つて居る。

それから、また、東京の或教會で罪を犯さした女で、跡から見棄ててしまつたのがある。これも棄ててから非常な苦悶を殘した。その當時は、モンテスキウの『ザスピリツトオブラウ』を英譯と邦語譯（萬法精理）で讀んだり、エマソンをかじり出したりして、もう、耶蘇教の形式的信仰に飽き果てた時で、仙臺へ逃げて行つて居る數年間は、失つた戀と神との埋め合せに、懷疑と煩悶とを重ねに重ねて居たのだ。三時間より眠らなかつたので、夜の二時から五時まで褥に這入つて居るのが習慣で、その間にも睡魔におそはれ目が覺めると、ちやんと覺めて居るのに、暗中から忘想が種々の形を備へて見えて來た。美人の姿もあつた、仇敵の面影もあつた、ビスマークの顏や伊藤侯爵の首もあつた。さういふ物が續々鴨居のあたりを行列して通るのであつた。この習慣は今でも續いて居て、時々暗中に書齋がはツきり見えることがある。僕はもう氣ちがひになると云つて、わざ〳〵先輩から忠告して呉れたことがあつた。何度も自殺をしやうと思つて、その最後のきはまで行つた位だから、從つて身體も痩せこけて、疲勞は目つきにまでも現はれて居たらしい。或時は、宮城野の眞中に行き倒れて、半日ばかりもぐツすり眠つたこともあるし、また暴風の夜に、わざ〳〵山の奥へ行き、荒れ寺の椽に座わつて、一夜を明したこともある。そんなことをしなければ、研究だけでは心が滿足出來なかつたのだ。或婦人などは、いろんな女の亡念が取りついたのだと云つた程だ。當時のことは、『半獸主義』の附錄のうちにある『追懷』にも云つて置いた。

僕がこんな人間にならうとは、友人も知らなかつたと云つたが、こんなになつて來たのが、詩人の端くれになつたわけである。僕も初めは、遙谷の行き方と同じ樣に、政治界に雄飛したい考へ――僕の生國は自由黨の盛んな所だから、その影響――であつたのが、耶蘇教に這入つた時、ルーテルやウエスレイの生涯に感じて、宗教家にならうと決心した。それが東京へ來て、耶蘇教の愚なるを知つてから――佛教は跡から研究したが、宗教へ導くよりも、寧ろ哲學的方面に僕の頭を向けた――また元の考へになり、當時經濟學が學界の呼び物であつたので、專修學校へ這入つて――僕は初めから官學

を嫌つて居た――先づ理財科を三年やつた。ところが、惡貨が常に市場から善貨を追ひ出すといふグレシヤムの法則を知つてから、人間社會もこんなものだ。どうせ、社會に殘るものは碌な奴ではない、自墮落者ばかりが澤山うろつくのであつて、完全無缺な黃金時代は、物質上にしろ、精神上にしろ、夢であるに過ぎない。社會と人間とを救ふなどいふ考へは頭から愚な話で、よしんば一時は救へたにしろ、直ぐまた自墮落になつてしまう。古來、宗教家や政治家の事業は、砂の上に砂の家を建てようとする徒戯である。いツそ高踏して、自分自身の發展をするがいい、またそれ以外の考へを持つのは、一時を胡麻化す僞善者、虛榮家の手段に過ぎないと悟つた。それには全然文學をやるより外の道はなかつたのである。今でも、世人に分らすといふことは、僕には第二、第三の問題で、自分が之をやつて居ないと、宗教信者に神の惠みがないのと同樣、精神上の糧の缺乏を來たすのであるから、世間の人が文學を玩弄視しないまでも、社會發展の一方便と見爲して居るのとは、對した相違がある。國家や社會の發展は、自己發展の自然的結果に過ぎないから、僕が一詩を心よく歌へた瞬間は、千萬年の隋力的存在よりも、更らに〳〵偉大である筈だ。之を暗愚頑冥の傾向がある人々に分らないと云はれても、何等の痛痒をも感じないのである。かう云ふ考へがその當時から僕の胸に起つて來たのだ。

專修學校に這入る前に、一年ばかり明治學院に居た。この時代に、島崎藤村君もここに居たのだ。僕が東京に出た當時で、その時、初めて文學的雄飛の志を起した、年は十六七であつた。碌に學校へも出ず、白金の奥に引ツ込んで、ペルシヤ王サイラスに關する歴史小說を書いた。第一篇が出來たので、之が歡迎されると、直ぐ第二篇を出すといふ序文を添へ、挿畫の入れ場所まで指定して、友人には默つて、所々の本屋へ賣りに行つたが、最後に春陽堂で預つて呉れた。然し二三ケ月經つても埒が明かないので、取り返して來て、燒いてしまつた。八犬傳にかぶれて居た時なので、それが全篇七五くづしで出來上つてゐた。これが僕の詩句をあやつる抑もであつた。僕の詩的事業はその發端に於て第一頓挫をしたのだ。この頓挫と同時に、親しかつた同窓が一人死んだので、その弔詩が七五調で數百行出來た。これが僕の新體詩の初めであるが、之も燒かれてしまつた。これまでの、また之から後の話は文章世界に送つてある原稿『僕の回想』と、多少重複して居るところもあるので、預め斷つて置く。

僕の家筋に、江戸で多少名を知られて居た鳴門といふ畫家があり、また祖父や父は俳句を作り、祖母は頻りに歌を作つて居たが、そんなことは僕には大した影響がなかつたらしい。ただ幼少の時、姉が愛讀するロマンチクな草艸紙『白縫物語』を記憶に疊んで居たのと、妹が常盤津や長唄や踊を師匠を呼んで習ふのを聽いて居たのとが、詩の口調をあやつる上に直接に爲めになつたらしい。また、大阪時代に教科書中で讀んだグレイの『エレジイ』（挽歌）や、テニソンの『ザメイクキーン』（五月女王）並にその續二篇が、僕の詩情を動かすのに與つて力があつた。テニソンの句、

Now, tho' my lamp was lighted late, there's

One will let me in.

の如きは、之を讀んで、僕の樣な放縱なものも、何となく心細くなつて、耶蘇教に入る氣を起したのだし、またグレイの

Full many a gem of purest ray serene,
The dark unfathomed caves of ocean bear;
Full many a flower is born to blush unseen,
And waste its sweetness on the desert air.

の樣なクラシツクな句に、『大淵之玉、深山之花、知之者只神也哉』など書きつけて、至るところで唫誦をした位で、僕の功名心は一時かういふ思想の爲めに和らげられて居たのである。僕は國の漢學塾で、假名交りの文章は書いても、漢文と漢詩とは作らないので、詩會のある時などは、同學生から除け者にされて居た。これは、僕に考へがあつて、詩文は國語で作らなければ、何の益にも立たないと思つて居たのだから、東京へ來て初めて『新體詩歌』を見て、而もそれに自分の讀んだことのあるグレイやテニソンの譯などが載つて居るので、てツきり僕の思つて居るのはこの形式だなと覺つた點も、大いに僕の心を奮發させたのである。

かういふ風に僕の詩情が迫つて來てから仙臺へ行つて、前に云ふ樣な苦悶をしたが、その間にも、カントの『クリチツクオヴピウアリーズン』(純理性批判)や、有賀氏譯の『近世哲學』や、プラトーンの『ダイアログ』の斷篇を讀むと、理性の方が頭を上げて來て、いツそ哲學者の生涯を送つて見たい氣にもなるし、また餘りに心細い時など、恩師の話を聽いては、矢張り宗教家になつて、人を救ふのではないが、自分の悲痛の一部なりとも、之を世人と分けて見たい心も起つた。その後も度々そんな誘惑と戰つたが、幸にして每度それに勝つて來た。然し、僕には理性と情緒とが融和しない傾向があつて、(これは或骨相家が僕の頭を見て斷定したのに當つて居る)詩の上にも、やう〳〵近頃この兩者を一團にする立ち場が發見されたのである。

明治學院時代に、シエキスピヤで四錢の薄ツぺらな菊版位の冊子を、或洋書店で發見したので、それを買つて來ると、細字のハムレツトであつた。(間もなく同活字の全集を買つたら、ルートレツヂ版であつた。)これが動機となつて、本來好きな芝居を書いて見たいといふ氣も起つた。仙臺へ行つてからも、エマソン全集が僕の聖書の樣なもので——尤もミルトンの『失樂園』などは當時數十回讀み返したが——ギリシヤ語をホーマー專門の文典で初めて、『イリアツド』を研究し、萬葉集やその他の歌集——そのうち、僕は西行の歌集が好きであつた——を讀み、また詩經などを調べたのは、すべて詩作の用意をするつもりであつたのだが、之と同時にゲーテの『フアウスト』を原書でかじり出し、シエキスピアの『ハムレツト』を精讀したのが、『魂迷月中刄』といふ悲劇を構成するやうになつた。こ

れは、東京へ歸つてから出版になつたが、僕が頓挫の第二歩であつたことは、文章世界の方で詳しく云つて置いた。仙臺で出來た詩は、棄ててしまつたのもあるが、その多少は僕の第一詩集『つゆじも』に載つて居る。

再び上京してから、創作上、劇界に關係をつけようと思つて、いろ〳〵な方法を講じたあげく、田邊蓮舟先生の紹介で舊歌舞伎新報に這入つた。この時の事も文章世界で云つてある。二年ばかり居たが、自分の活動すべき場所でないので、退社して、詩に專らにならうと決心した。この間に、メソヂスト諸派共通の讃美歌を改正增補することで、僕は信者ではないが、內證でその助けをした。僕が訂正または新譯（自作はわざとやらなかつた）をして、一外人が一篇每に歌へるか歌へないかと調べたのだ。これが一昨年まで使はれて居た『基督教聖歌集』四百三十三篇である。この關係からしてだらう、また、ずツと跡になつて、末日教徒の新歌集をも飜譯した。かういふことは大變僕に詩句の諸調子を確める智識を與へたのである。

僕がもと自分の詩を發表したのは、女學雜誌、舊早稻田文學、國民之友などであつて——民友社から新體詩で原稿料を取つたのは、恐らく僕だけだらうとは、後になつてから、國木田獨步君の言であつた。少し後れて、また天地人と學窓餘談とに出して居た。かういふ時のは、大抵『つゆじも』に集めてあるが、あまりクラシカルで、くすみ過ぎて、理性的結縛を脫して居ない。尤も失戀の極、戀を歌はないと決心した時代もあつた位だ。それが『夕潮』となり、『悲戀悲歌』となるに從つて、ロマンチクな傾向が盛んになつて來たので、感情の幽靈が出來て、われながら理性的または自然的根據が薄くなつたのに驚いた。研究の方面から云へば、ホメーロスやミルトンは早くから厭になつたが、ヲーヅヲルスやバイロンやテニソンやも一時期を劃したし、ロセチの樣な新ロマンチク主義もまだ薄弱なところがあると思はれるし、メタリンクの表象主義も思想が枯れかかつて居る傾きが見えるし、僕が詩人として今日の落ちつき場所を外國の詩人に譬へれば、先づ佛蘭西のヱルレインの主義だが、その思想からいつまでも二元的または唯心的傾向を出さないで——これはいづれも表象派の落入り易い穴だ——わが國古代の神々、乃ち、僕等の最古祖先の生活の樣に、感情と自然と理性とが全く融和流合して、最も夢想的と同時に最も自然的な、確乎たる根據のある表象主義で行きたいのである。ロマンチク主義では、思想までが燃えるところへ行けない。深い心理的詩歌——この點は僕は早稻田文學で發表する自然的表象主義論で見て貰ひたい。

かういふ風に僕は詩人としての努力をして來たつもりだが、自然にかう向いて來たのだから、實際詩人になつて居るのか、なりつつあるのか、また成れずに濟むのか、自分ながら分らないのである。ただ宗教的方向を取るのは、今日となつて見れば、墮落の骨頂、暗愚の極だと思つて居る。その上、イプセンなどを讀むとうらやましくもあるから、更らに進んで劇を作るつもりだし、論文も氣に向い

た時には作る。他日は長い小説も作るか知れない。まア、僕がかうやつてもがいて居さへすれば、その日その日が活せるので、世間から見れば滑樂、自分から云へば、自分の心身を食つても尙活きて居たい欲望――僕の云ふ半獸主義の表象的生活をやつて居るつもりである。（明治四十年二月）

『白百合』時代

（上）

『白百合』時代のことを少し話して見ようが、――白百合とは與謝野氏の『明星』に對抗して、而も一歩進んだ傾向を以て發刊されるに至つた詩歌雜誌の名である。

丁度僕が地方の中學教師をやめて再び東京に歸り、今度は本式に文學に携はらうと決心した時であつた。その初めは暫らく僕も明星に詩を發表したが、元來僕は他の人々とは別途に既にその八九年前から作を出してゐたのだから、今回は一つ自分の發表機關を自分で持ちたいと考へてゐた。そこへまた丁度前田林外氏と相馬御風氏とが與謝野氏に對する感情の行違ひから渠と手を切ることになつた。そして或夜、この二名が僕の宅（この時上野公園わきにゐた）へ訪ねて來て、一緒に新しい雜誌を出さう、平木白星氏も贊成だと云ふことであつた。が、平木氏だけは明星派の方から茶々を入れられて一緒にはならなかつた（尤も寄稿者にはなつてゐたが。）

で、この三名と今一人岩田と云ふ人（これも與謝野氏に說かれて四號までで退社した）が同額の金（初めは十圓宛、後には五圓宛）を出し合つて、あの紙質のいい四六二倍のコロタイプ繪入の文學美術雜誌と稱する物を明治三十六年十一月から發刊してゐた。社を純文社と稱した。前田氏は僕よりも小十年歳うへで、僕はまた相馬氏とそれほど違つてゐたが、孰れも意氣込みに於いては劣り勝りはなかつた。

編輯者三人ともロマンチクな長詩を主としてゐたが、分擔としては前田氏が會計、僕は評論をやり。相馬氏は短詩の選をした。ところで、讀者は實際に於いて短詩を作らうとするものに多かつたので、實際の勞力は恐らく最も年の若い相馬氏に在つたらうと思はれる。

（中）

この白百合が世間から可なりの注意を引いて、（多い時には二千部以上を刷つた）わが國の文藝史には忘れてならぬ功果と功蹟とを殘したのは、新らしくロマンチク思想を鼓吹したからである。僕の夢幻史詩『鳴門姫』などはそのず〳〵と以前からの計劃を實現したので少し舊い形であつたから、中途からいやになつて連載をやめたが、それでも全計劃の三分の一で凡そ三千行を發表した。舊いながらも矢張りロマンチク思想が動いてゐた。それから僕の詩集『夕潮』と『悲戀悲歌』に收めたものに至つてはもう、恐らく嶄新のロマンチク思想であつた。

ああ、日は毛布の黑みを帶びて、」
　月また血のごと姿み來たり、
　あめなる星々その軸もろく、
　譬へば無花果、地にぞ落つる。
　諸天は卷き物おのづと卷きて
　山々島々ろつつり行きぬ。

こんな世界を僕は歌つてゐた。前田氏はまた思想と云ふよりもその文句がプラスチク（塑型的）なのを特色とした。そして相馬氏を除いては詩形はすべてあまい七五調を脫してゐた。白百合時代の產物は僕の前述二詩集の外に前田氏の『夏花小女』並に相馬氏の『御風詩集』だ。

編輯主任は每月まわり持ちであつたが、相馬氏の番の時に餘り校正が僕の詩に粗漏であつたと云ふ故を以て僕は渠に社へあす何時に出て來い、一つ投りつけてやるからとハガキを出したこともあるのを覺えてる。これは前田氏が仲へ這入つて納まつた。或時は、相馬氏に僕が短歌は思想の發展をいぢけさせるから早くやめてしまひ給へと忠告すると、今少しやつてゐたい、これで自分の文壇に出る地盤を固める方が早いからと答へた。實を云ふと、婦人讀者などの訪問を時々受ける餘得(?)があつたのは短歌選者なる相馬氏ばかりで、中には渠の可なり熱心になつた女もあるが、一度渠は女名前の短

歌投稿者に失敗した例もある。餘り上手な歌を寄せるので、渠は私かに手紙で推賞して呼び寄せた。すると、その手紙を證據に尋ねて來た本人は男子の山本簿滴氏（一昨年死去の人）であつた。落合氏の一門下として短歌の才人であることは以前から直接にも逢つて知つてたので、相馬氏はちよつと面目を失したわけだ。露滴はよくこんないたづらをする男であつた。

（下）

雜誌は何でも前後參卷まで續いたが、僕は三十八年六月、乃ち、第二卷第八號までで手を切つた。その頃、木版屋や印刷屋へ行つて耳にしたところでは、『白百合』は君等二名を編輯者として傭つてあるのださうだね、君等が金を出し合つてると云ふのはうそだらうと云ふのだ。僕は是で退社と決心した。社は尤も神田の前田氏の宅に置いてあつたが、金錢と勞力とを平等に出し合つてたのは事實であつた。相馬氏から長い手紙が僕に來て、僕の怒るのも尤もだが、今暫らく辛抱して退社を思ひとまつて呉れろ、氏が早稻田を卒業すれば早稻田文學社にも這入れるからそれまで一緒にこの雜誌を維持して呉れと云ふのであつた。氏の願ひには邪氣がないと認めたけれども、僕には僕の考へがあつて思ひとまることができなかつた。それに、その頃は、もう、詩人として一雜誌を經營してゐる必要もなくなつてゐた。僕等の努力と開拓との結果、詩稿はどこへ持つて行つても歡迎されたし、またわざわざ長い詩を依頼して來る雜誌もあつた。

終りに、僕が在社當時の白百合寄稿者どもを書き添へて置くのは僕として渠等に對する禮だらうと思はれる。最初から心よく寄稿して呉れたのは、詩では蒲原有明、薄田泣菫、上田敏、小山内薫、見玉花外、山本露葉、高安月郊、水野葉舟等の諸氏である。『有明集』に收まつた諸作の少くとも半分は恐らくこの雜誌で發表されたものだらう。今の人物評論家鐵拳禪氏は吉野臥城としてよく長詩を出した。中澤臨川氏や片上天絃氏は屢譯詩を載せた。石井柏亭氏の畫論、厨川白村氏の文學論、和田英作氏の畫談もあつた。理學博士田中正平氏から度々音樂談を貰つた。わが國でオペラの奬勵をやり初めたのもこの雜誌であつたが、高安氏や吉野氏や水島爾保布氏のこれに發表した歌劇は文句の組み立てが多少さうなつてただけだ。歌劇は矢張り音樂と共に生じて來なければうそだ。

『白百合』の古びたとぢ込みをくり廣げて思ひ出される姓名のうちに、今や故人となつてるのも少くはない。上田敏、平木白星、齋藤信策、花房柳外、前田翠溪、石川啄木、青木繁、近藤逸五郎の諸氏である。最後の二人は、甲は畫界に、乙は音樂界で、どんなことをした人であるかはその道のものはよく知つてる筈だ。（大正七年八月）

解答

（問題）

（一）現時の青年に助くべき長所――（二）現時の青年に改むべき短所及其の救濟――
（三）青年の修養に關する理論上の教訓――（四）青年の修養に指導たるべき書籍――
（五）學生時代の經歷逸話――

（一）

現代の青年に助くべき長所がありとすれば、第一にその精神的根據の動搖である。以前の青年なら、どれか自分の望む學問さへして居ればよかつたので、よし主義といふ樣なものがあつても、生活問題とは別にして平氣で行くことが出來た。然し現代ではそんな不面眞目なことでは濟まされなくなつて來た。後で問題になるべき生活狀態を考へると、自分の立する主義と之に對する素養とがなければ到底その狀態に這入つて居ることが出來ないのが分る。時代がそれだけ多忙になつたと同時に、生存競爭が激しくなつたのである。ところが、古今東西の種々樣々な思想と實例とが這入つて來てまだ固まらない頭腦をかきまぜるので、自分の立ち場どころか、他人の立ち場さへも區別がつかなくなつてしまう。つまり精神の據り所に迷ふのだ。眞面目な胸中には、この迷ひが煩悶苦悶となつて、之が解決を得ないとしても內部的精神的野心となつて顯はれる傾きがある。昔の學生なら、大望はあつても、多くは外部的物質的な方であつたから、政治、法律、工業、商賣、いづれにしろ、その向ふところの違ふに從つて、人間その物も違つて行くかの樣な考へであつた。然し現代の青年は幸ひにも萬人共通の精神に向つて、自分等の主義を立てて行動し

ようとあせる樣になつた。これは賀すべき進歩である。

(二)然しまた、渠等の缺點を探すと、僕等は情けなくもなるのだ。その意氣込みの割合には修養が足りない。奮發が足りない。他人の目的または修得の學問に關して、知らないところがあるのはまだ恕してもいいが、自分等の專門に於ても、實際にその書その物に當らないで、セカンドハンドを以て澄まし返つて居る傾向が甚しい。これは世間が餘り便利になり過ぎたので――青年が以前の樣に努力しないでも、或る程度までの智識は求め得られるからだ。早い話が、外國語を學ぶに字書がなかつた時のことまで云はないでも、僕等の學生時代には、一字一句に就て自分等がその意を發見して行つたものが、今では、字書を引けばその熟語はちやんと出て來るし、お負けに學生向きの飜譯が澤山あるし、それでも分らないと、今度は自分等の本校でやつて居る教科書をそつくり教科書にして教へて居る。夜學校を探し出すことも出來る。何のことはない、赤ん坊の手を以つて教へて呉れる樣な便利がある。目くらでも、つんぼでも、今日では物識りになれる。その代り、黑い物と白い物、鐘の聲と太鼓の音を頓珍漢に思ひ込んで居ることがないとも限らない。つまり上すべりがし易いのである。僕は福翁一派の樣に知識ばかりの修養如何をよしとするのではない、萬事萬物に對して――否その中心たる一物――に對して、しつかり修養すべきを云ふのだ。無修養はやがて無見識不見識となり、之を自覺して尙努めない時は、却つて之を包み隱さうとして不自然になる。こじれて、行き止つてしまう。この不自然と早熟、これが現代青年の最も改むべき缺點だ。

(三)近年、成功と理想といふ言葉が一般に重んじられる樣になつた。然し、これで成功したと思ふのは、小成に安んずることであるから、その實、不成功に終つたものと見なければならない。また、理想が實行出來たものとすれば、その實、出來たものは理想といふべき程のものではなかつたのだ。理想とか、目的とか云へば、學生どもには結構なものの樣に思はれて居るが、渠等は兎角手段を以つて目的と見爲してしまう弊がある。金錢、地位、名譽事業などは目的ではない、手段である。俗にお前の目的は何だとかいふのは、お前はどういふ手段を以つて人生を渡つて行くかといふ意味でなければならない。人生は飽くまでも人生で、ただその人の主義を眞面目に追行するところに活現して居るのだ。云ひ換へれば、成功が成功を生み、理想が理想を產する樣に、飽くまでも中絕することなく、心身の勤勞を自分等の生命に結びつけて行けば、それでいいのだ。理想が因襲的、形式的に沈滯して來ると、宗教家の理想とか典型とかいふ物になつてしまつて、再びイブセンやストリンドベルヒに打擊されなければならなくなる。僕は名代の宗教嫌ひ、哲學嫌ひであつて、現代の宗教家や哲學者が得意の長廣舌を振つて居るのを見ると、また例の僞善的、架空的教訓かと惡感情を催さずには居られないのだが、それでもなほ、先づ哲學に入り、宗教を味ひ、それか

ら出でて初めて近代の文學的趣味を解するに至つたものでなければ、眞面目な人生に就て共に語るに足らないと思つて居る。近代自然主義の文學ほど、人生に接近して居るものはない。青年はよろしくこの點に注意すべしだ。生存競爭の益々激烈になる現代に於ては娯樂の爲めの小說詩歌が段々存在を許されなくなつて來たと同時に、倫安と氣休めとを敎ゆる宗敎や哲學は最も不必要になつて來たのだ。自分等の生命を呼吸する眞面目、これが青年時代から忘れてはならないことだ。高僧の說敎、博學の講話。自己に素養のない時は、直ぐ之を崇いて感服してしまひ易いのが青年の常だが、音樂や演劇にさへ忘我を說かなくなつて來た新時代の青年は、我を忘れるのを欲してはゆ卑恐である。よろしく我を悟り我を活かし、我を偉大にするのを努むべしだ。苦悶があれば苦悶のある我をそのまま大きくするがいい。煩悶慰癒や樂天主義を信じて、若隱居となつてしまはない樣に心がくべしだ。『われ』なるものは主義と共に呼吸して居るのである。

（四）

何事をやるにしろ、趣味と素養とがなければならない。それには、以上云つたことで分る通り、先づ哲學に通じ、宗敎の經驗を有し、それから文學（重に自然主義の文學）を讀むがいい。短日月にとてもさうは甘く行くまいから、僕が云つたのを標準にして可成それに向ふ樣にしたらよからう。之を讀書の上で簡單に順序を立て見ると先づプラトーンの『對話篇』の分冊二三篇を讀みヘーゲル（カントは拔かしてもよし）の思想を親ひエマソンの『代表的人物』に移り聖書（これを見たことない青年はなからう）を讀み返し、マホメット敎の聖典『コラン』を探りそれから佛敎の經典『法華經』と『阿彌陀經』と『起信論』と分り易いために天台の『西谷名目』とを知るべし、この間にミルトンの『失樂園』またはグンテを見るもよし。それから鳥渡佛人モンテスキウの『法の精神』またはルーソーの『懺悔錄』を讀みそれから得た智識に導かれて、ヲルヅヲルスの自然詩がどこまで採るべきかを考へ、シエキスピヤと近松、西鶴とゾラを比較し、英詩ではポーとロセチ、佛詩ではエルレインやマラルメに人の神經が如何に深く這入り込めるものであるかを覺り、ニイチエの『ツアラツストラ』（トルストイの小說論文は無用）メタリンクの論文（劇の方はどちらでもよし）を味ひ、いつも『古事記』と『日本憲法』とを手放さず、之を見て自分等が日本國人であるのを忘れなければ、大抵その讀書家の人物の現代的意味が分らうと云ふもの。それからイブセン、ツルゲーネフ、ゴルキイ、ユイマンなどに當つて見給へ。わが國の小說では、田山花袋氏の作を初めとして、國木田獨步氏の舊作、小栗風葉氏の新作がいい。序に僕の『半獸主義』を讀むべしだ。すべてかういふものを讀んでも、娯樂の爲めにしたり、または之が眞意の分らない青年があつたら、その青年は現代の時勢が分つて居ないのである。現代その物を攻擊するにしろ、賞讃するにしろ、それが分つて居ないでは、主義も見識もあつたものではない。世間は兎角目前に爲めになる書物をいいとする傾向がある。そんなことには道案內、宿屋案內、料理案內、の

書が一等だ。僕は今これといふ金言は覺えて居ないから、ここに僕が青年に注意したい一短言を括弧に挿んで見よう。『すべて書物を讀むに、目前の爲めばかりに意を用ゐるのは、土方讀みである』英語が普通學の一部になつてから、もう大分になるのに、まだ充分の智識を持つて居るものが少いのを見ても、萬事が淺薄な短見者流の意見と缺點とに禍ひされて居るのが分らうではないか？現代の青年はもツと外國語の素養を深くすると同時に、それから得た智識を嚙みこなすだけに、わが國民的精神の根據を高大深遠にしなければ行けない。僕はメレジコウスキの『人物並に藝術家としてのトルストイ』を讀んで感心したのは、世界的問題を論ずるに、何んでも無理にも、自國露西亞の事物を以つて來た見識だ。露國は戰爭に負けても、まだ大きな人物もある、大きな意氣込みもある。青年はこの點を注意して、直ちに之をわが國情に當て塡めて解決が出來るだけの用意があつて貰ひたいものだ。

（五）

僕もまだ青年仲間にあるつもりだが、青年といふのがもう學校に居る間の時代を意味するのなら、もう遠に通り過ぎて來たので僕の學生時代には、少くとも現代一般の青年よりは激しい精神的苦悶を經て來たのだ。僕にはその苦悶が今もつづいて居るのが生命になつて居る。利に敏い人はこれから煩悶慰癒法や樂天處世案などを書いて、根據の薄弱な青年の弱點に投ずるかも知れないが、僕は自分の體現する苦悶を取り去られるのは、却つて生命を奪はれるよりもつらい立ち場に立つて居るのだ。然し、それだからツて泣き言は決して云はないのである。現代の青年は歸するところ意志が薄弱だ。僕が根氣の強くなつたのは、一つはいろんな六ケしい語學を勉强した經驗があるからで、ギリシヤ語やサンスクリツトの文典を道を歩くにもかかへて居て、名詞や働詞の變化を暗誦し、字引きと頸引きをして、一字拾ひに原文を研究したことがある。僕の十八九の時にエマソンを難讀したが、その時には朝から晩までかかつて、たツた五六行しか進行しないこともあつた。仙臺に居た頃は、夜三時間より以上は眠らなかつた。午前二時まで机に向つて居て、それから褥に就くと、五時には必らず目が覺める習慣になつて居た。冬など、井戸ばたの氷をたゝき破つて顏を洗ふ、それから全身を濡れ手拭でこする、その氣持ちのいいことと云つたら、あつたかい錢湯に這入ると同じであつた、僕は度々女に成功したり、失敗したりしたことがあつたので、この時代は燃える情火を壓伏して居たから、わざ〳〵松島へ行き、全景を見おろす富山の大佛寺に數十日も籠つて、獨禪をやつたことがある、或秋の澄み渡つた夕空に、寺僧があれは富士山だと敎へたものを見た。實際あんなところから富士が見えるのか、どうか、今でも疑問として居るが、年々二三度は見えると說明されたことがある。旅行が好きであつたので、休みになると諸方をまはつたが、磐城の山中で大雪に道を失つたことや、藏王山――刈田嶽――の絕頂で濃霧に遇つて困つたことや、新潟の友人留守宅をたづねて、かたりと思ひ違へられたことがある。吾妻

山が第二回の破烈噴火をしたその翌日、一人の友と之に登つたが、猛烈な烟の柱が風に吹かれて僕等の方へ倒れかかつたので、之を避けようとして逃げ走つた爲め古い噴火口に塡り込み、とめどなく、ずぶりずぶりと吸ひ込まれるのを漸く助かつたことは助かつたが、裾からかけて帶のあたりまでも變挺な泥が付いて居た。僕が一度二階を借りて居た主人は、正直な大工であつたが、それが無學のゆゑに人の爲めにめくら判を押し、執達吏を向けられた時、僕はそれが癪にさわつた上に、僕の二階まで來て封じをしようとしたから、痩せ腕ながら段ばしごを引きずり落したことがある。腕力を用ゐたのは、今一つ土方を組み倒したことがある。松島へ行く道で、數名の友人と共に鐵道線路を通つて居ると、向ふからひとり大きなシャベルをふり上げて迫つて來て、足の早い僕が先頭に居たので先づ之を組み伏せた。それが再び立ちあがると、腕力の弱い僕の生命はないかも知れないと思つて居るうちに、後から友人等が來たので、向ふは人數を恐れて太したことはしなかつた。僕は隨分口やかましい程不平家惡口家であつたが、いよ〳〵といふ場合には、なかなか辛抱强い方であつた。或時同居して居た一友――今は新聞記者――が何かの事件から僕を蹴飛ばし、僕に大きな物を投げつけた。體の小作りの者であつたから、つかみ出して前栽の池へ投げ込まうかと思つたが、まア〳〵默つて居て見ようと決心して、同室に寢てしまつた。翌朝起きて見ると、友人は眞ツ靑な顏をしてよわつて居るので、どうしたのだと聽くと『僕が惡かつたから許して呉れ。實は、君が夜中に起きて僕を殺すつもりだらうと思つたので、ナイフを開いて机に向つたまま、一睡も出來なかつたのだ』と云つた。僕の學生時代の經歷逸話等に就ては、云ひたくもあり云ひたくもないことが澤山あるが、方圖がないから、まアこれ位に止めて置かう。（明治四十年）

雜誌は大抵電車で讀む

誰でもさうか知れないが、僕は始終何か頭で考へて居る。で時々全く頭を空しくしたいといふ氣がする。そんな時には玉突に行つたり、碁を打つたりすると、その心持になる。道を歩いて居ても、いつも何か考へて居る。若し何も考へずに居られれば、それだけ氣が安まる筈だが、どうもさうは行かない。

此頃でも時々あることだが、十年程以前には度々あつた。それは時々考へながら差して行く所へ到着する、さうして友人なら友人の家に案内を請ふ。家の人が出て來る、どなたですと言はれる、その時つい自分の名を忘れて言へないことがある。自分の名を言へても訪ねる方の名前を忘れたりすることがある。又僕は隨分早く歩く。足の早い方にかけては人に負けない。仙臺に居た時などは、道を歩いて居て、一丁程も先を歩いて居る學生に直ぐ追つき、間もなくまた一丁も先きになつて仕舞ふとい

ふ風であつた。僕のせつかちで、早足といふことは評判だつた。で、東京へ歸つて、『歌舞伎新報』を編輯して居た時代だが、編輯と言つても唯原稿を整理するばかりでなくて、會計もやつたし、發送もやつたし、時にはまた製本もやり、或は探訪にも出て行かなければならぬ。ある時、新富座の某茶屋へ、新狂言の役割を聞きに行つた。ところが僕は亂暴に早く歩いて行くから――其處に行つたのは初めてだつたが――ガラ〳〵ドシヤンと門口の戸を開けて、閉めて、そして御免と言つた。さうしたところが、主人が出て來て、意外にもへい〳〵と頭を下げてお辭儀をする。そして、尋ねたことには丁寧に答へて呉れた。然し歸り道で考へて見ると、どうもその時の様子がをかしい。餘り丁重過ぎた。さういふ人に似合はず丁重過ぎた。と思つて居ると、翌る日、社の俥夫が、その茶屋の主人に逢つたら、此度社へ來た人は非常に威張る人だ、まるで巡査が戸籍調べにでも來たやうな調子だ、あれでは世の中は渡つて行けないと、かう言つた。それで僕も世の中に慣れない時であつたから、氣が付いた、も少し落ち付かなければならないと。何も威張つた譯ではない。せつかちと不注意であつたんだ。それから僕も多少慎しむやうになつた。つまり歩き方が早いから、心臓の鼓動が劇しくなる。そして落ち付かなくなる。

ある時風邪をひいて、醫者のところへ行つて診て貰つた。ところが醫者は僕の脈を見て、急に眞青になつちやつた。どうしたかときくと、心臓の鼓動が死に瀕して居る人の鼓動だといふ。それで僕は説明して、僕にはそれは不思議ぢやない、歩くといつもそんなんだ、少し落ち付いてりや直ると僕が言つて聽かせた。

そんな工合であるから。歩く時に考へて居ると、一つのことばかりに考が向いて仕舞ふ。子供の時なんぞには、おやぢの酒を買ひに行つて、酒屋の前を通り越しちやつて、自分の考へて居る方へ行つてから氣が付き、後戻りしたことも度々ある。で、年を經るに隨つて、僕も注意して、歩く時は玉を突いたり、碁を打つたりする時と同じやうに、氣を安めるつもりで、歩くことを考へるばかりにしてその外のことを考へず、つまりぼんやりして歩くやうに努めて居る。で、歩いて居る時には動いて居るから、別な考はしなくても多少氣が散らずに居る。然し俥に乘つたり、電車に乘つたりすると、自分の體は動いて居ないから、いろんな考が混亂して來る。時とすると、一人で笑つて見たり、變な顔をして見たりして居るので、傍から見たらをかしからうと思はれる。だから僕は、ずつと以前から、車中で何か讀むことにして居る。讀むと言つても、込み入つたものは讀んで居られんから、重に新聞や雜誌を讀む。然し新聞は大抵朝飯を食つてから讀むし、殘りがあれば僕は便所で讀む。だから大抵餘程寢坊した時か、又は急な用があつて朝出て行く時でなければ、電車の中では讀まない。で、重に雜誌だ。雜誌は毎月のものは大抵電車に乘つてゐる間を利用して讀んで仕舞ふ。

ところが、ある時、電車の中で雜誌を讀んで居ると、何か胸に當つて――つまり胸を抑へられたやう

な氣がして胸苦しい氣持になつたのを氣が付くと、掏摸が手を僕のポツケツトにさん込んで居た。その掏摸の顏が非常に青褪めて、眼が引き吊つて、血の氣が通つて居なかつた。つまり僕は、掏摸が人の物を盜む、即ち仕事をする瞬間の心理狀態を實見したんだ。然しそれは一瞬間の間のことで、僕は直ぐこの掏摸の手を擲りつけた。すると掏摸は次の停留場へ着く手前で飛び下りて仕舞つた。その時は時計を取られかけた。僕は今では洋服は着ないが、その時は洋服を着て居た。そして學校へ敎へに行つた歸りであつた。ところで僕は、敎場では時計を鏈から離して敎壇の上に置き、時間を見ながら敎へる習慣であつた。で、その時は、時計を鏈につけないで、ポケツトに入れたまま歸つて行く途中であつた。だから掏摸は鏈を辿つて時計を引き出さうとしたが、引き出して見ると時計は附いて居ない。それで特に手を入れて取らうとしたところであつたんだ。そこを僕が氣が付いた。そんな事もあつた。

思ひ出すと、歩き方を氣にする人もある。その例を言つて見ると、僕が京都に居た時、多くの書生が兩手を垂れて、左の手と右の手とを交りばんこに振つて歩くのを見た。すると友人は、あれは皆同志社の生徒だと說明して呉れた。なぜそんなことで分るかときくと、その當時、同志社の生徒はさういふ風に手を振つて歩くのが習慣であつた。それは同志社の社長の新島氏がさういふ習慣であつた。それで生徒がさういふ風を做るやうになつた。馬鹿な話なんだ。

それにも一つ、新島氏は道の眞中を歩かないと決めて居たさうだ。そして横つちよの方を通る。なぜかといふと、眞中を通ると傲慢に見える。で、謙遜を表する爲に道の端を通れと敎へて居たさうだ。こんなことは新島氏の僞善者たる反證にもなる。つまりそんなことを氣にするやうぢや人間も駄目なんだ。そんな駄目なことをする爲め、耶蘇敎の敎育が、つまらないところへ青年を引張つて行くといふことが分らう。

宗敎より文藝に

▲僕の國は淡路です、幼少の頃から西洋人に英語を敎へて貰つて居つたので、いつとはなしに、耶蘇敎信者となつて居つた。實は始めは政治家にならうと思ふて居つたが、何んとなく外面的の仕事のよふに思はれて、滿足が得られんので、ひそかに耶蘇敎の傳道に志して居つたのであります。

▲十四歲の時に、大阪へ出て、或基督敎の學校へ這入つた。此學校は當時宮川經輝氏が經營して居られたのです。此こに一ケ年ばかり學びましたが。自分は其頃から耶蘇敎の傳道師になる積りで、勉强して居つたのです。

▲僕の家は、元はやはり東京であつたのだが、都合あつて淡路へ行つて居つたのである。所が、又淡路を引き拂つて東京へ全家引き越すことになつたので、僕も自然大阪の學校を辭せねばならぬことと

なり、東京へ來て、かの井深氏の明治學院へ這入つた。

▲明治學院へ這入ることは這入つたが、此頃からぼつ〳〵、基督教徒の內部の事情を知つて、愛想が盡きかけて來た。

▲先づ第一、僕は西洋人が大嫌ひだ。元は淡路に居る頃英語など教へてもらつて居た位で左程にもなかつたが、或る時此は子供の時分だが、神戸へ一寸行つた事があつた。所が、西洋人が一人で五六匹犬を連れて歩いて居つたが、或る一人の日本人が通りかかつた時、其西洋人は犬にけしをかけた。そこで、犬は其日本人に飛びかかつて、とう〳〵それを引き倒し、食ひ付いたり、衣服を引き裂いたりして居つた。他の日本人はそれを見て居り乍ら、どうもようせぬのである。何となれば、其頃の西洋人と云ふものは非常な勢ひで、日本人は皆恐れて居つたからである。私はこれを見て、子供ながらに其日本人を非常に氣の毒に思ふと同時に、西洋人を非常に憎く思つた。それから、西洋人が非常に嫌ひになりました。

▲で、宣教師なども無論嫌ひであり、それから牧師傳道師などが、心にもない僞善僞信仰を振り舞はして居るのを見ると實に厭になつて來る。終には、基督教の教義其の物をも段々疑ひを容れるやうになつて來た。

▲僕は其頃エマーソンの論文集を讀んで非常に興味を感じたが、終に彼れの汎神論を信じて基督教の一神論を放棄する樣になつた。且つ、我々は人を救ひ人に道を傳ふるやうな力のあらう筈はない、先づ自らを救ひ、自らに傳道すべきであると云ふことに氣づいて來た。

▲明治學院に學ぶこと一年ばかりにしてそこを出で、又政治家にならうと思うて神田の專修學校に入りて、經濟學を學んだ。三ケ年にして此處を卒業したが、私が滿足に學校を卒業したのは、此學校丈けでありました。

▲經濟學を學ぶことは學んだが、やはり政治家は外部的の仕事の樣に思はれてならなかつたから、それを斷念して文學に志すやうになつた。そして、自分で寺を建て、坊主になつて、文學宗を開かうかと思つた。文學宗と云つても、人に傳道するのでは無い、只自分獨りで研究し修養するが爲である。尤も、人が自然に從うて來れば、敢て拒む譯では無いと思ふて居つた。

▲何れにしても、もつと勉强せねばならぬのであるが、學資金がないので、押川方義氏によつて、仙臺の東北學院に這入つた。これが十九の歲であつた。これまでは尙常に聖書を讀んで居つたが、此頃からはそれをやめて、エマーソンを聖書のかはりに讀んだ。

▲此學校に居る間も、種々煩悶して、松島あたりの寺へ行つて默想に耽つた事もあつたが、どうも落ち付けなかつた。

▲ここに三年程學んだが、エマーソンの劇場はよき寺院であると云ふ意味の言葉が、よほど僕の心を

刺戟して居つたので僕も一つ脚本を書いて見ようと云ふ心が起り、それには、東京へ出た方が都合がよいと思つたので、東北學院をやめて再び上京した。

▲東京では、何かパンを得る道を求めねばならぬので、雜誌『歌舞伎』の編輯をすることになつた。そして丁度此頃のことです、僕が賴まれてメソヂスト派の讃美歌の翻譯をしたのが、今用ゐて居るのは其後改正せられたものであるが、やはり僕の翻譯したのを基礎としてそれを訂正したのです。

▲それから都合あつて、『歌舞伎』の編輯もやめ、退隱して滋賀縣の中學校で英語の敎師をして居つたが、やはり一方では文學の研究は怠らず、又專ら新體詩の創作をして居つた。但し今とは違つてまだ消極的の思想が勝つて居つた。そして頭が哲學的であるから、詩がよほど理窟的である。

▲丁度此頃の事です、僕は京都の比叡山へ行つて天台宗のことを研究した。そして御存じの通り天台は六卽を經て漸次に悟境に入るの法門であるから、それの對照として、近江の永源寺へも行つて、其和尙に就て、禪學を研究した。しかし何をやつて見てもどうも滿足が得られぬので、三年ばかり經て、又東京へ上つて來た。これが今から八年前であります。

▲前後十年間の退隱の間に種々研究したが、遂に何物にも滿足が得られず、三たび東京に上つて、始めて佛蘭西獨逸あたりの最近傾向の文學書を讀むに及んで、漸次僕の思想が積極的に向つて來た。そして終に現今のやうな思想になるべき基礎が出來上つたのである。

▲僕の現今の思想の中には、日本の神道の思想が、餘程深い根基を爲して居るが、これは僕の鄕里淡路が、神代史に於て有名の島であつて、僕の生地より程遠からぬ所に、諸冊二尊の祀られ玉へる神社がある。そして、幼少の時に、僕は茲に參詣して、子供ながらに、非常に深い印象を刻みつけられて居つた事などが、與つて力あるであらうと思ふ。

▲僕の今の思想では、哲學、宗敎、道德、文藝が皆一體になつて居つて、極端なる自我主義、刹那主義、靈肉合致主義である。であるから、從來の所謂宗敎には無關係である。反對である。否宗敎ばかりでは無い。從來の哲學、道德、文藝には何れも反對である。

▲普通の自然主義の樣に、文藝と人生觀とを引き離した、單に文藝の描寫の上に於ける自然主義と云ふものと、僕の主義とは大に違ふ。僕の新自然主義は之が僕の宗敎でもあり、哲學でもあり、又た道德でも文藝でもあり、靈でも肉でもあるのだ。そして、古記事などに顯はれて居る我國大古の人間は、やはり此靈肉合致智情意合體の心熱的生活を送つて居つたものと思ふ。

初めて得た原稿料の話

社内で一悶着

僕の文學的生涯は詩を以て始まつたのだが、脚本も書くつもりであつた。それで僕の最初の詩集に

入れた『寢釋迦の渡し』といふ長篇の神話的叙事詩を今の『早稲田文學』の前身なる『早稲田文學』に載せて貰つた時代には、一方で明治女學校から出てゐた『女學雜誌』に『月中刄』といふ悲劇脚本を連載して、それを後に一冊にして公にしたこともあつた。が、原稿料を取つたことはなかつた。それは何でも明治二十七年即ち日清戰爭の前後の事であつた。何でも戰爭は濟んだ當座の事であつたと思ふが、一度或友人なる『國民の友』記者の紹介を得て、その『國民の友』に詩を出したことがあつた。短い新體詩を五六篇二回か三回に亙つて連載したのだ。僕は出發の抑々から、世間の所謂派に屬して來なかつた。何時も獨り立ちでやつて來た。その當時同雜誌には宮崎湖處子、國木田獨歩等の諸氏が新體詩を發表してゐたのだが、僕はその連中にも關係はなかつた。で、正式の紹介でその雜誌が僕の作を採用して掲載したのだから、正式に原稿料を出すものと思つてこれを請求した。ところが、同誌ではそれまで詩といふものに一度も原稿料を拂つた經驗がなかつた。僕の紹介者は、僕と編輯者との間に立つて大いに困つたさうだ。けれども兎に角——何でも——七圓か八圓僕の手に屈いた。これが初めて僕が原稿料を取つた時の事だが、その時の同誌編輯者は、國木田獨歩であつたさうで——ずつと後になつて僕が獨歩から直接に聞いたところに依ると、この原稿料を出す出さないの問題で、一寸社内に悶著があつたさうだ。といふのは、社内の人で頻りに詩を書いて發表してゐる者が、稿料も取らないのに、突然他から飛び出した者に與へるのは、不都合だといふ譯なのだ。つまり、獨歩自身も自分の詩の爲めに、一つも稿料を貰へなかつたのを、この時憤慨したのだと云ふ。この話は、何でも、獨歩が『近事畫報』をやつてゐた時代に、僕に語つた笑ひ話であつた。

僕の回想

蒲原有明氏の『詩壇の回想』を讀んで、僕も昔が戀しくなつた。『新體詩歌』を見たのは、僕が明治學院に居た時で、當時僕の一つ上級に島崎藤村氏、僕と同級に北村季晴氏、その下の級に、和田英作氏、その下に三宅克己氏、僕より二つ上の級に木村鷹太郎氏が居たのだが、僕は島崎氏の外は、在學一年足らずの間知らなかつたので、みんなに知り合になつたのは、ずツと跡のことだ。或教會の會合で、島崎氏が老若男女の融和すべきを、僕はまた青年の志を達するまで路まだ遠きを演說したことがある。一夕、祈禱會に行つて、牧師が眞面目に祈りをして僕る間に、氏が『君、かういふものを作つたよ』と見せるので、僕が之を見ると、下手な讃美歌の作り直しであつた。

當時、氏は小說を作ると云つて、赤毛布の田舍者に扮し、上野公園あたりをぶらついたことがある。僕は、また、學校の外國人に對する不平があつて、碌に教課に出ず、白金の奥に引つ込んで、ペルシャ王サイラスの傳を調べて、その歴史小說を書いた。矢野龍溪氏の『經國美談』の餘波がまだ殘つて居て、同氏がそれから儲けた金で洋行したのだと聽いて居たから、自分もこの小說で文學に專念

するだけの資本を儲ける覺悟であつた。二三ケ月のうちにその上篇だけ出來上つたから、方々の本屋へ賣りに歩いたが、一向に相手にしてくれない――然し、さすが春陽堂である、最後に持つて行くと、讀んで置くから預ると云つた。それからまた、二三ケ月の間に、二三度ハガキの往復があつて、とても駄目らしいと思つたから、取りに行つた。すると、『この頃は馬琴風の小說は向きませんので、いづれ、またその時期が來ましたら……』僕は眞つ赤になつて歸つて來て、その原稿を燒き棄てて しまつた。

その原稿と云ふのは――『八犬傳』に魅せられて居た時だから――全篇二百五十枚程が七五くづしの文體であつた。これが出版されると返却する約束で、少し金を借りて居た同級生が、十日見ないうちに死んでしまつて、僕が――その時、既に耶蘇教信者のいふ墮落をしかけて居たのだ――ことわりを云ひに行くと、母親なる人が墓參に行つたところであつたので、跡から直ぐ追つかけて行つて、友人の新墓所で非常な感慨を催うしたのである。その時までは、僕も自由や平等の熱に浮されて居て――僕が官立學校の閲歷がないのは、乃ち、それらの故である――文學は餘暇に出來る、だから政治方面にも活動する野心があつたが、エマソンの難讀と友人死去のことで、全く精神は內部に向ふ餘裕が出來た。亡友を思ふ新體詩百五六十行のを作つた。これが僕の最初の詩であるが、詩稿を燒き棄てたことがあるそのうちへ這入つてしまつた。

僕が小兒で、まだ淡路に育つ頃、同じ町に立川雲平森肇などの諸氏が居て、自由民權など云つて騒いて居た。兩氏とも今は代議士になつて居るが、その當時、別に青木某といふのが居て、目ツかちであるところから、獨眼龍の名を得て居たが、つまり壯士に過ぎなかつたので、立川氏が信州に歸つて、地盤を固めて代議士になると、青木は多少うらやましかつた譯もあつたらう、帝國議會の傍聽席から、馬の糞を議員席に投げたことがある。この人、體格が立派の上に、髮を長くして居た。(森肇氏の長髮はその眞似だ)。盛んなその演說などが子供心に染み込んで居たので、僕が明治學院を不平で出た時も、まだその方に多少野心が殘つて居たから、神田の專修學校へ這入つて、經濟科を三年やつてる間に、かの黑表紙の『しがらみ草紙』が出たのだ。これと『國民の友』と『早稻田文學』とは、誰れでも文學に志があつたものは盛んに讀んだ雜誌だ。

僕が仙臺に行かないうちに、『文壇』――のうちに『日本文壇』――といふ雜誌が出た。これは宮崎湖處子の『青年文學』に對抗するつもりであつて――非常な意氣込みを以つて、その中心となつた人人のうち、相談會などで僕が會つたのは、國木田哲夫、加藤咄堂、赤司繁太郎、今中央新聞に居る田村三治などの諸氏で、初めに雜誌の發行所に住んで居た人で、その名を忘れたが、これも今でも文學に從事して居られるだらう。田邊花圃女史も確か這入つて居たと思ふ。僕は年下の方であつたが、諸氏のしりへに附いて、初めて發表したのは新體詩で、エマソンの『歷史論』の拙譯をも出した。仙臺

引につ込んでから、東京との關係は三年間絶えてしまつた。第一詩集『つゆじも』に載つて居る半分は、この間に作つたものだ。

『文學界』が出た。北村透谷の作物には、僕も感服した一人である。然し、一脚本を作りつつあつたので、『朱門のうれひ』に注意した。このゲーテの作の表題に似て居るのを作つた古藤庵（この號は擊劍つかひの樣だと云つて間もなく變へられた）は誰れだらうと、東京から新しく來た人に尋ねると、島崎といふ人だと答へたので、じやア春樹君だらう、やり出したと思つた。それから、『早稲田文學』でも、脚本のことをやかましく云ひ出したし、何かの動機から、僕はもう劇界の創作的方面に飛び込む時期だと思つて歸京して來た。巖本善治氏とはその前から知つて居たので、僕の詩、その他の作物は『女學雜誌』（又は『評論』）に出たが、鬼の首の樣に大事に携へて來た悲劇『魂迷月中刄』（當事はまだ外題の偶數を忌む時代であつた）もその附錄として、數回に出して貰つた。その內容はハムレットとフアウアストとをつき交ぜて、一種の冥想的社會觀をもらしたつもりの物であつた。それが一冊の書となつて出版せられてから、二三部賣れた切り、物置の隅にほうり込まれて居たさうだが、明治女學校の火事の時、一緒に燒けてしまつたらしい。まだそれが雜誌に連出する頃、戸川秋骨氏の話に、氏は三幕目まで愛讀して居られたが、四幕目五幕目になつてがツかりしたさうだ。これは大事の筋を四幕目からぶち毀してしまつたからである。この頃、ハムレットの趣味を入れた作物は、透谷が國民之友附錄に出した『宿魂鏡』といふ小說とこれとであつたから、シエキスピヤ專賣の早稲田文學で、小癪だと思つた點もあらう、金子筑水氏が隨分ひどい攻擊文を書いた。實際、その劇もまづかつたのであるから、僕はそれから大いに修養しようといふ奮發心を起した。『文學界』には、その一二の連中から、何か書けいと云はれたが、何だか氣が進まないので書かなかつた。然し、その終りに近づいた頃、一度送つたことがあるが、その時はまた向ふから何とか云ふ理由で採用しなかつた。

これより先き、田邊蓮舟氏の紹介で、『月中刄』を以つて行つて、櫻痴居士に會つた。狂言作者の仲間に這入らうと思つたからである。ところが居士は僕に忠告して、教育の違ふ者が這入つたとて、どうせ厭になる、それから目が覺めてももう駄目だ、あれは芝居者だと云つて、世間から遠ざけられるから、斷念せよと云つた。世話をして呉れさうもないから、それ以上に賴まなかつた。すると、丁度、今の『歌舞伎』の前身の『歌舞伎新報』で、人が入るいふので、これに這入つた。居士にはその後しからられたことがあるが、自由に芝居へ出入りが出來るのと、同社が俳優學校とその附屬劇場建設の目論見があるのとで、二年間程、編輯やら、會計やら、借金の云ひ譯やらに關係して居たが、どうせ創作を發表する機關にもならないし、また發展の見込みも付かないし、劇界の事情が分るに從つて、面白くないので、退社してしまつた。が、その後とても、かの坪內博士の作さへ、思ふ樣に行かなかつた時代であつたのだ。僕の跡へ這入られたのが、早稲田を出たての山岸荷葉氏であつた。今一人、同時

に這入られた早稲田出の人がある、名を忘れたが、その人とは僕が退社した後もその社へ行つてよく話しをした。今はどうして居るか、會つて見たいと思ふことがある。その人と入れ代りに、太田玉茗氏が這入つた。僕が氏を初めて知つたのは同社に於てだ。

僕は、それからの、專ら新體詩の方に傾いて居たのだが、また跡へもどつて、透谷子の事だ――僕が子に會つたのは一度で、二度目に會ひに行つた時は、病氣が重いので、醫者が面會謝絶を命じて居た。それが數寄屋橋の煙草屋で、おツ母さんが出て來て、いろ〳〵心配さうに話しをしたことに據ると、子は子供の時から頸の後ろの神經交叉點に故障があつたので、それまでにも時々變なことがあつたらしい。僕が最初で最後の會見の時も、應對をする毎に、頻りに片手で襟元を氣にして居たのが、何となく僕に異樣な感じを與へた。席に、僕の烏渡知つ居る、而も氣に喰はない傳道師の某が居たので、僕は直ぐ透谷子と聯想して、如何に耶蘇教會に關係が付けたくッたつて、苟も詩人と標榜して居た人が、あんな者を相手にして居るのかと、多少輕蔑の意が出なくもなかつた。然し、その某氏と僕とは一緒に子の家を出た途々の話に、透谷子は非常に失望して居られるが、文學者で、すべてを知り拔いて居るから、普迦の言葉を以つて慰めることが出來ないといふ正直な白狀を聽いた。これは尤もなことだと思つた。

子は度々說教もしたさうだし、また東北地方へ傳道に行つたこともある。或派の教師は、あんな厭世詩人があんな熱心な信者になれたかと、不思議に思つたことがある程、一時は傳道に努めたのだ。押川春浪氏のお父さんは、僕も恩義上第二の父と思つてる人で、當時、東北にあつて、京都の新島襄と相對して、宗教家の大立者であつた。透谷子は、病氣が直つたら、いよいよ正式の傳道師になると決心して、その人をわざわざ招待して、病褥のうちにあつて會見したことがある。子の自殺よりも、この決心の動機の方が、子に取つては、寧ろ悲慘な事件である。どれか、子の筆になつた物を見て、僕はこの人、必らず自分の詩才が自分の思ふ樣に行かないのを深く感じて居ると思つたことがある。『文學界』で漸く甘く行きかけた自分が、手ひどい攻擊は受けるし、何を書かうとしても、輪廓ばかりの腹案で、その筆がどうも動かなくなつて來た。詩人として、煩悶すまいと思つても、せざるを得まい。この失望の極は、傳道師になるか、自殺するかの二道よりはなかつたのだ。

僕もかういふハメに落入つた經驗があるが、詩人が傳道師に化け得たなら、畢竟胡麻化しである。さりとて、自殺をするのは、なほ更ら胡麻化しである。だから、子が傳道を助けて居た間は、まだ多少氣が丈夫であつたらうが、病室にとぢ籠ると、もう、その申し譯が立たなくなる。あッちへぐら付き、こッちへがた付いたあげくが、二三日の間、自分の子供を頻りに拜んで居たが――この時、住所は芝公園――最後の夜、更闌けて、寂しい月が樹の間を漏れて、詩人の胸奥を窺ふ時――子の讃めた翁の句『明月や池をめぐりて夜もすがら』を思ひ出しだだらうか――物暗い樹かげの枝に懸りて、わ

れとわが不如意をかこち終したのである。

透谷は隨分傲慢な人であつたらしい、僕が島崎氏の住所を聽くと、『あの男はちよく〳〵來ますが、私は行つたことがありません』番地はどこそこでしようと云つて、教へて呉れた。この態度に對しては、藤村氏も多少報いた形跡がある樣だ（君よ、ただほほゑみ給へ。）然し、子が死んだ時は、文學界の連中は眞面目に世話をしたらしく、或時、今の參謀本部前の堀端で藤村氏に出くはすと、透谷の初七日に行くところであつた。その立ち話に、透谷は非常に癖があつたが、友情には厚かつたことが證明された。

かういふことはよく覺えて居るが、それから僕は生活の困難と詩作の上の不平とが段々迫つて來て、拾年足らず自殺よりも苦い目に會つて居た。然し、藤村氏や秋骨氏と、巖本氏の宅でよく會つて居た時代は、二氏は明治女學校の教師であつたし、僕はまだ歌舞伎新報に關係して居たかと思ふ。近年、藤村氏と會ふ樣になつのは、三度目の時期である。二三部より賣れなかつた『ドラマの先生』とは、僕をひやかす當時の言葉であつたのだ。一方には、また、この新報紙上に時々、西洋樂譜を以つて、わが國の樂曲を出して居た北村季晴氏があつて、まだ音樂學校を出たてで、意氣頗る揚り、大日本音樂倶樂部といふのを設け、新川の鹿島氏をうしろ楯にして、伊十郎や式左や林中を自由に使つて居たが、それが僕と同窓であるのは、その時お互ひに氣が付いて居なかつたのである。

私の生活

―便所で新聞を讀む――葡萄酒を飲みつつ書く――煙草、菓子――
――散歩、入浴、讀書――長髪の辨――旅行と創作――娯樂、遊戯――
――希臘語、梵語――

―便所で新聞を讀む―

僕は毎晩大抵二時前に寢る事はない。だから朝は寢坊をする。大抵九時に起きれば早起の方である。

起きると直ぐ便所に入るが、それが大抵半時間から一時間かかるので、『東京日々新聞』の二面と三面とを皆そこで讀んでしまふ。もう習慣としてそれを讀んでしまはなければ、そこを出ないやうになつてゐる。それから直ぐお湯に入る。それがまた半時間から一時間はかかる。一日隔きに髭を剃るから、さういふ時はどうしても一時間以上かかる。それを出ると直ぐ朝飯にかかる。僕は味噌汁の添ふ朝飯は一番うまいので、分量はなかなか多い。尤も多くの新聞を讀み乍ら食ふのだが、大きい椀に汁は二杯で濟まない事がある。飯は普通の茶碗でまづ七杯は食ふ。さうして、僕は午飯は食はないのだから、朝の時に刺身とかその他のものをも食ふ事がある。

——葡萄酒を飲みつつ書く——

さうして、葡萄酒を小さいコップに二杯なり三杯なり飲む。この葡萄酒の習慣は餘り古くからの事ではないのである。一體は僕は酒は晩酌にもしなければ、宴會に行つても澤山は飲めない。が、仕事の忙しい時は夜半でも晝間でも葡萄酒を飲んでゐる。時には四合入の壜を一本一日に空けるが、大杯は二日に一本だ。それは一方消化劑になり、又一方に氣力をつけてくれるからである。晝飯抜きだから、晩の飯を——宿屋なぞへ行つてても——午後四時から五時迄の間にやる。旅行してゐても、この頃は日本酒は飲まず、葡萄酒である。

食物は大して好き嫌ひはない。が、どつちかと云へば肉食より菜食である。

——煙草　菓子——

煙草は一日平均一袋位であるが、仕事が忙しかつたり、訪問客が多かつたりすると、二袋も三袋もやつて、後であたまが隨分くら〳〵する事がある。煙草にも僕はさう強くないのだらうから、その代りに夜など甘納豆か氷砂糖などを買はせといて、ちびり〳〵と食つてる時もある。酒と同じやうに、甘いものも僕等の疲れを一時はなぼしてくれるものであるから。

新聞は皆で十ばかり來るが、それを朝の食事中に讀み乍ら、食事後にも續けて、どうしても十二時、或は一時頃までは食事室を去らない。それが濟むと、來客のない時は晩飯まで仕事をする。

——散歩、入浴、讀書——

散歩はあまり好きでない。その代り二度も三度もうちの湯に入る。又散歩代りに晝間は自分の作つてる庭いぢりをする。さうして、夜なら近所の友人を訪ねて將棋をさしたり、碁をうつたりする。この頃は特別に讀書の時間といふものはない。つまり言ひ換へれば、讀んで置けば他日何かのためにならうといふやうな餘地をもつて讀書する時間はない。が、仕事につれてその必要上から調べて見るといふ事が僕としては讀書の時間だ。その仕事と云へば、創作でなければ、文藝、宗教、政治、社會問題等の研究論文である。やがては僕等の雜誌に於て主張してゐる日本主義の實行的運動もやらなければならないのだが、今のところ創作欲がかつてゐて、その方に一番忙しい。

夜は友人を訪問しなければ、食後直ぐ又仕事に取りかかるが外で遊んで來ると、十時頃から始めて一と息に二時頃まで續ける。それが習慣になつてゐて、二時以前には偶々床に入つても眠れない。それから又二時を過ぎて三時四時になる時は、それにも神經はさえて行つて、今度は夜が明けて七八時迄も眠むたくない。

——長髪の辨——

頭は髪の毛を長くしてゐる。僕は子供にでも五分刈にさせて置くのは、どつちかといへば不賛成なのである。頭を刺戟して却つて腦病などを起させる原因だと思ふ。帽子はソフトと高帽とを使ふ。

——旅行と創作——

この頃は少し贅澤になつたせゐか、家にゐては書きにくいくせがついて、旅行に出る、宿屋にゐると、氣儘が出來ないから反つて一室にばかり閉ぢ籠つてゐられるので、よく書ける。それから又不思議に朝早く起きられる。さうして態と新聞を見ないのだ。さうすると、朝の時間も大分仕事がやれるし、その上午後竝びに夜中は、家にゐると同じやうにやれる。で、三日若しくは四日で百枚位の創作が出來てしまふ。その代り長くゐると痩せて歸つて來る。が、家にまた二日もゐれば多少その痩せを取返したやうな氣がする。さうして、又他の方へ旅行に出るのであるが、この間中仕事が忙しいので、鹽原に十日、森ケ崎に十日もゐたが、この時はさほど痩せなかつた。つまり葡萄酒を澤山のむおかげだらうと思ふ。

——娯樂、遊戯——

芝居は招待でなければ、大抵見た事がない。たまに家内のおつきあひで行く事もあるが——。活動寫眞は態々淺草まで出かける事もある。

遊戯は將棋、碁、玉突、花かるた（但し金は懸けない事にしてゐる）、その他何でも大抵は好きだ。謠曲は運動代りになつてゐる。もとは學校で教へたから、教場で聲を出す運動がからだ全體の運動にもなつてよかつたが、それをやめてからは、たまに演説をする外大きな聲を出さないので、謠でなければ、友人との談話ですませてゐる。

——ギリシヤ語、梵語——

外國語は、英語が主で、特別に得意であつたのは、餘り人のやらないギリシヤ語だ。ホメロスの『イリオス物語』をギリシヤ原文から三分の一ばかり譯した事もある。その他にフランス語の詩を譯した事もある。ドイツ語と梵語とをやつた事もある。

主な雜誌は、大抵僕の所に寄贈して來るが、別にこれと特別に選んで讀むものはない。その時其時の問題によつてだ。

次にどういふ女を好きかと云つたつて、僕等の年頃になれば無論若いのがいいとなるにきまつてるさ。それ以上にくど〳〵いふのは面倒臭いからよさう。

僕の見た僕

世人は僕をを以つて自我自讃者と見て來た。無論、僕は一種の自讃者である。が、世人が僕をさう稱するのは、僕自身の意味とは違ひ、僕の態度を解しないからであるが、自讃は或場合に於て止むを得ない誠實の結果であることを忘れてはならぬ。明治以來現今に至る、わが社會の各方面に、眞の批評家が殆ど皆無なのは事實でないか？政治界に於て閥があるやうに、文藝界にも學閥や黨閥と同樣なことがあり、思想界にも亦同じ情實があつて、帝國大學に關係のないものには博士（この場合、當前に貰ふ權利があるものとして）を貰へないと云ふが如きは、その一例だ。かかる時代に當り、何等の情實に依らないで新時代的努力をやつてゐる者は、情實的な若しくは幇間的な批評家(?)等の言を待たないで、自分自身の正當な批評若しくは紹介をやる必要があらう。これは正當な自我自讃であると同時の獨立性ある文明批評である。

今回、雜誌新日本で各家の『自己評論』を掲載する爲め、僕にもそれを頼んで來たのを幸ひ、僕は以上の見地に據り、從來僕が社會に接して來た工合を考へて見よう。僕が最初に世に出たのは詩を以つてだが、その詩がくすんだ古典的瞑想から轉じて熱烈な羅曼的詩となり、それがまた表象的傾向を帶びて現實的な幻影を攫むやうになつたが、その間に多くの俗習詩人並に俗習評家等は新らしがつた模倣とうわツつらな技巧とを以つて僕に反對した。そして僕が渠等に向つて挑戰したのは、ただに僕の詩を辯護したのではなく、わが國詩一般の進程を思想と內容とに於て切り拓いたのであつた。ところが、その當時並にその後に於ても、わか詩界には、僕が發想しただけの深刻な作も、自由な內容的音律も他に殆ど見えない。この點に於いては、無論絕後とは云はないが、空前の特色ではないか？僕がこの特色を說明したり、主張したりしたのは、乃ち、自讃であると同時に、また無學や無獨得の詩界を警醒して、その進步を促した所以である。

音律の內容的研究に於ては、僕が『音律總論』並に『音律各論』を書いた經驗から入つて、無形律をも意識するに至つたほどの素養を持つてゐるものは、今日でも——發表の上では——ないやうだ。この點も僕を自讃するのは、乃ち、日本語の音律その物の研究をしてゐるのである。それから、僕は詩論をやり出したに從つて、その他の評論に於て僕の思想と生活とをも發表した。そして『半獸主義』では、初めて因襲の破壞と新建設とを示めし、『新自然主義』では自我生活を中心として世界に於ける一種の日本主義を哲理化したが、最近の著『古神道大義』は乃ちその完成である。かかる說を批判するものが、本當は、かの帝國大學の連中にあるべき筈だが、無獨得で外國崇拜の渠等には却つて分らないので、この點も僕が僕自身で推薦して行くより外に誠實な道はないのだ。僕は折を見て僕の『古神道』を英譯し、外國の思想家どもと戰はうと思つてゐる。僕の考へでは、今のところ、僕が僕を

脊負つて立つのは、日本を脊負つて立つのと同じである。

それから、小説の方面に於ても、僕は孤立であるのを却つて自慢してゐる。一體、僕が詩を發表してゐる時に受けた非難は、小説に於ても矢ツ張り僕は受けてゐる。それは外でもない、文章がぎしぎししてゐるとか、技巧がまづいとか云ふことだ。が、それはすべて外形に捕はれてるもの等の云ふことだ。が、それはすべて外形に捕はれてるもの等の云ふことであつた。一たび文章上の因襲を脱却して考へて見給へ。内容の發表が出來てゐるところには、内容そツくりの技巧が伴つてるものだ。完成とか不完成とか云ふことは單に理想家の云ふところであつて、若しそんな空疎な理想を追行し得たと思つてるやうな人々の作は、却つて、うわツつらの整頓が出來ただけになつてるのを知らないのだ。けれども、そんな無智の批評家連が今の世にはざらにあつて、内容の充實問題と外形の整不整とを同一平面で取り扱はうとするのだから、僕は矢ツ張り渠等と自讃的に戰ふことになる。僕はこれを少しも卑しいとは思はず、僕には寧ろ意味ある戰ひと思ふ。

僕の『耽溺』だけ深い經驗を描寫した小説が明治時代にどれだけあつた？然しそれが初めて新小説に現はれた時、何でも平面的に見る批評家どもはそれを風葉氏の同じ名の小説と比較して長短を論じたが、僕のは後者のわざ〳〵拵らへたやうな淺薄な沈沒事情の説明などとは、作として既に階級が違つてゐたのだ。また、大正の世になつても、僕の『毒藥を飲む女』ほどの充實した作、現實と幻影とを合致した作がどれほどあらう？それでも、若し僕があれに關する俗評に對して默つてゐたとすれば、社會はあれをただ無學な若しくは無經驗な雜評家連の技巧論や形式論ばかりで葬むつてしまつたかも知れぬ。それほど今の世には眞の批評家なるものがゐないのではないか？田山氏などがたま〳〵僕の態度に簡單な批評を加へることがあるが、それも人生觀上の問題をまで單に技巧問題として取り扱つてしまうのは物足りない。

僕は曾て或雜誌が自分の誇りとすることを質問して來たに答へて、先輩もなく、後輩もなく、ただ獨立獨歩でやつて來たことを以つてしたが、すると、その雜誌記者の添へ書きにそんなことは、もう、誰れでものことで、別に取り立てて云ふまでもないとあつた。僕は實際のことを云つたのだが、地に足の付かないその記者はそれを徒らに空想的に受け取つたのであつた。机上の空論だけでは何でも云へる代りに、實際なるものは分らない。單に帝大出なるが故に、何でもない哲學的議論を他人の書から借りても、多少の權威を博したりするものがある。ただ早稲田出の爲めに、また、人の受け賣り的な評論を書いても、下だらぬ小説を作つても、ただそれが爲めに採用されてるものがある。そんな人人でも矢ツ張り獨立獨行だなどとは、云はうとすれば、云へるのだ。或作家が自分の作の傾向を世間に注意させようとして、他の作家の多少自分に似た點を――事實以上に――讃めそやした時、僕が公けにそれを一種の黨同伐異だと指摘したら、その作家はまたそれに答へて、今の世にそんなことはあ

り得べからざることだと云つた。が、そのあり得べからざることを、公明な批評家が乏しいのに乘じて、手段的にやつてるものが多いのはどうしたことだ？僕には、然し、實際に學閥もなく、手段もなく、その代り、無遠慮にだが、憚るところもなく、自分を正直に自分だけに發揮して來たのである。

先輩もなかつた代り、また僕は特別に後輩を拵へるやうな機關も無かつた。白鳥氏には讀賣の日曜附錄があつたことがある。田山氏には文章世界があつた時代もある。その上、早稻田文學の如き、また森田、阿部（次郎）二氏の勢力範圍に於ける如きでは、渠等に不利益な事件や人物を默殺するやうなことをするが、僕はそんなことをされたことこそあれ、やる機會などは無かつた。ただ自分だけの發揮と自分がやる事だけの吹聽とを、出來るだけ努めて來た。これが卑劣とか不正直とかになるのは、自分を不眞面目に取り扱はうとするからであるが、僕は自分にそんな扱ひを與へなかつた。僕を誇大妄想狂だなどは、淺薄な月並的觀察に過ぎない。

それから、僕は僕自身の推薦に添つて、他を推薦したのがその人々の爲めによかつた例も少くはない。たとへば、白鳥氏をその最初の諸作に於て推賞したのは、僕一人ではなかつたが、僕もその有力者等の一人であつた。また、谷崎氏や長田（幹彥）氏に對しても、その最初の出に於て、僕の批評が便利（多少）になつたと云はれてゐるではないか？（然しああ通俗作家的に行けとは云はなかつた。）上司氏の今の傾向を早くからさう公けに促したのも僕だ。（但し、僕の豫期は渠をしてもツと深く行かしめたかつたのだが。）相馬氏の如きは――これは向ふにはいろんな申しわけもあらうが、僕は憚らず云ふ――若し僕がなかつたら、その議論がああ云ふ方面へ行けなかつたであらう。（無論、氏の議論の當否はここで云ふに及ばないが。）そして今日の言論界に心熱とか、刹那的とか、肉靈合致とか、自我生活とか云ふ思想の內容は、わが國に於ては、殆ど凡すべて僕の主張と實行とに關係若しくは系統を――意識的にも、無意識的にも――引かないものはないではないか？（そしてそんな主張になほ誤解や因襲が附き添つてるのは、僕の罪ではなく、他者の無學若しくは空虛の爲めだ。）

人生の體現者としての經驗その物から云つても、僕は僕が見渡す範圍の他の人々よりも比較的に複雜な生活をして來てゐる。宗教上の傳道をやる一つの便利として、故中山二位の局附きの或灸點婆アさんに就き灸點を稽古し、その婆アさんの助手として關西を一緒に旅行したこともある。又、友人と共に文藝的生活の根據を確立させる爲め、友人が金を出し、僕が養蠶の實際と實習とに當りかけたこともある。また、脚本作者の道すぢとして、半ば芝居もの同樣になつたこともある。また、前後殆ど二十年も英語教師としての經驗もあれば、暫時ながら自分の金を以つて、樺太に於て罐詰製造をやつたこともある。○婦人の關係に於ても、身づから進んでまで極度の放蕩をやつた事實を決して僞善的に否定などはしないが、ずツと昔から飽くまで奇麗な交際をつづけて來た婦人の友人も澤山ある。そして今の妻と同棲してからは、全然放蕩と云ふことをやめてる。他の女を見ると獸慾を起すことしか知ら

ないものからは、僕の婦人關係に於ける奇麗な方面を想像することも出來ないと同樣、僕ほどの複雜な生活をやつて來たものでなければ、實際に僕の生活は分るまいと思はれる。たとへば僕の小說を批評したもののうちに、僕が熱烈な作者としてもなほ冷靜な寫實と觀察とを通してゐるのに、それを狹い意味の斷定だと見たやうなのがいくらもあつた。これなども、僕とは段違ひの貧弱な經驗しかない所から來る誤評だ。

兎に角、僕は以前の詩想を棄てたのではなく、他よりも深刻な詩人として小說を作つてる小說家である。同時に、文明批評家である。また同時に、自由思想家である。現代に於て自由思想家らしい者は、他の場所でも云つたことだが、僕を除いては田中王堂氏ばかりだ。が、王堂氏はまだお膳立てばかり氣にする傾同があつて、その思想は確立してゐない。この點に於ても、僕の確立した自由思想ぶりは——他のもツと違つた思想家が出るまでは——獨步してるわけではないか？

近頃出版させた僕の『惡魔主義』は、ほんの歐洲新文藝の根源に關する研究的紹介に過ぎないが、それに對してさへ眞に賞讃若しくは批評の出來る資格ある評家が現今幾人ある？また、僕の近著『古神道』に於て僕が『この書の內容はわが古神道に於ける僕の發見であると同時に、また僕の新哲學、僕の新宗敎である』と云つたのは、自負でも自慢でもなく、僕としては實際の事實である。從來の神道家等にそんな發見はなかつた。また、外國の哲學にそんな哲理はなかつた。この新らしいのが間違つてたら間違つてると正當に指摘することは出來ようが、新發見的な解釋たることは事實だ。ところが、これに對して黑住敎の雜誌『日新』に於て、高野隆文氏が長い辯解を書いたが、(氏のは特に黑住敎に關してゐて、僕も御注意通り他日特別な研究をしようと思ふが、)僕を以つて『大言壯語』したものやうに見做したのは、矢ツ張り、月並に過ぎない。今の所、僕は——僕も一面に批評家だが——兎に角月並み的でない批評の一大斧鉞に會つて見たいと思つてる。（大正四年四月）

小品及隨筆

春子と云ふ藝者

小説に書けば書ける筈だが、きツと發賣禁止になるに定つてる材料――いつそのこと、實話として説明してしまう方がよからうと思ふので、ここにうち明けます。

春子（假名）といふ藝者が死んだ時、まだ二十三歳の盛りでした。大阪は曾根崎、北の新地と云ふのに勤めてゐて、美人でもあるし、體格もよし、閨中がこまやかだと云ふので、非常に有名でありました。無論、普通一般の見ず轉とは違ひまして、見込まれた人は一回で安くても五百圓、千圓は覺悟の前で關係しなければならない代りには、上手に會へるやうに致しますので、極秘密で通せてゐました。〇船會社の中橋さん、日本銀行支店長の〇〇さん、某會社の取り締り、何電鐵の重役、と云ふ風に大阪でのおほあたま連中は大抵この女のドル箱になつてゐました。それでゐて、あいつが氣を許すのはおればかりだと皆に思はせてゐたのは、男の弱點でもあるが、また、女の巧みなところであつたのでしよう。

一般の同業者連とは違つて、文學の上に一隻眼を備へてゐたと云つてもいいのです。それも、古文學と來ては、源氏を讀んでも分らないと云ふし、馬琴を見ても面白くないと云つてゐましたが、現代の小説は殆どあらゆるものに目を通して、そのよしあしを批評するだけの用意をしてゐました。そのうちでも、最も愛讀――と云はんよりも、自分の批評の手に合つたものとして坐右に備へ付け――してゐたのは、泡鳴の『放浪』と獨歩の『欺かざるの記』とださうですが、前者には至るところ赤インキで思ふやうな訂正を施してあるし、後者には表題からして『身づから欺くの記』と書き改め、こんなものは耶蘇教的信仰と形式とをさへ知つてゐれば、誰れにでも書けると云ふ評言を加へてあります。そして自分の今書いてゐる『情界日記』と云ふのが實際に欺かざるの記だと自稱してゐました。

かの女はお袋の手に育てられて來たのですが、そのお袋と云ふのがかの女を墮落させたしたたか者で――年を取つてゐながらも、若い男を好きで、自分の家にはいつも四五名の醫學生や私立大學生を置いて、それを世話するのが自慢でもあるし、そのうちの最も好きなものには自分と一緒に酒まで呑ませて、夜のお相手もさせて意張つてゐた。そんな亂れた家庭から、娘は急に最も嚴格な耶蘇教學校の寄宿舍生活へ押し込められました。で、娘も耶蘇教徒の生活が僞善と不自然とで滿たされてゐることを直ぐ看破して、殆ど死にたいほど堪へ切れなくなつたやうです。

『戀なき女は死なり』と云ふやうな不平文句をその當時の日記に發見せられます。そして或男――その學校の關係者で、今は澄まして傳道師をやつてゐます――と情を通じ、兒まで孕みましたが、棄てられてしまひました。それが墮落の一大動機でした。それに、また、淫亂で而も强慾な母と來てゐるでしよう。生れた兒の處分する爲め、また薄情な男（この時は、もう、一人の男ではなく、男といふものの全體です）に復讐する爲め、最も極端に決心して、母の奬めをいいしほに、藝者の社會へ落ち込みました。

耶蘇學校で受けた教育が手つだひをして、それからは、さきに名を擧げた日記を書くのがかの女の一生の思ひ出になつてゐました。その序文が面白いです。自分はこれまでは眞面目な情ある女として生きようと思つてゐたのだが、今度大決心をして最も墮落したまた最も秘密な人情界に這入り込んだのであるから、これからは最も放縱で情味ある女となつてしまう。それを欺かず、隱さず、ありの儘に書き殘すのが迫めてもの思ひやりだと云つてある。そしてそれを『情界日記』と名づけた。

『情界日記』

四月五日。晴。妓が情けの底深き、これかや戀の大海を、替へも干されぬ蜆川、小春治兵衞の昔は知らず、同じ川は今も名ばかりでも殘る世に、曾根崎は北の新地に、われも今回身を沈め、情界の人となつた以上は、迫めてもの思ひやりに、これからこの日記を書き初めようと思ふ。今までは、兎も角、眞面目な情ある女として生きようと思ふたのやけれど、あの僞善者に棄てられ、恨みのかたまりも見たうないやうになつて來たし、强慾な母の奬めるままになつて、この藝子の社會へ落ちて來たんや。この最も墮落した又最も秘密な情界に落ちて來た以上は、これから最も放縱で情味ある女とならう。それを欺かず、隱さず、ありの儘に書き殘すのが迫めてもの思ひやりや。

春弘めをするので、妾の名は春子。同じ家形の姉ちやんは清香。名なんぞどうでもええのやけれど、清香などと澄ました名よりも、春子の方が情ありげに聽えてええ。

けふ、弘めに出る時も、姉ちやんが化粧の仕方や着物のこなし方を敎へて呉れたけれど、そないなことは妾みづから氣に向くやうにした方がええ。藝子ぐらゐの心得は敎へて貰はんかて分つてる。それに、痩せて淺黑い姉ちやんと肥えて色の白いわていとは、おのづから化粧法も違ふ。着物の着こなしに至つては、學校にをつた時から、藝子のやうや云はれたほどやないか？

お初のお座敷へ呼んで呉れたのは、姉ちやんのお客の清水たら云ふた人や。外に赤いネキタイの灰殼が獨りをつた。藝子は二人の外にも、まだ若子、玉千代たら云ふてたのがをつた。清水がわていにばかり添ふて來ようとするのを、姉ちやんは邪魔をして、渠をわが物がほに取り扱ふて、赤ネキタイをわていの方にけしかけた。

赤いのはその洋服の膝をわていの膝に突き付けて坐わり込み、
『春ちゃん』なんて、ええ氣になつて、知ツたか振りにわていの名を呼び、わていの右の手を引ッ張り、それを渠の右の手でさすりながら、『あんたの色は白おます、なア――どこで磨きなはつたんや？』
『ええ――ジョルダンの川でだす。』
『そないな川がどこにおまツか？』
『ユダヤと云ふ國にあるさうだす。』
『へえ、ユダヤ――？』
わていが目で渠を冷かしてたら、清水がまたねきへやつて來て、
『おい、春子、あんたは耶蘇かい？』
『ええ』と、わていが目を渠に轉じた時、ネキタイは握つた手を離しながら、
『ほたら、洗禮たら云ふものを受けたんだツか？』
『ええ――それでこないにきたない女子になつてしもたんだツさ。』
『こりや面白い、おれも耶蘇だツたぜ』と云ふた清水が、わていの鳥渡座をはづした時附いて來て、
『どうだ、今夜、二人で教會の話でもしよか？』
へん、あの銀行屋め、わていにどんな學歴があるか知るまい。これでも、ミションスクールの川口女學校に三年まで勉强してゐたんや。
十二時半、お茶屋から歸宅。姉ちやんはまだ歸らぬ。
四月六日。曇。日曜。泡鳴の『放浪』の阿呆らしいほどあまいところを批評しながら、姉ちゃんに讀んで聽かせてたら、お座敷がかかつた。まだ午後二時やのに、急いで支度をしていて見たら、よんべの清水であつた。阿呆らしい！何やかや云ふたけれど、わていかて、姉ちゃんのお古なんて、いやなこツちや。でも、燒け飲みをして見せてやつたさかい、大分お酒に醉ふた。
夕方から、お約束のお座敷へ出るため、魚龜の溜り場へ行た時、赤い顏をしてゐるのを朋輩の衆は皆さげずむやうに見てゐた。畜生！どうせわていは醉ひどれの新米だツさ。でも、顏に於ては、教育に於ては、ヴィオリンに於ては、いつでも競爭してあげまツさと云ふてやりたかつた。
座敷へ出ると、果して『春子、春子』と云ふて、わていばかりが持ててゐた。兼て讀んでをる黃色新聞の社長はん――長沼とか云ふた――が、東京の一畫家を紹介する爲め、實業家連を招待したので、銀行の頭取りや會社の重役や大商店の主人なども來てをつた。渠等はいや應なし一つ返事で一枚何十圓、何百圓の額なり、軸物なりを、少くとも一つは、引き受けるのだろけれど、その費料の中に、今夜の招待費も這入つてをるものとして見たら、ありがと云ふだけが詰らんやないか？それでも、上

手を云ふて、『是非一枚』など云ふてたお爺さんもあつた。そのおぢイさんがまた甚助らしい顏をして、いやにわていばかりを見てをつた。わていはわざとその人を丁寧にしてやつた。

『どうだい、春子、皮切りにおれと一つ』など、東京辨の畫かきめがわていを離さなかつた。へん、酒が飲めるのが手柄でもあるまい。およそ日本畫家なんて、すべて富豪の幇間のそのまた幇間見たやうなことをせんと、喰へもせん癖に。どないにから意張りしたとて、あたまもないものが今の世にどないな立派な物が書けると思てやはる？かの『是非一枚』などに福の神か、鶴と龜かを色取つてをればえゝのや。わていを下へ引ツ張つていて、『どうしてもだ』と口說いたけれど、わていは『大阪ツ子ですよ』と云ふてやつた。そこへ社長はんが來て、わていのことはまだ出初めやよつて、暫く『おれが預つて置く』と云やはつた。

それからまた二階へいてをつたら、魚龜のおかみはんに呼ばれた。同じ席に出た〇〇電氣會社の〇〇の山本はんが相談でけるのならとのことで、わていは承諾した。どないせい、さうなつて行くのやろさかい。小作りでも、ぴりりとした人物の情愛には、わていも動かされてしもた。初めは〇〇〇〇〇〇〇、二度目はわていが勝利を得た。郊外電車がないやうになると困る云ふて、渠は『また會はう』の一言を殘して、丁度十二時が鳴ると同時に別れた。わていは少し後れて歸つた。

姉ちやんは、もう、よう休んでゐやはる。わていの『欺かざる記』（獨歩作）を見てゐやはつたかして、わていの小机の上に明けてある。このうそ付き作家！赤いインキで『自ら欺くの記』とわていが訂正したのを見よ。こんな尤もらしいことなら、耶蘇教のなまぬるい信仰と形式とを持つてをりさへしたら、誰れにでも書ける奴や。ほんまに欺かざる記はわていのや。

就寢、一時十分。

四月七日。曇。起床十一時十五分。けさ、夢を見た――いやな夢！憎い夢！どこか、活動寫眞のやうに動いて行く林の中を、昔の戀人（など云ふてやるのも殘念や）が追ひかけて來た。

『これ、須川さん、須川さん！』

『畜生、今一遍お崎と呼んで見い、承知しやせんぞ』と思ひながら、わていは一目三に逃げた。『宣教師の前でばかり、信仰深さうな敎師顏してをつて――二度と再びそないな手に乘りやせん！』

ぱツとその光景が消えて、ぴか〳〵と光る白紙のやうなおもてがつづいてをる思たら、また別な光景が現はれた。獨身のメリヱザ孃、川口女學校の校長がいつもの通りにツこりして、あいつと握手をしてをる。まさか、くツ付きやせんやろに、校長さんはどこからか飛んで來た赤ん坊を自分の子のやうに抱いた。それがわていの憎い、憎い達坊であつた。きやツと云ひかけて、聲が出なかつた。

姉ちやんもわていの跡から起きて來た。血色のない、あないな靑ざめた顏にわていも段々なつて行く知らん思たら、身振ひがした。十二時が鳴つてから、一緒に御飯を喰べたが、

『清水はん、よんべに限り呼んで呉れはりやへん』と、かの女は恨み言を云ふた。

『あないな奴は、おれは嫌ひだ』と、清水のわていに云ふたことを思ひ出した。が、わざと、『けふ』呼んで呉れまツさ』と答へて置いた。

食事が濟むと、姉ちやんは寢まきのまま、またごろりと横になつた。そしてきのふの小說の續きを讀んで呉れと云ひ、よんべ今一つのを見たけれど、面白くないと。

『そりや、こツちやのは理窟の日記だツさかい、な。』

でも、『放浪』もあま過ぎる分子と堅過ぎる理窟とが混合してをるのは免れない。

午後三時過ぎ、母がやつて來た。もうお金を欲しさうにしてをつたけれど、わていはとぼけて、『この社會は却々面白おまんなア』などと云ふてやつた。娘を賣つた身の代金は數日前その懷ろに這入つたのやないか？まさか、それを誰れか好きな若い人と一緖に、もう、飮んでしもたと云ふやうな筈はあるまい。慾張り婆々ア！醫學生とでも、私立大學生とでも、勝手に不釣り合な道樂をするなら、するがええ――わていを二度とは苦めまい！

黃色新聞社の長沼はんがちよつと遊びに來いと云ふて來た。姉ちやんが行かんのも惡い云ふさかい、行た。この社長の控へ所同樣にしてをる、川佐と云ふ料理屋の一室に、よんべの畫かきもをつて、酒を飮みながら、豪傑然として面白くもない日本畫を書いてをる。

『おい、春子』と、この人が一番初手の言葉や、『ゆふべアおれを振つた、な。』

『お氣の毒だんなア』と、わていは笑つて冷やかな目を向けた。

『あすは、うんとお前の惡口が出るぞ。』

『どこへだツかい、な？』

『黃色に、さ。』

『旦那、ほんまだツか』と、わていは困つた風をして、默つて微笑してをつた長沼はんに聽いた。

『もう、苦勞人じみて來たぞ』と笑ひながら、渠は社長らしい樣子をして、わていをええ藝子やさかい、新聞で肩を持つてやるのや云ふた。うそにも、それはありがたかつた。でも、賴みもしやせんのに。

お座敷へと迎ひに來られたので、屋形へ歸つてから、支度をしていた。今夜の宴會は話振りで市會に關係ある人達のと見えた。その中に、○船會社の○長大川はんもゐやはつた。その肥えて鼻血の出さうなからだを、この夜、わていが引け受けることになつた。第一回、○○○○○○○○。第二回、○○○○○○○○○○○○○○○○○。第三回、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

四月八日。曇。（昨夜、雨あり。）けさ、早く屋形へ歸り、一寢りしよ思たら、雇ひのおばはんが姉ち

やんのと並べていつも取つて置いて呉れる寢床がひツくり返つて、赤いもみ裏が血を吐いたやうにおもてへ流れ出てをつた。をかしい、なアおもて、帶をといてをつたら、おばはんが勝手の方から手招きして云やはるには、姉ちやんが何かおこつて、わていの寢床を蹴飛ばしたんやさうや。何かてかまへんおもて、長襦袢のまま床へもぐり込んでしもた。

右の肩を捕へてわていを引き起したものがあるので、ぴツくりして目を明けると、姉ちやんがそのこけた頰の上へ二つの目をぎろつかせて、

『この新米藝子、ようわていにお茶を引かせはりました、な』と怒鳴つた。

『何を云やはんのや』と、わていも出し抜けに腹が立つた。

『わていの旦那を横取りしやはつたやおまへんか？』

『阿呆らしい！』

よう聽いて見ると、清水はんがよんべも、おとつひの晩も呼んで呉れなかつたのはわていの爲めや邪推してゐやはつたところへ、けさの新聞には、渠がよんべわていを島卯で待ちぼけしてをつたと書いてあるのを見て、いよ〳〵妬ましうなつたのや。その上、わていのことを仰山讃めてあるのや。黄色がわていを讃めるとか、くさすとか云ふことはきのふ聽いてたんやけど、よんべは清水はんに逢ひもせなんだんやし、また、口がかかつたことも聽いてやへん。島卯のことは新聞記者の造りごとか、それとも、實際あつたことを俄かに附け足したんか？

『あの旦那は一晩でも藝子抜きでをられん人や』云ふたかて、わていの知らんことは知らんもんぢや。なんぼ辯解したかて、あのヒステリ傾向にや分りやへん。厭や、厭や。

面倒いなら、いつそ、横取りしたろかい？

きのふからの日記をここまで書いてをつたら、格子さきへ俥がとまつた。まさか山本はんや大川はんではあるまいとおもてたら、

『姉さん』と云ふ聲が聽えた。

おばはんが忠義振つて達坊をあがらせよとしたので、わていはおこり付けてやつた。これはあながち姉ちやんに對する當て付けばかりではない――あの淫亂な、慾張り婆々アが、きのふ素手で歸つたさかい、今度目はまた子供をおだてて、ねだりに來させたのや。わてい、子供は見たうない云ふて弱みに付け込んで、わざとらしう俥で送つて來た。よんべもろた五圓札四枚の中から、一枚をやつて、中の敷居をまたがせんで追ひ拂ふてしもた。畜生、僞善者――誘惑のかたまり！憎うて、憎うて溜らん。どないにしてやろ？

氣がくさ〳〵して來たので、ヴイオリンを燒け彈きに彈いてやつた。隣りからは、愛子姉はんのしめやかな地歌三味線の音が聽えてをつた。毎日、毎日、曇つた天氣ばかりで、東京なら花曇りたら云

ふのやろけれど、花の少い大阪では何の風情もありやへん。山本はん、箕面でも案内して呉れはつたらええのんに。あの人がこツそり注文して呉れた帶は二三日中にでけるやろ。

今夜、姉ちやんはぷり〳〵してお座敷へ出て行た。あれで三味線でも彈けば、こんにやくのお化けやろかい？

わていのお座敷には、おとつひ見たお爺さんもをつた。相變らず鼻の下が長い。宴會が濟む頃、隅田から清水はんにもらはれ、うそにも、その熱心に感じた。もう、姉ちやんも、くそもあつたもんやない。○○○○○○○、○○○○○○○○○。○○○○○○○、○○○○○○○○○。○○○○○○○○○。

四月九日。曇。嬉しや、けふは箕面公園に行かれる。あそこには多少の花もあらう。天然の景色は申すまでもなし。それに、立派なお客のお座敷やて、いツちええ着り物で來いと。お茶引きの姉ちやんなんて、心惡いほどねめ付けてゐやはるけれど、かまへん。

四月十日。曇。午後より晴る。きのふのお客は○○大臣の○○はんであつた。箕面動物園内の松風閣で、並みのお客は入れん家やさうやが、會社のおもな人の必要に應じてお座敷をあけるのや。この○○會社の社長はんで、肥えてにこ〳〵しやはつとる○○と、何たら云ふた京都の代議士とが二人で大臣はんを持て爲してをつた。政友會がどうの、非政友の團體が必要のと、何やはツきり分らんことを云ふてゐやはつた。わていのいツち嬉しかつたのは。山本はんが來とつたことやけれど、あの人は氣の毒なほど遠慮して、三太夫のやうな役目をやつてゐやはつた。藝子では、南の八千代はん、秀勇はん、春蝶はんなど、北のでは小金はん、清子はんなど、みなちやき〳〵の連中へわていも這入つたのや。山本はんがわていをかげに呼んで、

『今晩は、お前、とまつてお客のおとぎをするのだぞ』と云やはつた。

『わてい、いややし』と答へて、わていは渠をうらめしさうに見てやつた。實際、いややないか？一晩でも世話になつた人が他のお客のおとぎに出よとは、あんまり水くさい。それが大臣であらうが、參議であらうが、それを面と向てわていに云ふのんは！

『でも、賴む』と無理に云やはるのんで、何か知らんけれどわけもあらうおもて、とまつた。そして、けさ、十時に別れた。○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○心臟が弱いので、○○○○○。○○○○○○○○○○○○○。○○○、○○○○○○○○○。それぞれ○○違ふ。山本はんは唐がらし、大川はんは引き臼、この○○はんは樽のやうで、からだは大けいのんやけれど、賴りがない。

けふも、姉ちやんと云ひ合ふたのんで、川佐へ長沼はんを訪ひ、智慧を貸してもろた。

『清水を取つてしもたんやろ』と聽きやはるさかい、

『さうや』と白狀してしもた。そして長沼はんの世話でわてい獨り一軒借ることにして、母を——いややけれど、そない奬めるさかいに——呼びよせる手紙を出した。淸水はんの宴會がないのんなら、わていが直に行て、云ふのんやけれど、——どないせい、今晩もここに寢やせんやろさかい、けふはこのままにしといて出てやろ。

四月十一日。曇。もう、姉ちやんに會ひたうないさかい、往なんで、あさから○○に遊んでをつた。長沼はんに電話をかけたりして、お晝御飯を喰べてから新らしい屋形へ來た。好かん婆々アやけれど、嬉しさうに働いてをるのを見ると、今の身に賴りない人ともおもへん。どないせい、墮落の淵なら、親子もろともや。

『子供を産まんやうにせいよ。』そないなことは、ちやんと分り切つてるやないか？あの憎い〳〵餓鬼で旣に巳にや。ああ〳〵、これからは母と娘と、親子水入らずの濁り江や。あの姉ちやんと離れただけがまだしも氣を樂々させる。

帶が屆いて來た。誰れからやと母が根問ひしたけれど、そないなことはこツちやの腕にあり、さ。——申す必要はない。

金曜日はいやな日や。果して今夜めんどいことがあつた。外でもないけれど、長沼はんのお座敷へ行つたら、意外にも、例の畫かきや外の記者はん連にまじつて、金子瀲江はんがゐやはつた。この連中の新聞にゐやはつて、センチメンタルな抒情文が得意なのんは、兼て知つてはゐたんやけれど、今夜會ふとはおもはなんだ。川口女學校で、あいつ等と一緒に敎師をしてゐやはつた先生やないか？わざとあの時の話を持ち出して、わていをいじめるのんやもん——腹も立つし、また情けなうもなつた。

『ええ新聞種がでけたぞ』と、長沼はんは喜んだ。

『これこそ出してもろた方がええ。』云ふたら、

『江戶のかたきを長崎や、なア』と、瀲江はんが云やはつた。

『無論だツさ！』おもて向きばかり聖人振つた奴等に對して、裏の裏の實生活を渠等の前に豪然とへけらかしてやりたい。

今夜も淸水はんや。○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

四月十二日。晴。買うてからまだ讀むひまがなかつた『新小說』を開けてをつたとこへ、淸水はんがやつて來た。銀行からの歸りに直に來やはつたんやろが、紳士としてこないなとこへ見ツとむない——餘程のぼせてゐやはるのやろかい？ぼんちにちよつと毛の生えたとこやさかい、なア。それにしてもあの婆々アがをかしかつた。帶のお客はんおもたのやろ、

『きのふは結構なもんを――』

『ふ、ふん――お母はん、ありやわていが買うたんやないか』と、わていが胡麻化してしもた。

『春ちやん、けさの黄色讀まはりましたかい、な？』

『ええ――新聞屋なんて、ええ加減なことを云やはりまツさ。』

『さよか』と、渠は云つた。

比叡山下の日吉祭

比叡山のふもとなる官幣大社日吉神社の古式祭次第と云ふは、毎年四月三日に先づ『お輿揚げ』と云ふのがある。乃ち、牛尾三宮兩社の神輿を牛尾山上の社殿にかつぎ揚げるのだ。同じく十二日に、再びこれを舁ぎおろして本宮の拜殿に据ゑ、十三日に本宮、牛尾、樹下、三宮等の神輿を産屋神社の宿院に遷し、『花渡り』の式、『獻茶』の式があつて、『未の御供』を行ふ。それから十四日になつて、奉幣使（地方官がこれに當る）が宮内省よりの御幣物を奉つて後、すべて七社の神輿が出御する。

この日の輿丁として參勤を得たるものは、昔は近江の國では滋賀村全部、山城の國では高野、八瀬、一乘寺、修學院等の諸村であつた。明治時代になつては、この古式を坂本祭りと稱することになり、地もとなる坂本村の人々が特に力を盡して來た。この神は、もと、大比叡に祭られてゐたのだが、延曆寺の爲めに山王權現として小比叡に遷され、その神輿はかの手荒い山法師の翫弄物となつたことも ある。坂本村の人々は叡山の仕事で生活して來たもの等だから、いまだに荒法師の遺風がある。そしてその家の格式に從つて誰れが一番を舁ぎ、誰れが二番を上げると云ふ八釜しい定めがある。

その當日になると、きまつた輿丁どもは至るところで歡迎の盃を仰ぎ、酒の勢ひと春ののぼせと多數の人氣とに乘ずるのであるから、なか〳〵殺氣立つのだ。喧嘩祭りの俗稱を得てゐるのは尤もらしい。僕は明治三十五六年頃を三ケ年間つづいて毎年この祭りを見る機會があつた。その或年、京都の俠客なにがしと云ふのが見に來てゐたが、輿丁どもに何か無禮な行爲があつたとかで、子分どもの尻込みするにも拘らず、自分は御輿の通り道に兩手をひらいて立ちふさがつた。うへの方から坂おとしに飛んで來る神輿に押し倒され、踏み敷かれたかと思ふと、なにがしはらくに輿の棒につかまつて一緒に運ばれるさまであつた。これを見た村民は怒つて渠を丁度橋の上のところで引き放し、もみぢの木の多くある谷あひに突き落し、石や床几を投げかけて、渠の頭蓋骨をうち割つた。

渠が斯う云ふ見じめな目に會ふまでに渠の子ぶんどもは逃げて、その場にゐなかつた。渠は自分の割れたあたまを自分のふんどしを取つて縛り、兎も角も獨りで、大津の縣立病院さして急いだ。その車が二里餘りを來ると、左馬の介駒どめの松のところで、太郎吉と云ふ子ぶんが待ち受けたやうに飛び出して、

『親ぶん』となつかしげに聲をかけた。が、親ぶんは二度と見向きもせず、『どの顏さげて云ふのか』と云ふ聲をあとに殘して、車に運ばれて行つた。それを追つて太郎吉も病院へ行つたが、他の兄弟分等と同樣に面會を許されなかつた。そして親分は京都から急を聞いてやつて來た家族のものにばかり取り圍まれて死んでしまつた。卑怯の爲めに死人に見限られたのを悔んで、地段太踏んで男泣きに泣いたのは太郎吉であつた。

その翌年は必らず仕返しがあると云ふ風說で、その筋に於いても注意を怠らなかつた。十二日の夜、午の神事があり、二基の神輿を牛尾山上から舁ぎおろすには、甲冑を着したもの數十名が前後を警護し、多くのたい松や高張り提灯が山道の嶮岨を照らし、輿丁一齊にときを作つて走り下だる勢ひは、あたりに立ち竝ぶ多くの見物と多くのふる杉とをゆりどよもすばかりである。太郎吉をかしらに數十名が亡き親分の名譽を恢復する爲め、果してここに來てゐるのだが、いまだ手を出さないうちに神輿は本宮の拜殿に納まつた。斯くて十三日の御輿入れとなり、次ぎに花渡り式あり。甲冑を着した兒童が種々の造花を大指物としたのにつき添ひ、これが警固の輩數十名、それぞれに先祖傳來の具足をつけ、先きなる緋おどしはもとの庄屋、次ぎなる黑皮は明智が家の末裔、三は卯の花、四は裾濃。加藤淸正の遺物と稱する烏帽子もあり、赤地に竹の葉の直垂れもあり。すべて着飾つて神輿竝に本宮の參拜にのぼるので、百姓やてら小使ひどもの行列とはちよツと見えない。が、太郎吉はこれに對して、見物の中から、鳥居のかたがはで、

『あの間抜けたおさむらひを見い』と叫んだ。同時に、申し合せたかの如く渠には最も手ごたへのある仲間のあざ笑ひが聽えた。すると、向ふがはでもこれに應ずるやうなあざけりの聲があつた、——

『どいつもこいつも屁ツたれのやうで——腰の据わつたものはひとりだツてをりやせん。』

この云ひぶんは如何にも事實であつたが、儀式としては無事に獻茶式に進み、神社の用水走り井の淸水をわかしたので茶を點じ、これを宿院に入れた四社の神輿に奉る。次ぎを未の御供と云ひ、西京日吉神社の神職がこれに參勤する。御供物の中には白羽矢、造花、雛人形、ふくら雀等、小兒のもて遊ぶ物があるのは、別雷神降誕の儀式が今にその一部を傳へてゐるのだと云ふ。この式が終ると、輿丁がかけ參じ、四社の神輿を舁ぎて勇むこと暫時。やがて甲冑武者の驅けつけるや、輿丁どもは神輿の擔動をとどめて高くこれをさし上げる。そして四基が齊しく整ふと、獅子舞が演じられる。それから神人綾織の曲あり。扇の揚るを合圖に御輿を一齊に殿下に落し、輿丁これを受け舁いで疾風の如く競爭して走る。むかし、藤堂侯この景況を見て嘆じて云つた、『この勢ひを以てせば百萬の軍に敵すべし』と。夜中だけれども、庭燎の光は皓々として殆ど白晝を欺く。見物するもの等がわざと輿丁の進行を妨げようとするのが例年のならはしなのを幸ひに、太郎吉どもはここをせんどといろんな邪魔を加へ、小じやりや燃えたたい松をなげなどした。けれども、一は神輿の鳳凰を燒き、一は左り側の鳥

居がたを破り、また一は一輿丁に重傷を負はせただけであつて、あまり注意するほどの結果に至らなかつた。

翌十四日はこの官幣大社の例祭で――午前にそれぞれの式あり。さきに本宮から大津四宮の天孫神社へ奉送したおほ榊が午後三時頃に歸つて來る。これを神職が奉迎すると、護衛の武者どもは列を成して從ひ、遲咲きの花が散り敷く廣馬場を徐ろに渡り行きて本宮に進み、神前に參拜する。稚兒一名、大津より附き添ひ、黑の袍を着て馬上にあり。あげ切りと云はれて、むかしはそのまま神の生けにへになつたものらしく、今日でも、參勤がすめば裏道からこツそり逃げて行くことになつてゐる。

つづいて幾百かの輿丁どもが疾走して來る。そして一名の武者が扇の手を開くと同時に、有名な『拜殿出し』が始まる。御輿七基はすべて宵宮からここに入御あり、左右におの〳〵三基、中央に一基、互ひに輿の棒をまじへて据ゑ置かれた。待ちに待つたる輿丁どもは、それ〴〵自分等の受け持ちを舁ぎ出さうとしてあせり合ふ勢ひは、全く何かの無形力が乘り移つてるやうで、恰も拜殿は振動し、觀客もおのづから畏を感じないではゐられない。そこに、然し、順序があつて、出は一に本宮、二に大神、三に宇佐、四に牛尾、五に白山、六に樹下、七に三宮の神輿である。

さて、樓門外、春日岡のあたり、あまたのおほ杉直立してかう〳〵しいその樹かげに於いて輿の裝飾を終る。この時、本宮の輿前で宮司は笏を取つて東遊の歌を奏す。それからいよ〳〵『坂おとし』となる。双合の坂、道は廣く一直線に波止戸の橋を渡つて、日吉の馬場に出る。その中段、橋の少しうへのところが最も嶮しく、乃ち、去年の親ぶんが立ちふさがつて輿を押さへようとしたところだ。太郎吉どもはまる一年來の悲しみと恨みとを新らしく感じながら、このあたりの兩がはに陣取つて、私かに仕返しのをりを覗つてゐた。ところが、もツと高みにあつて、御幣を結びつけた長い竿の倒れるのを合圖に、本宮は威勢よく坂を落して來た。輿丁どもの足で驅けるのではなく、見えぬ羽根がはえて飛んでるやうな疾さだ。ほんとに死んだ親ぶんの如くいのち掛けでなければ、とてもこれをさえぎることはできなかつた。四隣、風を生じて、かな具の響き戛々として過ぎ、橋のうへで肩を替へたが、その手ぎはには一寸のゆるみもなかつた。やツさ、やツさのかけ聲は觀客數萬人の間を馬場の方へと勇んで行つた。再び幣が動くと、二の宮が來た――また、宇佐や牛尾が。斯くて太郎吉はぼんやりしてしまひ、

『とても、これはかみごとや』と嘆息した。そして、つひに全く手を出すのを斷念し、最後の三宮のあとから渠は唐崎に向つた。御輿はすべて八本柳の濱邊から御乘船あり。湖上の競爭して唐崎の松かげに着御すると、本宮の御座船は粟津の里から艤漕して來た供物と大幣束とを受ける。この時、丁度ゆふ日が西に傾かうとしてその殘りの光を湖上によこ投げにし、すべての御輿の裝飾は浪と共に輝き、粟津御供船の奏樂はその調うるはしく颯々たる松かぜと相ひ和した。ここを見ると直ぐ、太郎吉

はその姿を仲間から隱した。そして左馬の介が一つ松のもとに來た。渠はここで親ぶんを最後に見た記念として、再びここで喧嘩用の懷中の短刀で申しわけの割腹をしようかと考へたけれども、なかなか斷行し切れぬうちに仲間どもが來て、

『いかにもわしは卑怯や』とぐずねる渠を無理に京都へつれ歸つた。

その夜の琵琶湖は入菊章の紅燈數千を以つて照らされ、白い浪も赤く見えた。が、合圖の太鼓に七社の御船はすべて勢ぞろひを爲し、再び海を競爭しつつ無事に還御となつた――如何にも無事に。そして坂本村の人々が太郎吉のことを傳へ聽いてぎよッとしたのは、その年の日吉祭り熱が二日と過ぎ、五日と去り、全くさめてからのことであつた。（大正六年九月）

僕の娯樂

元日早々から議論でもなからうと思つて筆を執ると、先日或雜誌社から、新年號に出す問題として、『最も好む娯樂』は何だと質問して來たことが思ひ出される。僕は之た答へて、わが國の婦人がいつまでも受働的で、愛せられることを望むばかりで、愛する方の表情に乏しい間は、藝者の階級が最も必要であるし、更らに進んで云へば、百人、千人の美人にかこまれて、純粹の日本酒を飲むか、佛蘭西のアブサントをすることが出來たら、無上の娯樂であらうと云つて置いた。

全體、わが國の男子は、老いぼれ易いものと、ますゝ活氣が出るものと、その旗幟が餘り鮮明になり過ぎて居る。老いぼれ易いものは年一年に老い込む樣子が見えて行くし、活氣のあるものは年毎に若くなつて行く勢ひを示めして居る。後者の部類に屬するものが、段々世が賴母しくなつて來るに從つて、わが國の社會が無趣味で、家庭がまた寂寞であるのを感じて來る。僕などはその一人である。

世が賴母しくなればこそ、自分のエネルギイを蘊蓄する氣にもなれ、その間に氣休めを要する。然し、現今の婦人の狀態では、男子が家庭に於て女房や子供を相手にするのでは、まどろツこしくて、決して直接な滿足は得られない。氣力の盛んなものには、尙更らそれが熱烈に感じられる。外へ出る野郎ばかりでは、いつもやはらかい空氣は吸へないから、たまには、友人として話せる婦人を訪問する。話がはづまないことはないが、渠等は一般に三味線はやれない、さりとて、西洋音樂を知つて居るのでもない。歸するところ『左樣』、『然らば』に少し毛の生えた交際に過ぎない。

最も直接で、最も無形式な氣休めは、藝者の社會に於て發見することが出來る。理想とか向上とか云つて、身づから欺き上品がる人々は、到底、この切實で實質ある要求を解することが出來なからう。エネルギイが壓迫または蘊蓄される度合が多ければ多い程、僕等はこの苦痛を育て養ふ方法が直接、無形式でなければならない。古典肌の人間は、卑怯なだけ、エネルギイを用心して使ふから、氣違ひになる心配はない代り、形式的な間接娯樂を以つて滿足して居るに過ぎない。然し、如何に直接

に腹わたの洗濯が出來るからと云つても、頭腦を使ふものはさう毎日酒と歌とに耽つて居られないから、僕などは玉突きをやつて濟まして置くことが多い。

玉突も非常に切實な氣休めになるものだ。僕が之をおぼえてからもう拾年以上になる割合には、一向上手にならないが、肺を病みて琵琶湖畔に隱退して居る時、殆ど半年ばかりは玉突で日を暮らした。一時は失望したが、僕はエマソンのやり方に從つて、肺を直すに、藥に手賴らないで、氣を以つて勝つたのである。その後、貧乏して困つて居た時などは、玉の代りにおきやがり小法師の小いのや大きいのを澤山買つて置き、讀書や執筆に倦んじて來ると、之を一掴みにして疊の上にずらりと投げる。その投げ方、ころがし方によつて、種々な形勢を現ずるのである。

大きいのから小いのが一列に並ぶこともあり、すべての法師が前向き又は後ろ向きに揃ふこともあり、また一つ置き前向きにと後ろ向きとになることもあり、兵隊の進行の如く二列、三列、または四列に組み合ふこともあり、三々伍々別働隊を形作ることもあり、向き合つて喃々密語する如きもあり、くるくるツとまはつて鉢合はせをするのもあり。熟練の結果、すべてかういふ形勢は兩手の開きかたにあるのであつた。おきやがり小法師も亦、僕に取りては、藝者や玉突きと同樣、精神の氣休めには最も直接なものであつた。然し、子供が大きくなるに從つて、その方のおもちやになつてしまつた。

娯樂といふことが、若し世人の考へて居る樣に、贅澤な物で、あつてもなくつてもいいといふ樣な意味なら、僕には少しも娯樂はない、詩才のないのに詩歌を作り、樂才のないのに琴曲を彈じて、之をなぐさみとして居る樣なことは、豚に玉を投げ與へたと同樣、無意義である。僕等が詩人として詩を作るのは、僕等の生命、乃ち、苦痛である。僕にあるのは苦痛ばかりだ。之は僕の人生觀である。僕が以上に云つた氣休めも、この苦痛を育て養ふものであるから、苦痛の一部である。僕の娯樂は苦痛の避くべからざる要求であつて、決して苦痛以外に別に餘裕のある裝飾物ではない。『カイザルの物はカイザルに、神の物は神に』といふ樣なまどろツこしい考へを以つては、新時代の宗教國家が成立しないと同樣、娯樂を苦痛から離して見て居られる人は、到底、生存競爭の烈しい時代に生存する資格がなくならずには居られないのだらう。（明治四十年一月一日）

ロスケ小屋

この新年を僕は樺太で越年するつもりで、――然しそれは事業の失敗の爲めに空望となつたが――小い家を一軒買つて置いた。それはロスケ小屋であつた。樺太には隨分諸方で見ることが出來る露西亞人の遺物だが、丸太を横に組みかさねて四壁となし、相當なところに窓をくり明けてガラス張りにしてある。どの小屋も大抵は二室ぐらゐで、三室もしくは四室あるのはすくない。して、家の眞ン中には必らずペチカといふ釜土兼用の煖爐があつて、朝に一回、晩に一回の焚木をくべると、終日終夜、

いづれの室もあつたかみを絶やさないやうになつてゐる。

僕が邦領の殘留露人や露領の官吏抔を訪問したのは夏であつたが、如何に冷しい、否、ひイやりする日でも、ペチカの火熱が烈しいので、長く一室にとどまつてゐることが出來なかつた。ビレオへ行つた時などは、不慣れの日本人には室内の熱さに堪へられないだらうからと云て、屋外の海に向つた涼み臺で御馳走になつたが、そこへ敷かれたテーブル掛けには南京虫がくツついてゐた。ロスケ小屋で厭なのは、第一に南京虫、第二は、風の吹き込む壁の透き間や煙のもれる煖爐の穴などに、馬の糞をなすりつけてあることだ。然し、僕が好んでロスケ小屋を選んだのは、冬、最もあつたかいといふからであつた。

僕が買つたのは二室の小屋だ。その外部の横手と後ろ手とには、一間ほどの幅を殘して、板がこひがしてあり、直接の風には當らないで、水仕事が出來る樣になつてゐ、また鍊釜の風呂も立つ樣になつてゐたが、室二つのうち、一つは穢くて臺どころ用にしかならないので、實際に書齋としてまた寢室として使へるのは一室しかなかつたのだ。ペチカもついてはゐたが、古びて、もう、用ゐられないのであつた。露人なら、三年目に一度ぐらゐその練瓦をつみ換へて、よく直すことが出來るが、わが國人がそれを眞似ても、うまく行かない上に、まかり間違ふと、火事を起すおそれがある。それを使用しないでも、煙が切つてありさへすれば、ロスケ小屋は、わが國の家屋よりも、ずツとあつたかいのだ。

僕のは、樺太西海岸のマオカといふ港のはづれにあつた。水道がひかれるので、水も四五間行けば汲まれるやうになるのであつた。マオカは樺太唯一の不凍港と云はれてゐるだけ、海水は遲くまで凍らないが、市街は雪を以つて吹きまくられ、道路は氷を以つて閉ぢ籠められ、家に貯へる汲み水が直ぐ石になつてしまうのは勿論、玉子も、葱も、キヤベツも、皆、しわれてしまう。人も亦、外出して、雪燒けの爲に、つひに足を失ふ樣なことがないでもない。そんな寒いところの、そんな古びたロスケ小屋に立て籠り、僕が一冬を送らうとしたのは、現代の文學界に對する興味を氣まぐれに失ひかけたのでも在ただらうが、また一つには僕の始めた鑵詰事業の第二年目の經營を自由にする爲め、副業として、樺太の山林の木材を切り出す計劃を立ててゐたからである。

僕はさういふ事業に全力をそそげばよかつたのだ。製造人や、雜漁者や、運送業者や、鑵詰問屋や、大工、木挽、木樵などには、僕のやり出し方によつて進退を決しようとしてゐたのがあつた。然し僕は、金錢慾に淡白過ぎただけ、この種の事業をする資格を缺いてゐたのだらう。渠等が、僕の計劃をたよりに、僕の周圍に寄つてたかつて來るのを平氣で、玉突や酒色に耽つてゐた。その年の鑵詰事業が到底うまく行かないのを知つてゐたからである。これは、もつとも、僕自身の悪いのではなかつたが、僕が信じて僕より前に遣はした人物の經營が、初めからよろしくなかつたのを、僕が行つてか

ら、發見したので、どうせ失敗なら、飲んで遊べといふ氣になつたのだ。副業の問題は勿論、肝心の本業がまだ僕のあたまによく這入り込まないにも拘らず、僕は玉突と女とに耽り、また好きな旅行を試みて、露領の方までも放浪して行つた。

矢張り僕が悪かつたのだ。その放浪からマオカに歸つて來ると、難局がます〳〵難局になつて來た上、蟹の收獲が一時中絶する時期で、製造所には、傭ひ人がすべて手を空しくして、遊んでゐた。金の運轉が全くつかなくなり、僕は僕の宿賃にも困る樣になつた。その間にも、僕は僕のロスケ小屋の越年を考へてゐた。失敗の挽回策をそこで實行する筈でもあつたが、一方には、また、充分の用意をして、そこで、のんきに、讀書と創作とをやつて見たかつたのだ。それに付、そばに獨りゐて呉れるものが必要なので、東京から愛婦を呼び寄せるつもりであつた。

然し事はすべて僕の考へ通りに行かなかつた。東京への仕送りが全く出來なかつたので、愛婦が先づ僕にそむいてしまつた。次ぎに、また、僕がマオカに滯在してゐると事業上の費用がかさむので、或要件を兼て北海道に渡つたが、その要件も滿たされないで、徒らに放浪する身となつた。且、僕が樺太を去る時、第二期の事業費として、數百金を拵らへて殘して來たそれも、亦、第二期製造場の撰定ぞこなひやら、二ケ所に製造所を分けた間違ひやら、悪辣な人物を世話人に加へた失敗やらで、全く空しい出費となつてしまつた。して、僕にそむいた女が――別な男に棄てられたのであらうと思はれた――再び僕を北海道に追ふて來て、病院に這入るといふさわぎになつた。

僕は事業の失敗などは殆ど全く苦にしなかつたが、女の病氣は僕から移つたもので、隨分長くかの女を苦しめてゐたから、女が一緒に死なうと云ひ出した時には、僕も全くその氣になつた。どうせ酒に溺れ、遊里に入びたつて居た程であつたからである。然し僕は、その少し以前に、田中喜一氏の『岩野泡鳴氏の人生觀並に藝術觀を論ず』といふ文が掲載されてゐる中央公論を、直接に田中氏から送られてゐたので、それに對する反駁文を起草中であつた。反駁文は『悲痛の哲理』(文章世界新年號掲載の筈)と稱し、生の哲學を說いてゐるのである。苟も生を說く間は、僕に死を急ぐ必要はなかつた。そのうち、女のところへどこからか手紙が來て、或人と結婚をしないかと申し込んで來たので、かの女も亦氣が變つてしまつた。どうせ、かの女と僕とは、その時、心中しない以上は、一緒に住むことは出來ない事情になつてゐたのだ。

あのロスケ小屋を占領して、かの女と共に樺太の氷雪に立て籠ることが出來てゐたなら、今頃はさぞ面白かつたであらう。僕等の木挽は樺太の深林中で官憲の刻印した木材を切り出し、僕等の大工は挽かれた板に寸法を當てて、本年の事業開始期から必要な櫃箱や罐箱を拵らへてゐただらう。して、僕等ふたりは、あつたかい室に立て籠つて、外の氷の上をアイノ人が驅る犬橇の鈴音を聽きながら、眠るだけ眠り、食ひたいだけ食ひ、眠りに飽き、食ふに飽いた時は、かの女をそばに坐わらして、僕

はちいさい机に向ひかの女と僕との殆ど二年間に渡る關係を小説に描寫し、かの女にルビを打たせながら、僕はその長篇の描寫をつづけてゐただらう。

然し僕は今や樺太に於ける事業の失敗者であると同時に、再びかの女に見棄てられた失戀者である。樺太に於て占領しかけたロスケ小屋を遠くこの東都に於て思ひ浮べながら、そこで書くべかりし小説をここで筆にのぼさなければならないことになつた。小説の表題は『努力』といふ。無論、努力と云つても、デカダン的努力を云ふのだ。隨分長くなるだらうが、これを以つてこの明治四十三年に於ける僕の文學的活動のおもなものにするつもりだ。

北海道の天然

本年の六月、樺太に渡る途中で僕が鳥渡札幌へ立ち寄つた時、停車場前のアカシヤ街や、ドロ、イタヤ、アカダモ（ハル楡）白楊樹の蔭多い道を通り、第一に外國じみたところだ、な、といふ感じが起つた。然し樺太の別風景に接してから、再び北海道に來た時は、もう、左ほど珍らしい感じは起らなかつたが、なほ、內地のことを考へると、丸で氣持ちが違つてゐた。

札幌は、石狩大原野の中央に開らかれたのであるから、その市街の井桁は縱橫自在に、飽くまで正確な角度を以つて延長し、南北何條、東西何丁目の末は、いづれも新開の耕地、林檎畑、牧草地、または茫漠たる泥炭地の間に消えてゐる。道路工事もこれ位自在に正確を保てると、殆ど天然の配置として見てもいい。京都市中のそれなどは決して比較にならない。その上、積雪を防ぐ家の建て方が違ふし、道ばたや庭の立ち木の種類も違ふ。

さかさ箒の如く、細高く空天にそびえる白楊樹は、內地で云へばいてふの格だらう。普通の柳の代りにドロがあり、楓の代りにイタヤがあり、アカダモは北海道でなければ見られない楡の類だ。同市の農學校附屬博物館庭內には、すべての樹木が見られて、夏は實にいいところだ。かういふ木々の蔭道を、近在から出て來る百姓馬子が、——男にせよ、女にせよ——青物を積んだ荷馬を引ながら、呼び賣りする。林檎、唐もろこし、甜瓜、大根、キャベツ（カイベツとなまる）、玉葱のおびただしいのも珍らしいが、くるみ、ココア、グズベリなどを特別に賣り歩く時があるのだ。して、又、唐もろこしの時期には、町の角々にこん爐を持ち出し、その實を燒き賣りする店が晝も夜も出る。その香ばしいにほひが札幌を代表する樣にも聽える。

小樽は、それと反對に、公園以外では樹木が殆ど見られない。且、山ぎはの海岸を控へて居るのであるから、道筋が正しくないし、又、道路は石ころででこぼこしてゐる上に、雨が降れば、それが深いぬかるみになつて、長靴でなければ、とても歩けない。然し商業地としては、人間が活動的で、寸時も心に暇がないし、而も金融機關がよく備つてゐるのだから、現今では、函館をずツと凌駕してし

まつた。札幌は閑靜な官吏町で、小樽は激烈な商業地だ。函館に至つては、寧ろ青森や盛岡と同一に見爲すべきで、鳥渡見ても、實に因循なところだ。そこよりもツと寒い小樽や札幌でさへ、全く雪よけの軒下道は附けてないのに、ここだけは東北流のそれが附けてあるのも、その一例にならう。函館は早く開らけたが、時の進歩に遲れたのだらう。

その他、岩見澤、旭川、帶廣の如き市街地も正確な道路が刻んである。道路の正確と延長とは、北海道で氣持がいいものの一つである。日高、十勝の原野に行くと、六里の道が一寸の曲りもないところがある。僕は馬に乘つて膽振、日高、十勝の山野を八十里ばかり跋渉したが、膽振から日高に跨がつて、三日路ばかりの間は、至るところ、地上僅かに一二寸を掘ると、ほの白い火山灰が五寸から一尺以上も積んでゐる。然しそれが樽前山を遠ざかるに從つて少くなつて行くのだ。或學者は、それが爲だめに、或時代に於けるこの山の噴火の結果だらうと推定した。火山灰地はすべて地質がよくないので、耕作には骨が折れる。牧場ぐらゐが適當だ。草木の發生もよくなく、密接するものは 樺の林が、それもひねくれてゐて、立派に延びたのがない。

樺（でなければ、楢）の樣な濶葉樹の間を、日高、十勝の原野道は通つてゐるのであるが、僕の旅行が濶葉樹の變色時期に際會したので、膽振から、日高、十勝と進むに從つて、紅葉の光が段々出て來たのは實に見物であつた。北海道は、夏も短いが、秋も亦僅かの間に過ぎてしまう。十勝の高原に來た時は、紅葉の間から、既に幸震岳の白雪を認めることが出來た。北海道の特色は十勝の原野にあると云ふが、十勝の特色はまた以平（いたらたらぎ）の高原にあると思ふ。黑い山荷葡の汁に渴を癒し、馬を驅つて、一直線に樺林の薄野を進みながら、目をつぶつて、樹々の木の葉が風に相觸れる音を聽くと、遠く近く急雨がやつて來たのかと驚かれる。して、目を開らくと、僕は青、黃、または紅色で彩取つた大風景の中を進んでゐる。

晴れ渡つた天空の藍のもとに、馬上の人は黑く地に投影し、すすきのぽつとした穗が近く遠くかさなり合つて、うす綿を敷きつらねた樣な原野に、木々の枝葉は青に、淺黃に、黃に、赤に、また紅。山は遠く薄墨の遠近と高低とを以つてうねり行き、その後ろから幸震岳がかしらを現はし、眞つ白に雪が積んでゐるのが見える。して、海岸らしい方向には、地平線と相つらなつて、灰色の雲が平らかに日光に輝いてゐる。僕は暫く馬をとどめて名殘りを惜しんだが、その荒馬のいなきが如何にも山野の魔氣を呼び寄せる樣な氣がして、孤獨の停止に堪へなかつた。

釧路の大ガスも有名だが、生憎、それに出會ふ時がなかつた。十勝から石狩に越えるところは、また絕景である。その鐵道工事も亦稀有の大規模だ。ロツキイ山中の過道線とまでは行かないだらうが、渦のかはりに七曲りほど大曲りの曲折を以つて。南北に渡る連山の山腹を西東にのぼるのだ。樺や楢の林の間を、清水（アイノ語ケヘレベツの譯）からのぼり初め、一曲り毎に十勝原野の眺望が廣

くなるのだが、鐵道の曲り目までが數丁あるに反して、延びた線と線との間が僅かに數十間しかないところもあるほど、工事上の工風に困難のあつたことが分る。それをのぼり詰めて、海拔一千七百五十五尺（鹿兒島の矢岳驛の海拔一千八百尺、それよりは少し低いが）の高處にあるトンネルを拔けると、その曲線道を越えて、十勝の大原野は遠く薄墨の一線に收まつて見える。僕がここを通つた時、雨あがりの車窓からのぞむと、その一線のうへしたに――夕かたであつたからでもあらう――赤みがかつたぼかしが附いて、近い山々の紅葉と相映じ、山にも野にもどことなく暖い光を包んでゐる樣な氣持ちを與へた。

紅葉の一名所神居古潭は、北海道には珍らしい內地的な小風景である。石狩川を兩岸から低い山が挾み攻めにする爲、流れは激して、川中に橫はる岩々を嚙むのだ。その末が大きな潭となつて、そこに渦卷きをする水の深さを測つたものがないと云はれる。潭は絕壁のもとにあり、その絕壁の上を汽車が走る時、全體の景を川上に向かつて見ることが出來るのだが、兩岸の紅葉はさすがに馬鹿にはならない。僕は一夜をそこの溫泉宿に過したが、雨あがりの朝景色を、潭のそばにかかつた有名な釣り橋に立つてながめた時は、實に奇麗であつた。ことわつて置くが、北海道には、もみぢは（變色のおそいイタヤといふ種類の外に）ないのだから、紅葉といふのはおもに楓でなければ、楢だ。で、赤ではなく、多くは黃だ。然し、黃色であつても、その間に、神居古潭では、內地の杉の如く直立する椴松や蝦夷松の樣な靑い針葉樹が直立してゐるので、それに對照して、非常に引き立つのだ。

石狩川は、北海道に於ける他の川と同樣、深い川である。深い川は、內地では、溢水の爲めに堤防を崩す樣なおそれがないと云ふが、事情が違つてゐる爲め、そのおそれが却つて多い。日高の染退川（しぶかり）膽振の鵡川の如きは、深かつたのだが、毎年、溢水の爲めに耕地や道路を十町歩も二十町歩も流すので、ただ無暗に幅つたい川洲になつて行く。つまり、――石狩川もさうだが――屈曲が多いので、水はけが惡く、流れが曲り角にぶつかる勢ひに抗抵するだけの力を、北海道の地盤は持つてゐないのだ。石狩川の溢水の爲め、岩見澤の全部並に札幌の半面が水に浮きかけたこともある。

北海道には桐の木がないと云はれる。然し仙臺の或古老の話に據ると、伊達家の一士が昔、本道に來て、桐の苗を澤山植ゑつけたことがあるさうだ。それがどこの山であつたか、記錄には殘つてゐない。ところが、近年、或人が金鑛や石炭鑛を發見するつもりで本道の深山をまはつてゐて、ふと珍らしい林に出會したのだ。木はいづれも一かかへ以上あるが、幹にはすべて厚い苔がまとつてゐるので、何木であるか分らなかつた。然しその苔を剝いで、初めてそれがすべて桐の古木であるのを知り、人には秘してそのありかを云はず、或利益と交換する約束を結んでゐるうちに死んでしまつた。この發見を仙臺古老の話に參照すると、必らずどこかの山にあるには相違ないが、いまだにどこか分らない爲め、北海道で金儲けに熱心な人々の疑問になつてゐる。

本道の天然を語る間には、熊と馬と土人とを忘れてはならない。狼は全くゐなくなつた。これに、懸賞をして狼狩りをさせたのが一原因だが、また、この猛獸の餌食なる鹿が殆ど全く盡きてしまつたのにも由るだらう。猛惡の樣で而も左ほどおそろしくないのは熊だ。山の『おやぢ』と云つて畏敬されてゐる。郵便物傳送の脚夫などは、近所にそれを見付けると、疾走をとどめて、そこらの石や木株に腰をおろし、煙草喫ひつつ『えへん、えへん』などと咳拂ひをして聽かせる。すると、渠は決して近よらないが、不意に二三間のところで出會すと、向ふもおそろしさの餘り、飛びかかつて來る。必らず後ろ足でつゝ立つものだが、畜生のあはれさは內手が利かない透きのあるに乘じて、アイノなどはそのおやぢの胸ぐらに飛び込み、鋭利なマキリを以て、立ちどころにその喉なる月の輪を刺すのだ。

馬は、熊の足跡を認めても、直ぐ悚んでしまうのがある。また急に逃げ出すのもある。僕が十勝の廣尾から大樹に渡る途中、樺、楢、またはドロの大木の間を、褪せかかつたブシの花がつづく山道に添ふて進む時、僕の馬は急に身振ひして跡ずさりするのだ。從つて、僕も亦それと同樣な戰慄を感じた。然し僕はどうせ破れかぶれだと云ふつもりで馬をぽツ立てると、馬は異樣な木の株を（おやぢと見違つたのだらう）横によけて、一丁ばかり駈け足であつた。北海道の旅行は馬がなければ出來ない上に、馬產國の名ある日高を通過したのだから、僕も自然にこの動物に關する智識を得た。日高で雌馬に乘ると、必らず當歲または二三歲の小馬が、どこまでも跡からてく〳〵ついて來る。して、最も自由な放牧場地になると、牧場に牧柵がなく、農耕地に却つて柵をめぐらしてある。して、馬の子がいつ生れたのか分らず、いつまた馬が熊に取られたか知れないこともあるのだ。

アイノは敗殘劣等の人種だ。どうせ滅亡してしまうだらう。いばらや岩石の間を例の素足で驅けめぐり、もとの通り熊狩りや貂取りをやらして置けば、まだしも無事であらう。然し現今の如く、渠等の不得意な耕作を强いられたり、好みもせぬ敎育を施こされたりしてゐては、惰弱と不勉强とに流れるのは當然だ。渠等は、神話的傳說とユーカリ、シャコロベなどの古史詩を以つて、北海道の天然の成り立ちを說明した以外に、もう、何の任務も帶びてゐないのだ。貯蓄と持久心のないのは尤もなことだ。政府の保護を餘りありがたいとも思はず、おもに山行きでなければ出面取りにその日を送りつつ亡んでしまうべき運命なのであらう。然し茫漠たる原野にひげだらけの老アイノに會して、土地の說明を聽いたり、また怒濤が寄せ來たる荒磯に、樞襤をまとつた若メノコが昆布拾ひを見たりすると、北海道はまだ〳〵渠等と離れがたい聯想を有してゐるのである。

僕が札幌を出る時はまだ紅葉には早いと云はれたが、僅か十數日の巡回で歸つて來ると、もう、札幌の道ばたに並ぶイタヤの葉が落ちかかつてゐた。して、烏渡まご〳〵してゐるうちに、市街にも雪が降り出した。北海道で長いのは、云ふまでもなく、冬だ。この冬の間に、深い山林の木材が樵を以つ

て運び出されるのであるが、積雪のうち、ストーブの暖かい室内では、各種の濃厚な戀が行はれるのである。親子姦、兄妹姦の割合に多いのもそれが爲めだらう。一丈五尺の夜雪をおよいで、十丁餘もあろ隣家へ忍んで行つたほど熱心な乙女もあるのだ。その代り、北海道は意外に讀書家が多い。越年期が長いのが一大原因でもあらうが、また考へて見ると、內地にゐれば兎に角一廉のことがやれる人物が、ここへ來て商買なり百姓なりをやつてるのが多いからである。驚かれるのは、原中の一軒家のどん百姓を訪問しても、一通りの語は出來るし、新らしいビール瓶のあき殼が二つや三つは必らずそとにころがつてゐることだ。（明治四十二年十一月）

讀賣社の時計臺から

讀賣新聞社の改築中に、僕はそこの二階から三階にあがり、そこからまた絕頂の時計臺の上に登つたことがある。銀座の諸建築物中、殆ど第一等の高位を占めてゐるのであるから、東京市の下町全體は一目に見おろされる。若しそこに半鐘を据ゑつけ、火の番を置いて置くなら、恐らく東京一の警鐘が聽かれるだらうと思ふ。

建物の面積が狹い上に狹くなり、塔形の附加物が突兀として空天にそびえてゐるのだから、僕がその絕頂から——遠方をながめてゐる時は風景がいいので、まだしも呑氣な氣持になつてゐたが——直ぐそばの眼下を見おろした時は、目が暗んで、足もとがあぶない樣な氣がした。僕はこそ〳〵と下りてしまつた。かう云ふ時には、僕はいつも不思議にもいツそ飛び下りて見ようかと云ふ、あぶない勇氣が出るのだ。その度毎に僕は、子供の時、大阪の天王寺の塔へのぼつたことを思ひ出す。

僕は天王寺の高い塔の最上階から、何心なく、こわいのを忘れて飛び下りかけたが、手が欄干にとまつて漸く氣絕するのをまぬがれた。或人の實驗談を外國雜誌で讀んだことがあるが、高いところから飛び下りて死ぬのが一番樂な死に方ださうだ。この田淺草の十二階を飛んで死んだ人もあるが、目まひと空氣の急迫とにより、空間を落下する途中で、愉快な氣持で氣絕してしまうので、地上に當る時の痛みなどは全く感じないさうだ。今云ふ外國の落下者は、高い絕壁の上から落ツこちたのであつたが、跡から幸ひにも助けられたので、充分信用していい實驗を語り得た。高いところから飛んで氣絕するまでの瞬間——この瞬間が人間の仕事のほんとに出來る時だと、僕は思ふ。この心持ちを以つて人生にのぞめば、實行と文藝とは毫も區別がない。文藝、乃ち、實行、乃ち、人生である。

藝術至上主義も、佛蘭西のボドレルや英國のオスカワイルドの主張になると、一般技巧派の所謂「藝術の爲めの藝術」ではない。もう、外存的人生といふ樣な空觀念は大部薄らいで來て、內在的人生をすべて文藝のうちに攝取しようとしてゐる。それが今一歩自覺の境に進むと、僕等の文藝卽人生主義に到着するのであつたらう。ボドレルやワイルドなどは、まだ、こと更らに文藝を口實にして、罪惡

をかばふ傾きがある。近頃僕は、美術學校に於て、ワイルドの論著『インテンションズ』(思ふまま)中の一篇『ペン、ペンシル、及び毒藥』に就て演說をしたが、この評傳中の主人公エインライトが毒殺の手はじめに叔父をやつつけたのも、藝術心があるところから、風景のいい叔父の家を獨占する爲め、妻の母や妹を殺したのも、ます〳〵自分の藝術心を發揮する爲め、であるかの樣な論法を弄してある。

然し僕等は、ワイルドよりも一層危險だと云へば云はれようが、そんな申しわけを附加するには及ばない。申しわけを附けるだけ、世間の習慣的に云ふ罪惡を重大視してゐるのだ。僕等は何も罪惡の奬勵をするつもりではないが、それを區別的文藝で申わけする必要はあるまい。若し罪惡を實行した文藝家があつたら、さういふ罪惡的人生がその人の破壞的主觀にのぼつたのだと解釋していい。つまり高いところから飛んで空間に氣絕するまでの思ひ切つた瞬間の心持ち――之を持てる人は强者だ――一にさへなつてゐれば、世の罪惡などは自我と無關係で、何でもないことだ。要は、ただ人生に觸れ得たか、得ないかといふ點にある。

エインライトが毒殺を初めてから作つた繪畫が、毒殺を初めないうちに作つたのよりもずッと深い、手ごたへのある、立派な物であつたのは、罪惡その物の申しわけではなく、いよ〳〵人生に深く接觸した刹那を利用したからである。その刹那を利用するまでにはなつてゐなかつたとすれば、少くとも、それをあとから記憶的に體現し得たからである。兎に角、藝術と人生とが合致した瞬間を會得する時機があつたのだ。さういふ時機は、高いところから飛び下りると同樣、いのちがけでなければ得られない。そして、古典派や羅曼的派は、藝術または人生に餘裕を存じ得られるだけ、終生、その思ひ切りが出來ない。然し肉靈合致の新自然主義に至つては、容易にこの境地を獨占し得られる。これが自然主義の主張がないもの（古典派でも羅曼的派でもいい物さへ出來ればいいなど云ふもの）には、とても至り得ない。

假りにその刹那的實行までは發表し得ないのを普通だとしても、その刹那を現實的に踏破した經驗のあるものなら、古典派や羅曼的派の樣に呑氣にかまへてゐるものらの創作よりも立派な物が出來よう。僕が、他派の作物を退けても、藤村氏や花袋氏の自然主義――には矢ッぱし、その根本に缺點があるのを指摘しながらも――それに贊成する所以は乃ちそこにあるのだ。渠等にもまだ外存的自然とか人生とかいふ空觀念を考へる無自覺な態度があるにしろ、刹那的切迫の人生に向はうとしてゐるところが見えるだけ取り柄がある。僕が滋賀縣廳の英語通譯を委託されてゐた時、畫家なる若い外國婦人二名を石山に案內したことがある。同寺の寶物や所藏古畫を見せてゐるうちにおそくなり、歸りにはいい月夜であつた。兩婦人は人力車上で周圍の風景を非常に稱讚した。僕には、見馴れてゐるので、對した感嘆の情も起らなかつた。然し、若しこの兩婦人をここで殺害して、なほ且當りに警官または

探偵のゐないのを見澄ました上で、この風景をながめたら、どんなに面白い感じが浮ぶだらうと思つた。たださう思ひ付いただけでも、もう、僕の文藝に對する自覺は一歩を進めたのであつた。

詰るところ、讀賣新聞社の時計臺から飛下りる樣な覺悟――自覺的耽溺――でなければ、到底、現代第一流の創作または評論は出來ない。それが出來なければ古典的や羅曼的な第二流以下の文藝を以つて滿足しなければならない。僕等、新自然主義者等には、そんな小成に安んずることは出來ないのだ。新自然主義の成功不成功は、まだ決定することを得ないとしても、僕等が耽溺してまでも之を體現しようとしてゐる努力は、世人の充分に認めていいところだと思ふ。この努力は、時計の針が呑氣に時間を指して動く樣な種類のではなく、實に今や勃興しようとする新文藝の火の手に對する警鐘だ。

（明治四十二年二月）

車窓四季百觀

春　汽車に乘つて歩くのは春は面白い、呑氣で愉快で――。然しまア春と云へば花のよい所を思ひ出すものだが、さう云ふ所は、たとへば吉野にしろ嵐山にしろ只だ雜踏を見に行くやうなもので、大して面白くない。むしろ松の綠が煙つて居るやうな松原――どうせ海に對する松原のあるやうな所などは面白い。そんなのに適する所は須磨や舞子の濱とか東海道の海岸たとへば三保の松原と云ふやうな所がよい。

夏　夏では昨年初めてカラフトや北海道の夏に逢つて見たが、內地ではズツト熱い氣持のする時は却つて夏らしく思ふ。茅ケ崎の海岸に居ても九十九里の海岸にゐてもあつければ熱い程氣持ちが好いものだ。然し北海道カラフトに居ると熱いから氣持ちがよいのではない、さう云ふ感じようはむしろあまり熱くないから好いと云ふ方になる。カラフトなどでは夏の盛りに玉突場を明け廣げて玉をついて居ても矢張り大きな火鉢に火をカン〳〵起してゐる。北海道は左程でもない。然し札幌に住んで居て林檎や唐もろこしやココワなどを賣りに來る聲を聞くと、內地人には外國へでも來てゐる氣持がする。

秋　松島と琵琶湖畔とは四季の變遷を僕は凡べて知つてゐるが、秋などは一番よい時である。松島の富山に登つて寢轉んでゐると寺の座敷からズツト松島の全景が寢轉んだまま幽邃に見下される。

冬　冬は僕の旅行の中で最もよく印象が殘つてゐるのは國府津から三島の方へ出る間の景色だ。寒いやうで而かも空の色が溫かさうに赤づんでゐる夕方、富士の山がボンヤリとした霞のうちに而かも輪廓がハツキリと見えてゐる時などは何とも云へない。（明治四十三年二月）

滑稽の趣味

婦人は優しくツて萬事に趣味があつてほしい。男女同權とか、政治的運動とか、かういふことに關

係したいならしてもかまはないが、稀れにすべきことで、多くあれば困る。人心の激動して居る時代には隨分をんな豪傑が出て、男子にも劣らぬ力をあらはしたこともある。たとへば、佛國第一革命の際、ジロンヂストといふ穩和共和黨の首領ローラン夫人の如きは、その夫よりも勢力を振つた位で、つひに斷頭臺上の露と消えてしまつた。また、オルレアンの乙女と稱せられるジャンダークの如きは、政治上、宗教上におそろしい程の狂熱的仕事をして、燒き殺されてしまつた。

然し、かういふことはやつて見ろと云はれても出來る筈でもないし、またやつて見たところで、左程よろこばれることでもなからう。婦人は、既婚者にせよ、未婚者にせよ、その社會の地位上、どうしても、男子の慰藉者、融和者、つれ添ひ、思はれ人である。生存競爭場裏に立つて、男子が熱烈な活動は、その蔭にやはらかい心の手の抱くのがあつてこそ、不平もなく、怨恨もなく、失望落膽もしないで居られるのだ。優しい言葉、美しい眼、暖い胸、しとやかな衣、これがどれだけ男子の記憶に奥床しい力を與へるか、よく考へて貰ひたい。男子が無形の戰爭に於て、この力はダークやローラン夫人のそれに比べて、勝りこそすれ、決して劣らないのである。豪傑としてその名が歴史に殘るのも面白からうが、平時に於て、そんな婦人はえら過ぎて、細君に貰ひ手がならう。

文藝的素養の欲乏

婦人のえらいといふのは、殆ど無趣味だといふのと同意義になる。だから、えらいと云はれるよりも、窃かに貧民を助けてやつたり、人の後ろに附いて慈善會に奔走したりする方が、まだしもしほらしいところがある。然し諸方の慈善會的集合も、今日の狀態ではまだ趣味を以つて集まるものが少いらしい。耶蘇教の婦人會なども隨分無風流なものだ。なぜそんな狀態かといふに、智識と見聞との多少廣くなつて居る婦人社會に、まだ一般の文藝的素養がないからである。嫁入り盛りの娘までが、何かといふと、男勝り、男らしいといふことを誇りたがる。まるで五六人の子供をひとりで教育しなければならない、後家さんばかりが世間に渴望されて居るかの樣に思つて居るのだらう。男は男らしく、女は女らしくなつて貰ひたい、またならうと努めて貰ひたいものだ。

これは一般社會の發達して居ないせいでもあらう。眞面目腐る爲めに生れて來たかの樣な道學者、自分の野卑な育ちをフロックコートで隱さうとする俄紳士、境遇上高く止まらねばならぬが一向その道に慣れて居ない婦人、かう云ふ人々の多い世の中だ、中庸とか禮儀とかいふことにばかり腐心して、まだ天心爛熟の活き〳〵した天地を現ずる餘裕がない。たとへば、高尚な滑稽趣味を解することが出來るのは、その社會の人々が進步發達して居る一つの證據だが、わが國の現代では、それが廣く行き渡つて居るか、どうだか、疑はしい。二三人の談合では、隨分下手な駄洒落も云つて居ようが、社會の表面に出ると、急に澄まし込んでしまうものが多いので、浮かぬ物も云へなくなつて、兎角

話しが窮屈で、こと更めいて、『左樣』、『然らば』の切り口上になり易い。その眞面目さ加減と云つたら、まるで他國と今でも戰爭をおッ始めて居るかの樣子だ。

國民の趣味はポンチ

精神上の戰時費か通行稅でも取られて居る樣に、言葉の儉約、笑ひの遠慮、その身の引つ込み思案、ありとあらゆる窮屈な思ひをして、表面ばかりは倫理、道德、博愛、慈善などの知つたか振りをする。從つて、そんなことに關する書物ばかりが面白くなくつても尊い樣に思つて居る。その實、僞善と虛榮とを努めて居るのである。こんな無趣味な狀態から、本統の女らしい女が出ないで、却つて近頃亡くなつた奧村五百子の樣なえらい婦人が出るのは、ちつとも怪しむに足りない。成る程、愛國婦人會の發起は、日露戰爭の時であつたから、國家の爲めまた人民の爲めに、隨分利益になつたらうが、それはそれとして、實際を知らない滿洲に居た兵卒どもが、花の樣な女慰問使が來るといふので、大喜びに待つて居ると、懲役囚徒の樣な柿色の袖なし鎧を着て、西國巡禮の樣な菅笠の兜を被り、如何にもえらさうな女武者であつた。これには皆が興醒めてしまつたさうだ。そんな心掛けの婦人が、幸ひにお婆さんであつたから、嫁入り騷ぎもなくつてよかつたが、それにしても、もう、お茶飲み友達にも賴み手はなかつただらう。

或米國人がわが國の婦人記者を帝國ホテルに招待したことがある。その席で、男女同權の奔走をしたらいいではないかといふ奬勵をした米人に向つて、或年上の婦人が應答した話は面白い。『日本では、男子に權力が歸して居ますので、婦人はどうしてもその影武者になるのが當然のことになつて居ます。とてものことに、次ぎの世には、自由なアメリカに生れて來たいもので御座いますが』と、からかうと、米人もさる者、『その時は私があなたを貰ひましよう。』――『いや、それはまたその時のことに。』と、この位の洒落は、無邪氣で、また一般にあつてほしいものだ。一國人民の趣味はポンチ畫を見ても直ぐ分ると云はれる。英國では政治的のが歡迎され、獨逸では社會的のが流行する。わが國では、かの『團珍』があつた外には、『東京パツク』が新らしく出來たが、まだ〳〵滑稽趣味は正當に廣まつて居ないらしい。これは悲壯な方面にも深い趣味がない反證である。

英語のユーモア、乃ち、滑稽と云へば、詳しくは有情滑稽とも譯して、僕等の私談中に出る普通の洒落などと違つて、非常に高尙なものである。表面は淺薄な樣に見えても、その奧には深い〳〵意味の籠つて居るものだ。わが國では、一九の『膝栗毛』――これは、駄洒落または惡いたづらに落ちて居るところが多いが、かの伊勢參宮の途次で、梯子賣りに出逢ひ、梯子を値切つて見たところが負けられたので、已むを得ず、持て餘しながら、之を擔いで京都に出で、或茶店た休んで、忘れた振りをして梯子を置いて逃げると、彌次喜太八の風體の怪しいところから、かかり合ひになつては困ると思つ